アンデット・ターン！

空色レンズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンデット・ターン！

【Ｎコード】
Ｎ２８０８Ｋ

【作者名】
空色レンズ

【あらすじ】
※　現在不定期更新中。連チャンもあれば一ヶ月放置とかも普通にやらかしますスミマセンｏｒｚ　※　夏の風物詩肝試し、人数の都合上一人でお寺に向かった熊谷大輝は、のんびりお墓を眺めながら歩いていたら突然現れた大穴に落ちて、落ちて……辿り着いた先は真夜中の西洋墓地。いきなり別世界へ召喚された上、大輝を取り巻く面々はゾンビに人魂に蜘蛛女に骸骨戦士！　魔族のリーダーの一人に選ばれてしまった少年の、人と魔族を繋げるべく奔走するお話し。

（1）　～　肝試しと言えば肝試し？

古来より、この国には他の文化が生みだした化物共とは、一線を画する『妖怪』というものが存在している。八百万の神……どんなものにでも神は宿る。付喪神、というものが良い例だ。それすなわち、人ならざる身にて、人と等しい意識を持つものが現れてくる。知らず、人を助ける者もあれば、人に害なすもの……つまりは、妖怪とはそんなもの。

さて。

「いや、夏の風物詩肝試し大会というのは、まあいいんだ。自由にやればいいと思う。けれど、相方が逃げた状態の人間も放り込まれなければならないものか……？」

右手には雑木林、左手には四角い墓石の立ち並ぶ墓地が見える細い土の道を、一人の少年がぶつぶつとつぶやきながら、行灯型ライトを片手に歩いていた。平均男子よりもやや低めの背に、さらさらした黒髪が適度な長さで切りそろえられている。とろんとした目が印象的な眼鏡を掛けた顔は、上とも下とも言えず、中間の中間くらいの造作であった。

熊谷（くまがい）　大輝（たいき）は、またさらに、盛大なため息を吐いた。

事の起こりは数週間前。クラスの友人グループが人を集め、近くの海の家に一泊する小旅行を提案、その際近くにそれらしい雰囲気の山道や墓場があるから、肝試しもしてみようとなったのだ。最終的に集まった人数は十人。それぞれ二人一組のペアとなって、事前に下調べをされたコースを歩き、ゴールに設置された品物を持って帰ってくるという、ごくごく単純なルールのはずだった。

だが、小旅行当日。一人だけ『体調不良』という名目で旅行をドタキャンした者がいた。それが、大輝とペアになって肝試しに参加するはずだった人間である。

この場合、あぶれた大輝は他のペアのどこかに入れてもらうか、または一人海の家で待機することにするかの二択だろうと考えていた。さすがに一人で夜間の二キロの道のりは厳しすぎる。海の家に到着したばかりの頃は、他の面々もそう考えていた……はずだった。

「大輝、試しに一人で行ってみないか？　お前、あんまり怖がったりしたところって見たことないし」

このような馬鹿発言をする悪友、横田（よこたいずみ）出海がこの場にいなければ。

大輝は、確かにそれほどこの手のものを怖がったりしない。楽しんだりもしないが、林間学校で真夜中に教師の目を盗んで行なわれた百物語では、始終、話のつくりに感心するか、話のオチの弱さを指摘するかのどちらかであった。それでもまあ、ホラー映画やホラーゲームにはビビるし、実際に幽霊なんぞが目の前に出てきたら、失神できる自信もある。

なのに。ちょっと人より驚きにくいからって、そりゃないだろう。

「おい出海、お前ふざけたこと言ってるんじゃ」

「はいはいはーい！　山道で驚いてこけつまろびつして若干目を潤ませながら戻ってくる大輝が見たい人ー、挙手っ」

「「「はーい！」」」

「お前らあああああっっ！！？」

かくして、大輝は無理矢理一人参加で……しかも、最初の肝試し体験者に選ばれてしまったのである。

※　※　※

時刻は九時半。町を歩いていれば、警官に声をかけられるか、そのまま補導されるかしてしまうであろう時間帯である。しかし、ここはちょいと寂れた沿岸の漁村（言い過ぎ）、気味の悪さでは定評のある山道には、大輝以外人っ子一人いやしない。

「いや、ここで何かの人影を見ても困るんだけどさ」

さすがにそれは怖い、と身震いして、大輝はライトを持ち直す。なるべく早足で、雑木林と墓場の間の小道を抜けようとした。

そのとき。

チ　チ　チ　……

「ん？」

なにか、小さな鳥のさえずりのような音がしてきた。雑木林……からではない。墓場の方からでもなく、空からでもない。

下。

「……まあ、いっか」

空耳だ、と自分に言い聞かせて、空気が抜ける音しかしない下手な口笛を吹きつつ、大輝はずんずん歩いていく。今度はなんの音も聞こえなかった。五十メートルほど歩いたところで、ほっと一息をつく。

「えーっと、道なりだから、あれを曲がったらゴールだな」

まったく、やはり幽霊なんかいないのだから、ちょっと木の葉がこすれあうような音を我慢すればあっという間にたどり着けてしまう。むしろあの騒がしい相方がいなくてよかったカモ。そう、思った瞬間に。

「え？」

ライトが消えて、足下の地面の感覚も消失した。

悲鳴すら上げられないまま、大輝は暗闇の中へと一直線に落ちていった。

（1）　～　肝試しと言えば肝試し？（後書き）

さて、始まりました異世界トリップ小説。今までずっと書きたくて書きたくてしょうがなかったジャンルですｗ　しかし、こちらには魅力的な異世界トリップ小説がたくさんあって……目の肥えている皆様にどう受け取って貰えるかビクビクです……。

それでは、多分近いうち更新停止になる可能性が高いですが（え）、よろしくお願いいたします！

（2）　～　深夜の西洋墓地にて

ぴゅう、と寒々しい風に全身を撫でられて、大輝は身震いしながら目を開けた。

「う、うう……なに、一体、何が？」

軽く頭を振って、周囲に視線を巡らせる。月が雲に隠れてしまっているため、あまり詳しい様子は分からないが、大輝の背よりもさらに小さめなシルエットが、いくつも点在しているのが見えた。

「墓場、のほう？　俺、いつの間に柵越えてたんだろ」

かち、と手に持っていたライトのスイッチをいじる。だが、ライトは沈黙したままで、大輝は思わず舌打ちをした。

「新しい電池にしておいたって言ってたのに……出海のやつ、俺のだけ使い欠け寄こしたな」

それでも捨てるわけにはいかず、役に立たないライトを持ったまま、大輝はとりあえず頭上の雲が晴れるのを待った。こう暗いと、迂闊に歩き出すことも出来ない。はあ、とため息をつきながら俯いて。

さらり。

……何か、感じたこともない妙な感触が、首筋を滑り降りた。

「おっ！？」

思わず鳥肌を立てて、大輝は茫然としながら、ゆっくりとそれに手を伸ばす。鎖骨の辺りを撫でてみると、存外あっさりとつかむことが出来た。

髪の毛、である。それも、ずいぶんさらさらとしていてたまに触ってしまうクラスメイトの女子達のものより手触りがいい。

「でえええええええっっっ！！？」

投げ出して、悲鳴を上げながら大輝はその場を駆け出した。とたん、大きな段差に足を取られて、びたんっと地面に身体を叩きつける。

「って、え？」

じんじんと痛む鼻先を押さえながら、大輝は自分が倒れ込んだ地面を手探りで調べた。少しざらざらとしているが、若干弾力の土である。あの時隣に見えていた墓地は、大体の道は石畳で舗装されていたはずなのに。

「え、ちょ」

ゆっくりと起き上がって、今さっきけつまずいたばかりの段差の方へも目をやる。高さは大輝の膝よりも少し上くらいで、階段と言うには少し高低差が大きすぎる。疑問符を頭上に浮かべながら、大輝は改めて立ち上がり、薄暗い周囲を見回した。点在していた墓石らしきものは、先ほどよりもずいぶんと小さく見えた。

「ちょっと、待てって。ここ……」

さあっと、大輝の動悸が収まらないうちにという最悪のタイミングで、雲の切れ間から月明かりが差し込み、世界を照らし出す。大きく目を見開いた大輝は、「嘘だろ」とだけつぶやいて、ライトを足下へと落とした。

彼の周りに広がっていたのは、およそ見たこともない、荒れ果てた西洋風の墓場であった。

※　※　※

あまりに唐突な目の前の光景に、意識を失いかけながらも立ち続けてしばし。

「……はっ」

もう一度、身体を撫でてきた寒風によって身震いし、大輝はようやっと己の時間を取り戻した。

「待て、待て待て待て」

目を閉じ、目頭をぐりぐりともみほぐして、そのまま両手でぐいーっと頬をつねりまくる。うっすら涙を浮かべた状態で、もう一度目を開いてみるが、風景が変わることはない。Tシャツでいることが信じられないくらい、寒々しいこの世界。

「なんなんだ、これ」

じり、と後退して、ふと自分がもともといた段差の方を振り返ってみる。そして、すさまじく後悔した。段差だと思っていた場所は、

そのまま長身の人間が一人寝そべれるくらいの広さがある、地面にぽっかりと掘られた四角い穴だった。しかも、ご丁寧にその隣に、穴をしっかりと覆える大きさの木の板と石版が重なって置かれている。

え、どういうこと？

「……俺、死んだ、て？」

あまりに不可解すぎるこの状況で、とうとう大輝の言語能力も崩壊し始めた頃。

ざしゅ、ざしゅ

まるでスコップで砂場を掘るような、軽い音が聞こえてきた。最初はやや遠くから、次第にゆっくりと、大輝の近くに。ただ、茫然自失としている大輝はそれに気付かない。

ざしゅ、ざしゅん！

音は、とうとう大輝の足下にまで近づいてきた。そこでようやく、大輝も奇妙な音に気付き、視線を下げる。

「な、ばあ！？」

地面から、手が突き出ていた。どこかのＲＰＧでみたことがありそうな、どろどろっとした手首から上のモノが。それがわきわきと握ったり開いたりを繰り返しながら、大輝の足下でモグラ叩きよろしくな素早い移動を行なっている。

一気に全身の力が抜けて、大輝はその場にへたりこんでしまった。少し慌てた様子で、足下をうろちょろしていた泥の手も大輝から距離をとる。ぽかんと口を開いたまま、その手を眺めていた大輝は、一瞬のち酷い耳鳴りを覚えた。

「いって……！」

「……ブ、スカ～？　ダイジョウブ、ですか？　大丈夫ですか、ネクロマンサー！？」

ギィイーンという、大音量のハウリングのような耳鳴りが治まってくると、今度は自分以外の聞き慣れない声が聞こえてきた。どうやら自分のことを心配してくれているようではあるのだが、はて。

「……まさか」

つぶやいて、大輝はゆっくりと泥の手に視線を向ける。大輝と目が合った（かどうかはわからないが）泥の手は、びくりと一旦動作を止め、ぐぐっと何か力を溜め込むような仕草をした。その次の光景に、大輝は本当に意識を手放したくなった。

するっと音も立てずに手の下から腕が伸び、肩が現れ、もう一方の腕も現れ、頭と上半身が現れて……最後はどこぞのホラー映画で見た『あれ』のように、両手で地面を押しのけながら、しっかりと下半身を引き上げた。『それ』は軽く全身を振って、意外と人間と大差ない素早さで身体を動かし、満面の笑みを浮かべた顔を大輝に向けた。

「あ、ネクロマンサー。いきなり倒れてしまってびっくりしました。お加減はいかがです？」

……表面の肉が腐り落ち、右の頬の骨が完全に露出した、ゾンビそのものの顔を。

「っぎゃあああああああああああっっっ！！！　ぞ、ぞ、ぞ」

「え？」

腹の底から悲鳴を上げて、尻もちをついたまま全力で後退し始め

た大輝を、そのゾンビは大きく首を捻って眺めた。その拍子に、またぼろっと逆の頬肉も落っこちる。

「おやおや、まったく、これじゃースカルになっちゃうじゃないですか」

そういって軽く笑ったゾンビは、地面から落ちた肉を拾い、また頬にべちゃりとくっつけて、大輝の方を見やった。ガタガタと全身を震わせている大輝は、もう、言葉も出ない。

「えーっと、ネクロマンサー、ですよね？　封印の棺も開いてますし、雰囲気もまさにそうですし」

「ね、ネクロマンサーってなんだよ。俺は、ただの中学生だっ」

じたばたともがきながら、大輝はさらにゾンビと距離を置こうとする。その鼻先を、青白い光りがゆっくりと通り過ぎた。

「ひっ！？」

「ね、ネクロマンサー、私に驚くのは、まあ構いませんけど、さすがにホロウフレアまで怖がることはないじゃないですかあ」

そこいらじゅうに現れた、大輝の頭ほどの大きさの青白い火の玉。それらを示しながら、ゾンビは苦笑を浮かべて、ゆっくりと大輝に近づいてきた。

「うっあ、こ、ここ、ここはどこだ、どこだよっ」

「ここは忘れられた永久墓地。私たち『アンデット』の憩いの場所ですよ。そして」

大輝と三メートルほど間を開けたまま、ゾンビは答える。

「『アンデット』のリーダーたる死霊使い（ネクロマンサー）が生まれ落ちる場所！……というわけで、改めまして始めまして、新たなネクロマンサー、我らがリーダー」

ぺこりと目の前で頭を下げたゾンビに、周囲を漂う火の玉、少しずつ影を見せ始めてきた異形の姿を見て、大輝は問答無用で理解させられた。全く持って、ついていない。

ここは、自分がいた世界ではないのだと、大輝はそう確信した。

※　※　※

「落ち着きましたか？　ネクロマンサー」

なんとか根性で足腰が使えるようにし、距離を置いてくれている（大輝を気遣っているのだろう）ゾンビの案内で、大輝は墓地の中央からやや外れにある、陰湿な雰囲気をかもし出している一階建ての家へと連れてこられた。一部窓にヒビが入っていたり、壁にツタが絡まりまくっていたりしているが、特にオンボロというほどでもない。

「頑張って、みんなで手分けして整理していましたから」

ふふん、と鼻息を強くして、大輝の表情から読み取ったゾンビは誇らしげに答える。泥の擬態を解き、皮のずる剥けた手でドアノブを握り、ゆっくりと開いて大輝を中へ促す。

「どーぞどーぞ」

「……じゃあ、お邪魔します」

にこにこ笑顔のゾンビの示すままに、大輝は家の中へと入っていった。必要最低限の家具もそろっていて、とりあえず、大輝は入ってすぐの部屋に置かれていたダイニングテーブルの一席に座った。その正面にゾンビが座ると、わらわらとあの火の玉が部屋中を飛び回り始める。

「え、ええ!?　なんだなんだ」

「慌てなくても大丈夫ですよ。新しいネクロマンサーが来てくれて、彼らも喜んでるんです」

無論私もね、と付け足して、ゾンビはさらに笑みを深めた。持ち上げられた左の頬肉が、またぷるぷると震えている。今にも落ちそうで、大輝は彼の顔を直視できなかった。

「な、なあ、そのネクロマンサーって言うのは、さ、やっぱり俺のこと、なのか？」

「そうですよー、他に誰がいるっていうんです？」

「ネクロマンサーになったヤツは、えっと、あなたたちのリーダーになるって言うのも本当？」

「はいはい～」

「……俺、人間なんだけど、いいの？」

「ええ？」

大輝の疑問に、一瞬空気が凍った。しかし、すぐさまゾンビがそれを打ち消す。

「そりゃ無いですよ。確かに身体のつくりとか、気配とかは人間そっくりですけど、あなたから溢れる力はまごうことも無き魔族のも

のです。ほらっ、そんなに素敵な黒髪も持ってますし！　さらに黒い目っていうのも、なかなか珍しいですね」

「素敵な、黒髪？」

そこで、大輝はやっと自分の頭が平素よりも重たいことに気がついた。ぶんぶんと振り回すと、ばさばさと長いものが顔面に当たる。恐る恐る両手で頭を押さえ、髪を掴み、ゆっくりと離していく……胸の辺りまで髪の感触が途切れなかったことに、大輝は愕然とした。

「髪が、伸びてるぅっ！？」

いっそ気持ち悪いほど、クラスの女子の平均的な長さ以上まで伸びてしまっている。うわーきゃーと悲鳴を上げながら髪をむしろうとした大輝だったが、素早く腕にくっついてきた火の玉のせいか、一部分だけ金縛りに遭ってしまったかのような感覚に陥る。

「ちょ、な、ぎゃー！？」

「ネクロマンサー、ちょっと落ち着いてくださいよ、まったく。……そうだ、自己紹介とかすれば、ちょっとはのんびりできますかね？」

悲鳴を上げる大輝を見ながら、ゾンビは軽く手を叩いて一人話し始めた。

「私の名前はデルフェール。気軽にデル、とお呼び下さい。見ての通り、アンデット・ゾンビです。今あなたの手を押さえている火の玉たちはホロウフレアといって、一応それぞれに人格もあるんですよ～。まあ会話が出来るほど意識がはっきりしているものは、少ないですけど」

さあどうぞ、と言わんばかりに右手を大輝に向けるデルフェール。
大輝は動かない両腕に憤慨しつつ、ややぶっきらぼうに答えた。

「熊谷　大輝。熊谷が家名で大輝が名前だから。十四歳」
「タイキ様ですね、って、十四歳って幼すぎじゃないですか！？
てっきり十歳かそこらかと」
「……デル、あんた結構ストレートに人のコンプレックス指摘するな。ていうか十歳そこらは言い過ぎだろ！」

低い身長と垂れ目の効果で、下手に気を抜いた私服で町を歩くと未だに小学生に間違われることもあった大輝。デルフェールの一言で、同級生（八割方悪友）にさんざん言われた記憶が甦り、ホロウフレアの金縛りがなければ椅子の上で崩れ落ちてしまうかもしれないほど、大輝は脱力した。

「うっ、うっ、もーやだ。なんだよ、なんだよ……」
「いえ、だから、そのーさっきからいっぱい言ってるんですけどねー？」

とうとう泣き出してしまった大輝を見て、デルフェールやホロウフレアたちはわたわたと慌て始めた。とりあえず、デルフェールはホロウフレアたちにまだ大輝の身体を支えるように言って、自分はポケットからぼろぼろの布きれを引っ張り出し、それを右手にしっかりと巻き付けて、大輝に近づいた。
ぽす。

「泣かないでください、ネクロマンサー。泣いてるリーダーを見るのは私たちも悲しいです」

布で覆ったただれた手で、デルフェールも今にも泣き出しそうな

表情を浮かべて、大輝の頭を撫でた。驚いたように顔を跳ね上げた大輝は、一滴、涙を目尻からこぼすと。

「うううーっ！」
「わわっと？」

獣のように呻いて、目の前にあった虫食いだらけのデルフェールのシャツに掴みかかり、頭を預けた。泥で汚れているとか腐っているとか、そんなのはもうお構いなしだった。先ほどまで怖くて仕方がなかったこのゾンビが、とても温かな心を持っていると知ってしまったら。

ひどい臭いが移ってしまう、そう思って大輝を引きはがそうとしたデルフェールだったが、背中を丸め、全身を震えさせながら嗚咽を響かせるこの小さなリーダーの姿を見ては、そんなこと、できそうにもなかった。せめて崩れた肉が長い髪に絡まないようにと、布で保護した右手でゆっくりと頭をなで続けた。

（2）　～　深夜の西洋墓地にて（後書き）

前回のタイトルをミスったような……ま、まあ、初めてなので！（おい
というわけで、落ちてきました主人公。これから頑張って貰いましょう。

……誤字脱字を発見された方、報告していただけるととても助かります；

（3）　～　ネクロマンサー、お披露目！（前書き）

ここからは、主人公の名前もカタカナ表記になります。

※　デルフェールが地の文で『デルフォール』『デル』になってました……慌てて修正；　まだあったら教えてくださいｏｒｚ

（3）　～　ネクロマンサー、お披露目！

ぱちん、と最後のボタンを留めて、タイキは小さく頷いた。振り返って、確認を取る。

「デル、こんな感じ？」

「似合ってますよ、ネクロマンサー！　あと、こっちが手袋で、こっちがマントです。あったかいですから、ちゃんと着てくださいね」

「ありがと」

にこにこと崩れかけの顔で笑うデルフェールに、未だ完全に慣れきってはいないタイキはなんとか引きつり笑顔を返すと、彼の手から受け取った品を素早く身につけた。

混乱する中、ひとしきり涙を流して我に返ったタイキは、自分の身体が冷え切っていることに気付いた。もうゾンビや火の玉に怯えている暇はない――彼らにも敵意はなかったことだし――ということで、何か自分の身体に合う防寒具を要求した。夜だったとはいえ、元の世界は夏真っ盛り。タイキもそれに合わせて薄目のダメージジーンズにドクロのワンポイントが入った黒いＴシャツ、スニーカーという出で立ちだったのだが、この永久墓地という場所は秋か、酷ければ初冬のような寒さだった。まあ、雪が積もっていなかった分だけマシだが。

そんなこんなで、「まあなんかゴースト系統がいるところだから、望み薄かな。俺ここで凍死かな」とか考えていたタイキなのだが、意外や意外、この一軒家にはそこそこな種類の衣服が、いつでも着られる状態で保存されていた。

「ネクロマンサーはいろんな命を持つ者がなりますから、この永久

墓地の気候に馴染む前にお亡くなりになってしまった方もいることですし、こういうことの備えはいっぱいしているのですよ～」

衣服の収められた宝箱を抱えてきたデルフェールは、やっぱりにこにこしながら、宝箱からタイキのリクエストに応えられ、なおかつ彼に似合う意匠のものを探し出した。

黒を基調とした、銀色ボタンのナポレオンコート。ちょっと薄目の青色をした厚手のジーンズらしきズボン。黒いなめし革のブーツ。足首まで覆うフード付のマントに、洒落た革手袋。

どれもこれも無難なコーディネートで、タイキは一も二もなく飛びつこうとした。が、最初はやっぱり躊躇ってしまった。どう見ても、マント以外は彼の体格より二十センチくらい大きい男性が着るようなサイズのものばかりなのだ。せっかく選んでもらったのに、と項垂れるタイキだったが。

「ネクロマンサー、試しにこのブーツ履いてみてください」

ぐいっと無理矢理差し出されたブーツへ、半ば投げやりに足を突っ込んでみるとアラ不思議、するするとブーツは縮んでいって、タイキの足にちょうど良くフィットするサイズになってしまったのだ。着脱もこれ以上ないほどスムーズに行える。他の衣服にも同じような細工が施されているとデルフェールに言われて、ようやっと、タイキは自信の身を寒さから守るものを手に入れることができたのだ。

準備してもらったものを一通り装備して、タイキはひととき、ほこほことした気分を味わった。

「あったかー」

「それはよかったです、ネクロマンサー」

「……なあ、デル」

「なんでしょう、ネクロマンサー？」

「その、ネクロマンサーって言うのやめてくれない？　タイキでいいよ。そっちの方が短いし」
「え、いいんですか？」
「うん、あとその敬語も。なんかゾンビの年齢とか分かんないけど、明らかに俺よりは年上だろ」
「ええと、年齢とは関係無しに、ネクロマンサーは私たちの上位個体なので、うーん、……個人的に敬語は勘弁していただきたいのですが、名前くらいなら、本当によいのなら」
「うん、いいよいいよ」

タイキが笑って許可を出すと、デルフェールは一層嬉しげな表情を浮かべて「タイキ、タイキ」と連呼した。

「髪の毛も、まとめた方がいいですよね。なんだか動きづらそうでしたし」
「そうそう、なんでこんなに伸びたんだろ？　ほんっとーにビックリした」

前髪だけはなんとか無事だけど、と適当に一房つまみ上げたタイキは盛大なため息をついた。どこからともなく取り出された組み紐で、ホロウフレアたちが素早くタイキの髪をポニーテールにする中、タイキはぼそりとつぶやく。

「なあデル、これ切っちゃダメか？」
「ダメですよ！　髪の毛には力の何割かが宿るって言われているんですから、タイキは絶対に髪を切ったらダメです。もし誰かに……ああ、それはないですね」
「へ？」

何かを言いかけ、途中で自己完結したデルフェールに、タイキは

怪訝な表情を浮かべる。それに気付いたデルフェールは、何でもないですよと早口に言って、布を撒いたままの右手をタイキに差し出した。

「さて、じゃあお披露目に行きましょう、タイキ」

「え、ちょ、お披露目って？」

「新しいネクロマンサーがやってきてくれたって、ここにいるアンデットたちに知らしめるんです。大丈夫です、みんな貴方のことを待っていたんですよ。貴方に危害を加えようなんて輩、いたら私がやっつけてやります！」

気合いの入った顔で、勢いよく左腕を天井に突き上げるデルフェール。つられるように周囲のホロウフレアも旋回する勢いを強めた。瞬間、べちゃ、と粘着質な音が響いて、デルフェールの肘から半ばがあり得ない方向に向けて折れ曲がってしまった。

「ありゃりゃ、こりゃ大変」

状況と台詞のわりにあまり焦っていないような様子で、デルフェールは折れた左腕をぐちゃぐちゃといじる。やがて安定したのか、しっかり手の平まで動くのを確認して、デルフェールはにこっとタイキに笑いかけた。

「すみません、それじゃあ行きましょう！」

「は、はは、はー……うん」

やっぱゾンビなんだなあ、とデルフェールのことを再認識しつつ、タイキは渇いた笑い声が自分の口から漏れ出すのを止めることができなかった。

※　※　※

デルフェールやホロウフレアたちに囲まれて連れて行かれたそこは、タイキがこの永久墓地にやってきた墓穴の場所だった。ただ、タイキが目を覚ました墓穴は、畳二枚分くらいの面積をもつ石造りのステージで塞がれていて、その周囲を、明らかに人ならざる者達が取り囲んでいた。

真っ黒な肌をして、とがった角と翼と牙を持つ白目のない少年は、悪魔。

よく悪魔信仰などの絵で見る、巨大な鎌を抱えた山羊の頭をもつそれは、魔人。

半透明な身体を震わせて、たまにぼこりと気泡を吐き出している謎物体は、スライム。

他にも理科室にありそうな骨ホネたちの集団に、ぼんやりと人型のシルエットを揺らめかせているゴースト、デルフェールに似ているが彼よりも動きの遅いゾンビなどなど。あとは、先ほどのネクロマンサーの家からついてきたものよりも大量のホロウフレアたちが、そこら中を飛び回っていた。

「さあさ、ネクロマンサーのご登場ですよー！」

「ちょ、デル！？」

いきなりの発表に驚いて身を固くしたタイキだったが、瞬間、何十何百という人外立ちの視線にサラされ、その場から一歩も動けなくなってしまった。

がちんがちんに硬直してしまったタイキを見て、穴だらけの甲冑と話をしていた悪魔の少年が、かかかっと笑って近づいてきた。

「見た目はすっげぇ弱っちそうだけど、力の方は申し分なしだな！　美味そうな匂いだし……ほら、早く来いよ！」
「リジェラス、ネクロマンサーになんて口を！」
「いいだろ別に。俺とヴォーゴのおっちゃんはディアボロ様に忠誠を誓ってるんだからさ。ていうか、アンデットのほうがちょっとざっくりしすぎな気もするぜ？　なんでネクロマンサー『様』ってつけねーんだよ」

けらけら笑いながら、悪魔の少年リジェラスはタイキをステージの上へ引っ張り上げた。その後ろを、急いでデルフェールが追いかける。ステージの中央に立たされたタイキは、そのままぐるりと身体を半回転、こちらをじーっと見つめる人外たちを見下ろす形となった。

（わーっ、わーっ、わーっ!?）
「……おーい、どうした？　名前言って、これからは俺が主だーって言えばいいだけだって」
「ま、まあそんな感じですよ。頑張ってください。あ、なるべく大きめの声で」

後ろからひそひそと指示を受けて、タイキは一旦深呼吸、息を吐ききり、吸い込んで、ぴたりと動作が止まった。しん、と張り詰めた沈黙が場を支配する。

「っタイキ・クマガイ！　十四歳の新米ネクロマンサーです！　いろいろ分からないことだらけですがよろしくお願いしますっ」

ずるべしゃ。
腹の底から大声で宣言したタイキの背後で、リジェラスとデルフェールが同時にすっ転んだ。振り返ってそれに気付いたタイキは、

青くなって両手をばたつかせる。

「え、え？　俺、俺なんかまずいこと言った！？」

「い、いや、まさか自分より格下の魔族によろしく言うとは思わなくて……」

「あははー、タイキらしくていいですね～。あ、そうだ、みんなーもう一つネクロマンサーのお言葉です。タイキって名前でお呼びして構わないそうですよ～！」

なんとか復活したデルフェールは、壇上からヒラヒラと控えめに手を振りながら叫んだ。彼の言葉で、魔族立ちの間に戸惑うような空気が流れる。

「それじゃあ、タイキ。これが最後の仕事です。これに両手を乗っけてください」

よいしょ、とステージの中心にあった取っ手を掴み、全身がバラバラになってしまうんじゃないかと思うほどに力を込めたデルフェールは、ゆっくりとそれを引き出した。ガコンガコンと二段階で引き出されたそれは、ちょっとした石柱で、タイキの身長よりも少し大きいくらい。そして、タイキの視線の目の前当たりに、つるつるに磨かれた丸いプレートのようなモノがはめ込まれていた。

「……ここ？」

「はい、多分タイキは初めてなので、手形がつくと思いますよ。こう、ぎゅーっとやってください」

デルフェールに言われたとおり、タイキは適度に力を緩めて、プレートに両手を押しつけた。銀か何かのような気もしたのだが、それは粘土のようにぐにゃりと変形して、一センチほどタイキの手の

平の形にへこんでしまった。手がそれ以上押しつけられなくなって、ここからどうすればいいのかとデルフェールの方を見ようとしたタイキだったが、足下から脳天から、とりあえず全身を渦巻く妙な感覚が、胸に集まり肩を通り手の平に伝わって、石柱に吸い込まれていくのを感じた。

（なんだ？）

気持ち悪くはないが、なんともくすぐったいような奇妙な気分になって、タイキは顔をしかめた。すると、ステージの周りで魔族たちが口々に歓声を上げる。

「おお、おお！」

「素晴らしい……今代のネクロマンサーは素晴らしいぞ！」

「力がみなぎるー！　ひゃっほう！」

「へ？」

きょとんとして、手をプレートにくっつけたままステージの下を見てみると、狂喜乱舞している魔族たちがいた。……いや、あの山羊頭の魔人らしきものやリジェラスは平然と突っ立っている。どうやら、デルフェールのようなゾンビやスライム、ホロウフレアなどが妙な高揚感を味わっているようである。

「で、デル。これって一体？」

「おお～、さすがはタイキ、なんとも味わい深い力です」

「デル、聞いてる？」

「ああはい、今はそこの石柱を通して、私たちアンデットにタイキの力を分けてもらっているんですよ。あ、御気分が優れないようでしたら、もう離していいですよ」

「気持ち悪くはないけど、じゃあ、離す」

プレートからタイキが手を離すと、おお、おお、と呻いていたアンデットたちは次第に冷静さを取り戻していった。先ほどよりも動きが素早くなっていたり、嬉しげだったりと、どうやら彼らに対してタイキの力というモノはかなりプラスに働いたようだ。

「……ねえデル、後でいいんだけど、やっぱもうちょっとこのへんのことについてよく教えて。俺のことは着替えのときにちょっとしゃべっただろ」

さらに小声で、タイキはデルフェールにささやいた。俺のこと、とは、タイキ自身がここは全く違う世界から来たかもしれないという、いわゆる異世界トリップ説のことである。もしもタイキのいた世界で、たとえ西洋であったとしても、夜に現実でゾンビが徘徊するような地域があれば大パニックになっているはず。

タイキの言葉に頷いたデルフェールは、大仰に手を振って一礼した。タイキから見ると、その動作はまるで喜劇に登場するピエロのようであった。

「では、これにて新たなリーダー、ネクロマンサーのタイキのお披露目を終わりたいと！　『供給』のあとですので、しばらくは館に押しかけないでくださいねー。じゃ、行きましょうタイキ」

「あ、うん」

デルフェールに促され、タイキは思わず彼の手を……布の巻かれていない左手をつかんでしまった。デルフェールや近くにいたリジェラスは酷く驚いた表情を浮かべたが、タイキは革の手袋をはめているし、会ったばかりの時に比べデルフェールの身体はずいぶんと崩れにくくなっているようだったので、抵抗は少なかった。

「あー、ごめん、握っちゃダメだったか？」

固まったデルフェールを見て、慌てて手を離そうとするタイキだったが、そう言った瞬間に素早く手を握り返されて、ほっと息を吐く。視界の端で「信じらんねー」とリジェラスがつぶやいたのが見えた。

「いいえ、いいえ。……では、帰りましょう、タイキ」

デルフェールは、今までタイキが見ていた中で一番の笑顔を浮かべていた。

※　※　※

デルフェールが魔族たちに『館』といった、タイキからしてみればちょっと天井高めの平屋にしか見えないネクロマンサーの住居に辿り着き、リビングの椅子に座ったタイキはばさりとマントを脱いだ。

「うわ、なんか部屋が暑い」

「暑いですか？」

「んー、でもこのコート脱ぐ程じゃないかな。なんかしてたの？」

「ここを出る間際に、タイキが過ごしやすい温度になるように仕掛けをいじっておきました。いくらでもいじれますから、快適な温度探します？」

「んーん、ごめん。あったかくてちょうどいい。これくらいならマント脱ぐくらいでまだちょうどいいかも……寝るときとかはもう少し、暖かい方がいいかな」

「本当に人間みたいな感覚をお持ちなんですねぇ」
「だからさー、言ってるだろ。俺は人間だって」
「ううん、今はタイキも私たちと同じ魔族ですよ～。まあ、ちょっと驚きましたが、転生前が人間だって言うのも信じますけれど」
「……ちょっと待て、デル、今転生って言った？」

彼の口からぽろっとこぼれた単語に、激しく動揺するタイキ。タイキから受け取ったマントを壁のフックに引っかけたデルフェールは、何でもないように続けた。

「ええ、我々魔族の各種族のリーダーは、一度転生することでその役目を負う資格を持ちますから～」
「……そこらへんも、本当に、全部教えて」
「はい、じゃあまず座りましょう」

最初にこの家に来たときと同じような配置に座り、周囲を泳ぐように浮かんでいるホロウフレアを気にしながらも、タイキはデルフェールが話すのを待った。

「えー、まずはこの世界のことを、私が教えられる限りに。この世界には、表とか地上とか呼ばれている場所に住んでいる人間と、裏とか結界とか呼ばれている場所に住む我々魔族に、おおよそ分かれていますね～」
「……神様とか、いちゃったりする？」
「一応いますけれど、神は人間に味方してるだけ、力を貸すだけで、自分で出しゃばってくることはないですね。たまに神の力を体に宿した存在だとかが現れて、私たちはビクビクものですけど」

ちょっと肩をすくめるデルフェール。

「で、このフォリアル永久墓地も、フォリアル王国っていう人間の国に入り口がある結界の中なんですよ。アンデット種族の魔族たちが生まれ集うところです」

「魔族って、種類があるわけ？」

「はい、私が知っている中でも四つには分けられます。一つは私たちアンデット、先ほど会ったリジェラスのようなデーモン、獣の姿をとるビースト、一番人間に近しい姿のヴァンパイアですね。そして、それぞれにリーダーである最上級魔族の死霊使い（ネクロマンサー）、魔神（ディアボロ）、戦獣王（バルバロイ）、吸血貴族（ヴァンプ）がいます。それ以外の魔族は、力の強さで上級魔族と下級魔族に分けられます。下級魔族は、俗に人間に『魔物』と呼ばれたりもしますね」

いきなりの情報量に翻弄されかけながらも、目をつむったタイキは指折り数えながら、デルフェールの言ったことを反芻した。

「えーと、魔族は四種族いて、アンデットとネクロマンサー、デーモンとディアボロ、ビーストとバルバロイ、ヴァンパイアにヴァンプ……こんなん？」

「はい、はい！　飲み込みが早いですね、さすがタイキです」

自分のことのように嬉しがったデルフェールは、さらに話を続ける。

「では、各種族のリーダーの選定方法ですけれど、これは各種族の中でも力が強い者が選ばれるらしい、ということ以外は分からないんですよねー。リーダーになるかもしれないほどの力を持った者の中で、世界の意志と便宜上呼びますけど、そんなものに選ばれた者が転生を行ない、最上級魔族の地位と特殊能力を授かるんです」

「……はあ、特殊な能力ねえ。俺もなんか持ってんのかな」

「もちろん。あ、疑ってらっしゃるんなら、ほら、あの石柱を通じ

て同族の魔族に力を分け与えられるというのも、各リーダーの特殊能力の一つなんですよ。まあ、タイキ特有の能力は、タイキ自身が気付かない限り分かりませんけれど……」

「へえー、うん、そこらへんは気長にしておけばいいから……」

一通りの話を聞き終えて、タイキはコートの前のボタンを全て外し、大きく伸びをした。息を吐いて、真剣な表情を浮かべてデルフェールを見つめる。

「じゃ、なんで俺がその世界の意志とやらに選ばれて、ネクロマンサーになったんだ？　全く違う世界の、しかも人間なのに」

「ううーん、私には答えかねますけれど、こちらの世界の人間とは違う点で、ネクロマンサーにふさわしい条件をお持ちだったのでは？　それで、世界の意志はタイキをこちらの世界へ招き、その過程で転生を行なったと。こちらの世界で人間が魔族のリーダーになるなんて前代未聞ですけれど、異世界なら何でもありって感じしますしねー」

「いや、こっちの世界の方が何でもありだと思うんだけど……」

苦笑を浮かべて言い返したタイキに、デルフェールは若干不安の色を滲ませて言った。

「まあ、タイキは見た目がそのまま人間ですしねー。あのお披露目で大体の人達はタイキのことをネクロマンサーだと認めてくれたはずですけれど、まだお一人で墓地を歩かないでくださいね」

「うん、ていうかホロウフレアがずーっとついてきてるから、あんま一人って気はしないけど」

周囲をふわふわと漂っている青白い火の玉たちを指さすタイキだったが、デルフェールは残念そうにふるふると首を横に振った。

「ホロウフレアは、魔族相手だとちょっとした足止め程度にしかなりませんし、魔法を使われたら一発でやられてしまいます。今のところは私から離れないでくださいね」
「あの……リジェラスってヤツは？」
「ああ、先ほども言ったとおり、彼はデーモンですから。貴方の支配下にある魔族ではないので、二人で行動するのはせめてタイキに抵抗する能力があるかどうか分かってからか、それか彼の方が本当に貴方に危害を加えることがないとはっきりしてからですね～」
「同じ魔族なのに？」
「違う種族だからです。えっと、まあ魔族内での異種族間関係もおいおい教えます」

ややこしいもんだ、と声に出さずに呟いて、タイキはもといた世界に思いを馳せた。だが、今どうしようもないことを考えてもしょうがない。
この日から、熊谷大輝は異世界にて魔族のリーダーを務め始めることとなった。

（3）　～　ネクロマンサー、お披露目！（後書き）

イロイロ出てきました、人外ｗ
とりあえず、初期の方でちょっとクールぶっていた主人公も、話が進むにつれてだんだん子どもっぽくなったり壊れたりしてきますが、それもまあ頑張って異世界に順応しようとしている結果だと……多分（汗）

では、呼んでいただきありがとうございました～。

外伝（1）　～　アンデットのお食事（前書き）

特に本編に関係ないかもです。そして、すごく短いです。

外伝（1）　～　アンデットのお食事

「なあ、デル」

異世界生活、夜が明けて二日目。夜が明けると言っても、時間的にその程度経過したというだけで、結界の中は闇を好む魔族の嗜好を反映して、永遠の夜を造り出している。

「はい、どうしました？」

「アンデットって、何食べてるの？」

それは、実に素朴な疑問。

「はあ、基本的にはあんまり。私どもゾンビを例にするなら、襲った生物の肉なんかを適当に食べたりとか」

「……ふ、人間の食生活とはほど遠いということか」

寝室からだぶだぶのローブをまとって現れたタイキの言葉に、デルフェールはただでさえ灰色がかった顔色から顔色を無くした。

「あっ、タ、タイキ、まさか食事が！？」

言葉尻を震わせるデルフェールに対し、若干ふらつきながら渇いた笑みを浮かべているタイキは、デルフォールに視線を合わせないままつぶやいた。

「そこらへんは人間仕様のままなようで……お腹すいたってホロウフレアに言ってみたら、虫とか、草とか、泥とか……いろいろ持っ

てきて……ふふ、さすがにヤバイ」
「そういうことは私にすぐに相談してください！　ああ、どうしましょう……表の森で、ビーストたちに頼んで木の実とか山菜とか採ってきてもらいましょうねっ」
「うう、料理って、ここできるっけ？」
「キッチンありますから……ああ、でも私レシピ知りません……」
「適当な材料あれば、俺が作るから……とりあえず、もうちょっと寝てる……」
「すぐに採ってきますねー！！？」

前後不覚なまま、寝室へと戻っていった小さなリーダーを見送る暇もなく、デルフェールは館を飛び出していった。

（4）　～　刺激が強すぎ蜘蛛女…（前書き）

ちょっとだけ艶めかしい方面の（あれ、なんていえばいいんだろう）描写があります～。
ぶっちゃけてしまうとディープキスレベルです。と、簡単な注意書きでした。

（4）　～　刺激が強すぎ蜘蛛女…

あんまり過保護に、屋敷から出てはいけませんよと言われるものだから。

「デルの目を盗んで外に出るとか、俺ホント馬鹿だった……」

タイキは一人、ひょろりとした背の低い木が立ち並ぶ永久墓地のはずれで、がっくりと膝をついていた。そんな彼の周りを、屋敷からくっついてきた二体のホロウフレアが困惑した様子で漂っている。

「ちょっとおいで。肩にとまっててくれるとちょっと安心するかもしれない」

タイキはその場に座り込んだまま、ちょいちょいとホロウフレアに向けて手招きをした。ホロウフレアはタイキの周りをくるりと回ったかと思うと、ちょこんとそれぞれの肩に一体ずつ乗る形をとった。形だけで、実際肩に触れているわけではない。しかし、両頬から数センチというところに青白い炎が浮かんでいるというのに、タイキの顔に苦悶の表情はない。

「うーん、なんか適当に歩いてきちゃったしなあ」

途中で地面から泥でできた人の手が飛び出してきて、向こうは挨拶程度だったのだがタイキは腰を抜かしてしまい、ホロウフレアとマッドハンドであわやバトル開始か！？　という状況にも陥ったりしたのだが。

『ちょ、どっちもストップ！　マッドハンドさんゴメンナサイ、こっちが勝手に驚いちゃっただけですんで……』
『ね、ネクロマンサー！　我々下級魔族に敬語など使わなくてもよろしいのですよ。というかホロウフレアたちには自然な口調でいらっしゃるのに、なぜなのです？』
『え？　うーん、なんか差別っぽい感じがするけど、ホロウフレアは……ペットみたいに思ってるから！　なんか最近可愛く思えてきちゃって』
『そ、そうでございますか』

そこでちょっぴりマッドハンドの面々と友好関係を築き、この辺で、タイキの人間仕様の足でも軽く散策できそうな場所はないかと尋ねてみたところ、この辺りの小さな森なんかはいいのでは……と提案されたのである。
そこで、冒頭へと戻る。

「帰り道が分からないとか無いよね。ホロウフレア、分かる？」

試しに尋ねてみると、右肩にとまっていたほうのホロウフレアが「任せろ！」と言わんばかりに燃え上がった。ふわりと浮き上がって、そのまま空の彼方へと消えてしまう。

「……？　最短ルートでも探しに行ったのかな」

残った方のホロウフレアに、指を近づけたり離したりして遊びながら、タイキは適当な木の幹によりかかってぼんやりと座っていた。
カサカサカサ……
カサカサ
ガサ

「え、何の音？」

最初は、そこら辺にちらほら落ちてる枯れ葉がこすれる音だと思った。だが、何か違う。むしろこれは、誰かの足音のようなリズム感がある。

「ひょっとして、あの子デルを呼びにいった……とかなのかなぁ」

だとすれば、二時間のお説教は免れないな。ココロの中で盛大なため息を吐きつつ、足音のする方へ視線を向ける。

すると、左肩に乗っていたホロウフレアが警戒するように激しく燃え上がった。火の粉をまき散らしながら、右へ左へと光が揺れる。

「ちょ、どうしたの！？」

『あら、誰が入ってきたのかと思いきや……こないだ生まれたばっかりのネクロマンサーじゃない。意外と近くで見ると可愛いわね』

ガサリ

最後の足音と共に、木の陰からタイキたちの前へ姿を見せたのは、最早見慣れたゾンビの姿ではなく、妖艶な女の声でしゃべる……巨大な蜘蛛。黒々とした甲殻に、細かな体毛がびっしりと生えていて、タイキはその姿に思わず顔を引きつらせた。

「わ、わっ！？」

『あら……そんなに怖いかしら？　私のこの姿……』

細長い足を器用に動かし、タイキの身長以上も体長がありそうなその大蜘蛛は、素早くタイキに接近した。腰が抜けたまま、ずりずりと這って下がろうとするタイキの手からすり抜けて、ホロウフレアが蜘蛛を威嚇するように飛び出す。

『あん、邪魔ね。別に危害を加えるつもりはないのよ。ちょっと近くでお顔が見たいだけ……』

ホロウフレアの妨害もなんのそのといった様子で、大蜘蛛は鋭いかぎ爪のついた足の先端を、タイキのマントに引っかけた。ぎゃ、と小さな悲鳴を上げて、タイキは前につんのめる。ガシャガシャと、倒れ伏すタイキの真上に大蜘蛛の胴体が移動してきた。結界の中での唯一の光源である、青い月の光すら届かない影の中で、タイキは目を見開いたままぶるりと震える。

（え、俺、死ぬの？）

『……本当に、人間みたいな反応する子ねぇ。姿形も人間そっくりだし……ていうか、むしろそうだったりするのかしら？　ネクロマンサーになる前は人間でした、って』

小さなため息が頭上から聞こえてきて、タイキはぎゅっと強く目をつむった。すると、まぶたから透けてくる光の量が増えて、周りが明るくなったことに気付く。

（……え、どいてくれたのかな、これって）

「ふふ、あらま、本当に近くで見ると可愛いわー」

先ほどよりもはっきりと聞こえる、けれど聞き間違えようのないあの女の声。半分だけ目を開きかけていたタイキは、そこでがちんと硬直した。

「ちょっと、もうちょっとこっち見てくれたっていいじゃない。せっかくネクロマンサーが怖がらないようにサービスしてあげたんだから」

憤慨されたような声で言われて、タイキは視線を上へと移動させてみる。すると、そこにあったのは大蜘蛛の複眼ではなく、声と同じように艶やかな妙齢の女性の顔があった。

つやつやとした、不気味なくらい赤い唇をにいっとつり上げて、女性はさらにタイキの顔へ自身の顔を近づける。

「ふふ、ホント、今は可愛いっていうのがぴったりだけど、大きくなったらどんな格好いい男になるのかしら……今から楽しみだわ。魔力の方も申し分なしだし。ああ、バルバロイ様よりも繊細な感じが、ぶっちゃけ私好みね～」

「え、えええと、お、お姉さん？　さ、さっきの蜘蛛って」

「私だけど？」

にっこりと至近距離で肯定されて、タイキはとっさに二の句が継げなくなる。

「私の名前はゼフィストリー。ビーストなんだけど、ちょっとした事情で住んでた森から追い出されちゃってね？　適当な手下引き連れて、アンデットに頼んでこの辺りの森に住まわせてもらってるのよ。ちなみに、人間からはクインスパイドって呼ばれてるわ」

「は、はあ……ゼフィストリーさん、ですね？」

「ふふ、さんづけも敬語も無しでいいわよ。私は上級魔族だけど、貴方はこの世に四人しかいない魔族の長たるネクロマンサー、最上級魔族ですもの。でも、ああ、本当に……」

「っひゃば！？」

べろんと人間にしては規格外すぎる長い舌で首筋を舐め上げられて、タイキは思わず奇声を上げた。そして、ふと現在の体勢を思い出す。仰向けになっている自分の上に、妙齢の女性が押し倒すよう

に乗っかっている。いつの間にか、両手は頭上でクロスされて拘束済み。

（あれ、逃げ場無し？）

「ん、なーんか、デーモンのサキュバスみたいなことしてるってのが嫌だけど、ふふ、仕方ないわよねぇ。ネクロマンサーが直接魔力を分け与えられるのは、同じ種族たるアンデットだけなんですもの。私はビーストだから、こーしないと」

「ひゃ、ゼフィ、スト……ひょわくすぐったいってばぁああ！？」

右と左、両方の首筋を舐められた挙げ句、そのまま唇まで這わされ、最終的には耳たぶを甘噛みされた。じたばたと自由な両足を振り上げて抵抗するタイキだが、やはりただの人間の女性とは格が違うのか、ゼフィストリーは全くペースを乱さないまま、タイキの両手を拘束しているのとは逆の手で彼の顎に触れる。

「ひょえっ！？」

軽く顎を押されて、タイキは困惑した声を上げる。そこにゆっくりと、今までにないほどゼフィストリーの顔が接近した。そこでタイキも理解する。彼女がいまだに手を出していない部分といえば……。

「んふ、それじゃ、ちょっと我慢してね？　いただきまー」

「何をしているのですかぁあああああああああああああああああ！！！！！」

タイキの唇までほぼゼロ距離となったところで、タイキには聞き慣れた声が、ゼフィストリーにとっては忌々しい声が響いた。タイキは顎をつかまれているため、ゼフィストリーはこの距離をキープ

するため、視線のみで声のした方を見やる。
そこには、ホロウフレアの大群に囲まれながら全身を震わせているデルフェールの姿があった。ただ、それだけではなく、デルフェールに少しだけ似たゾンビの面々や、先ほどアドバイスをしてくれたマッドハンドたちもいる。

「ゼフィストリー、ネクロマンサーから離れなさい。さもなくばここにいるアンデットはすべて、貴方を敵と見なして排除します」
「いいじゃない、ちょっとくらいお裾分けしてもらったって。バルバロイ様のところにも帰ってないし、ここじゃお腹が空いてばっかりなのよ」
「外に出て適当に見繕ってくればいいじゃないですか。とにかく、ネクロマンサーを……タイキを離してください！」

今までにタイキが聞いたこともないような、デルフェールの鋭い声。その言葉尻が若干震えているのは、おそらく上級魔族に対する恐れなどではなく、大切なリーダーが襲われている（この場合二重の意味だろう）ことに対する、憤り。

「デル」

視線を彼に向けたまま、タイキはぐっと唇を噛む。

「ごめん、勝手に出ちゃったりして。今度はちゃんとデルの言うとおりにするよ」
「タイキ……」

つかの間、タイキとデルフェールの間に穏やかな空気が流れる。
と。

「ネクロマンサーって、タイキってお名前なのね。ふふっ」
「む、ぐっ！？」

デルフェールたちが「あっ」と息を呑む。ゼフィストリーはデルフェールの殺気がゆるんだ瞬間、素早くタイキに口づけた。しかも、硬直してまともに反応することも出来ないタイキをおもしろがるように、あの長い舌の一部をぐいと突っ込んでくる。

「んむ、くう……っ！？」

不意に、あのお披露目の際に石柱へ触れたときのような、妙な脱力感に襲われて、タイキは一気に全身の力を抜いてしまった。「おっと」と小さく言って、さすがに少々慌てた様子のゼフィストリーが唇を離す。

「あんまりもらってないんだけど……大丈夫？　ええっと、タイキ」
「……う、うん。でもちょっと疲れた」

両腕が解放されても、相変わらずくてっとしたままのタイキの様子に、ゼフィストリーは「やりすぎちゃったかしら」と冷や汗を垂らしつつ体を起こす。

途端、ゾンビとは思えない素早さでデルフェールが近づき、タイキを横抱きにしてゼフィストリーから距離をとった。「デルー」と言いながらシャツをつかんでくるタイキに穏やかな視線を向けつつ、ここまで共に着てくれたゾンビたちに一言。

「しばらく彼女に、アンデット式の『お説教』でもして差し上げてください。それくらい、タイキから無理に力を奪ったことに比べれば安いもの、安すぎるくらいですよ、ねぇ？」

そして、デルフェールはそのままタイキを抱えて、半数ほどのホロウフレアを引き連れて退場。残されたゾンビやマッドハンド、ゼフィストリーは向かい合ったまま。

「……分かったわよ、お説教、受けてやるわよ全く」

ぺろりと唇を舐め上げて、ゼフィストリーは両手を挙げた。

※　※　※

「タイキ、タイキ。大丈夫ですか？」

「……んー、ちょっと、眠い」

もぞもぞとデルフェールの腕の中で身じろぎをしながら、タイキは目をつむり、やがて穏やかな寝息を立て始めた。ゆっくりと近づいてきたホロウフレアが、タイキを起こさないよう慎重に、彼の眼鏡を外してやる。

「まったく、これじゃあすぐに怒れませんね……」

苦笑を浮かべて、デルフェールは呟いた。ホロウフレアたちも、ぐるぐると彼の周りを回っていて「同感」とでも言いたげである。

「でも、タイキが目を覚ましたらきちんとお説教はしなければなりませんね。あと、ゼフィストリーは……まあ、あとでちゃんと面会させてあげますか。護り万全の状態で」

最短ルートを通り、タイキがあの森まで行くのにかかった時間の

半分以下で、デルフェールは屋敷へと帰ってきた。腐りかけの腕が落ちてしまわないか心配しつつ、なんとかタイキを寝室へと運び、寝間着に着替えさせる。

毛布にくるまって「ふふー」と笑っているのか深呼吸しているのかよく分からない声を出すタイキを見下ろし、デルフェールは毛布の上から彼の体を軽く叩いた。

「もう少し準備が整ったら……そのときは、みんなで挨拶に行きましょうね」

そう言って、デルフェールは見張りのホロウフレアを何体か残し、そっと寝室から出て行った。

（4）　～　刺激が強すぎ蜘蛛女…（後書き）

大暴走中のお姉さんが登場しました。
ちなみに、タイキの周りの人外とか、これから出てくるであろう人間たちはうっすら家族っぽいポジションを用意してます。
デルフェール＝父親、ホロ＝ペット、ゼフィストリー＝姉（母でなく）
リジェラスとかは普通にお友だちですけどね。他にも兄、叔父さん、弟など。

……あれ？　女の子要素ｏｒｚ

（5）　～　ふわふわもこもこ↑∞（前書き）

外伝にするか少し悩みましたが、ホロウフレアはこれからもバンバン出てくるので本編に加えてみました。

（5）　～　ふわふわもこもこ↑∞

もぞもぞと、毛布の中で身じろいだタイキは、ふと頬を撫でられたかのような感覚を覚えて、ぼんやりと目を開けた。

「ん」

起き上がってみてみれば、最早見慣れたホロウフレアが一体、タイキの顔にすりよるようにして近づいてきている。見た目はそのまま人魂なのだが、仕草が実に小動物っぽい。

「ふあー……おはよ、なんかだいぶ君たちの区別も、うん、最近一緒にいる二、三匹くらいなら出来る気がするな」

熱くない炎を軽く撫でると、わらわらと部屋の隅から天井からと、大量のホロウフレアが現れた。

「おおっと!?　いや、ここまで多いとさすがに……ホロウフレア、ホロウ……うーん」

急に考え込みだしたタイキに、数匹のホロウフレアがゆっくりと、「どうしたの？」とでもいうかのように近づいた。

「いや、ホロウフレアって呼ぶの長いからさ。デルフェールはデルって呼んでるし……うん、決めた。今日から君たちのこと、ホロって呼ぶ。そっちの方が楽だし、なんか響き可愛いしねー」

にこりとタイキが笑うのと同時に、部屋中のホロウフレアたちが

動きを止めた。二秒ほど経って、タイキは辺りを見回し、顔色を変える。

「え、ちょ、どうしたの？　まさか嫌だった！？　ご、ごめん俺そういうつもりじゃ」

（ね、くろ、まんさ……なまえ、くれた！！！）

「へっ！？」

途端、停止していたホロウフレアたちがぐるぐると渦を巻き、一カ所に集結する。手の平サイズから、一気に直径五十センチ程度にまで成長したホロウフレアを見て、タイキはぱくぱくと口を動かすことしかできない。

と、そこでバタバタと寝室前が騒がしくなった。素早く扉がノックされて、デルフェールが飛び込んでくる。

「タイキ、一体どうし、まし？　おや、これは」

「でででデル、デルこれどうしたの！？　なんかホロウフレアたちがいきなり」

「落ち着いてください、タイキ。ひょっとして、彼らに名前を付けてあげたりしました？　たとえば……ホロ、とか」

デルフェールの口から出てきた名前に、タイキは目を最大限まで見開いた。次いで、がくがくと激しく首を縦に振る。

「な、な、なんで分ったのさ？」

「いえ、書いてあるからですよ。ほら、そこのホロウフレアの塊の中、色の濃い印みたいなのがあるでしょう。あれはこちらの世界の文字で、ホロって書かれてますよ」

デルフェールが指摘した場所をよく見てみると、確かに、ホロウ

フレアの青白い光の中、一カ所だけやや濃い目の青で描かれた印の部分がある。ただ、印があるのはわかったが、タイキにはそれが文字だと理解することができなかった。

「……俺、こっちの世界の文字は自力で勉強しなきゃなんないのか」

（ねくろ、まんさ）

「おぉっと？」

また聞こえてきた第三の声に、タイキはベッドの上で中途半端なファインティングポーズをとった。それを見て、デルフェールはくすくすと笑い声をあげる。

「今の、ホロウフレアたちの声ですよ、タイキ」

「え！？　だって今まで会話とかしたことないけど！」

「今さっき、タイキが名前をつけてあげたんでしょう？　名前をもらうというのは、この世界ではとても重要な意味を持ちます。この場合、名付けられたおかげで自我が発達し、会話が可能になったというところでしょうか……」

うーん、と一度首をかしげ、デルフェールはタイキに助言をした。

「タイキ、ホロウフレアたちの名前、もう一度呼んであげてください。そうすればきっと、彼らももっとすらすらしゃべれるようになれるはずです」

「ほ、ホントに？　んー、じゃあ、ホロー？」

光に向けて手をかざしながら、恐る恐る、名を呼んでみる。すると、ホロウフレアたちはぶるりと震え、より一層輝きを増した。

「ああ、ああ、ネクロマンサー、ありがとうございます！　まさか貴

方と直接会話ができるほどの自我を授けて貰えるとは、思いもよりませんでした」

ホロウフレアの声らしい、幼げな少女の声が響いた。

「うおっ、すごいスラスラしゃべれてる！　よかったねぇ～。あ、あと俺のことタイキって呼んでいいのに。デルだっていつもそう呼んでるんだから」

「いえ、私めには少々荷が重く……ご勘弁を」

「うー、まあ、無理にとは言わないけどさ」

それにしてもまぶしいなあ、と毛布を引っ張り上げながら目を細めたタイキの前で、ホロは「ああ！」と明るい声を上げた。

「代わりと言ってはなんですが、この炎の姿から、お一つ、ネクロマンサーの望む姿に変われますよ」

「マジで！？」

ホロの提案に驚くタイキの横で、デルフェールは顎を撫でながら納得の表情を浮かべた。

「そういえば、意志を持ったホロウフレアは擬態ができるんでしたねー。タイキ、どんな姿になってほしいんです？」

「んーと、伝わるかどうか……」

「ならば、私の炎の中に御手を……燃えませんから安心してください」

「そ、そう？　じゃあはい」

遠慮無くホロの中に右手を突っ込み、次なる指示を待つタイキ。

「……はい、では、私に望む姿をイメージしてください」
「ん」
目を閉じ、思い浮かべる。
白、ふわふわ、丸くて……。
……ぽんっ
「これ、ですか？」
「これはなんとも……タイキの性格がなんだか丸わかりなかんじですねぇ」
ホロとデルフェールの声が順番に聞こえてきて、タイキはゆっくりを目を開く。その視線の先には、望む姿をした、一匹の……。
「――――――――――――――――か」
「「か？」」
一拍置いて。
「っかわいい――――――――っ！！！」
「わっ！？」
ぎゅむ、と。タイキは迷わず目の前に座り込んでいた、一匹の白フクロウもどきを抱きしめた。白フクロウもどき、もといホロは、かなりな力を入れて抱きしめても暴れることはなく、むしろ感極まっている様子である。
「かわいい！　イメージ通り！　すっごいふわっふわの丸い目の雪色フクロウってうわ可愛い！！！」

「ネクロマンサーに喜んでいただけて、本望です」
「……いいですねぇ」

頬をすりよせ、ホロが完璧に再現した羽毛のふさふわ感触を堪能していたタイキは、隣からぼそっと聞こえてきたつぶやきに首をかしげる。

「デルも混じる？　すごい気持ちいいよー」

言って、すでにタイキの左手はデルフェールの服の裾をつかんでいる。デルフェールは一瞬ぽかんとした表情を浮かべ、タイキの腕の中にいるホロと目が合い、慌てて手を横に振った。

「え、あ、いえ！　私は腐ってますし、泥だらけですし」
「じゃ、手繋ごう。ホロは俺が抱っこしたままで……おー、手触りほんっと最高」
「ネクロマンサーが視認できる範囲でなら、私の指示で他のホロウフレアたちもこの姿に出来ますよ」
「ぜひよろしく。どうしよう、幸せすぎる。バチ当たらないかな……」

デルフェールの手を握り、ホロを抱えて、寝起きの至福の時間うっとりし続けていたタイキであった。

※　※　※

「バチは当たりませんけれど、このあと、昨日のことについてきっちりお説教はありますからね？　タイキ」

「うっ……はい、すいませんでした……」
「まあ、もうしばらくはこのままでもいいですよ」
「ううー、結局デル優しいし。うん、ホント、ごめんなさい」
「いえいえ、分ってくだされればいいんです」

（5）　～　ふわふわもこもこ↑∞（後書き）

……こんなぬいぐるみが、今欲しくてたまりません。
しかし、本当にタイキが幼児化してきて、いいのかと自分でも思います。

それと、ちらちらお気に入りに登録してくださっている方がいるようで、ありがとうございますｗ　頑張って更新できる内に、なんとか永久墓地編は終わらせたいです……。

（6）　～　お散歩ｉｎ永久墓地

「さて、準備はいいですか？　髪も服装もばっちりですね？」
「うん、そりゃーデルとホロが全部やってくれたんだし……」

サイズぴったりなナポレオンコートを着て、その上にファンタジー感満載な黒マントを羽織る……。腰の部分に、今朝デルフェールから贈られたばかりのポーチ付ベルトを巻いて、タイキはぐっと拳を握りしめた。

「じゃ、永久墓地巡り行きますか！」
「絶対、絶対にはぐれないでくださいね～！？」

右手にはフクロウ姿のホロを抱え、左手でデルの右手を握りしめ、その状態に心から安堵している自分に対し、タイキは内心「俺幼児化してないか？」と若干へこみつつ、緊張した面持ちで屋敷の扉を開いた。

広がるのは、空虚な光を投げかけるのっぺりとした満月の浮かぶ夜の空と、雑草と枯れ木ばかりが目立つ荒れ果てた墓地。そこへ一歩足を踏み入れると、少し離れた場所の地面がもぞもぞと動き出した。

「ネクロマンサー、おはようございます」
「お、マッドハンドさんたち、おはよー」

にゅにゅにゅにゅ、と伸びてきた五本の手たちに向けて、軽く頭を下げながらあいさつをする。敬語は本当に外して欲しいと言われたので、開き直ってタメ口あいさつにしてみたのだが、頭を下げたらま

たぎゃあぎゃあと騒がれてしまった。

「……えっと、いいの？　あれ」

「普通におはようでいいんですよ～、でも、タイキは本当に礼儀正しいですね。さて、では祭壇にいきましょうか」

「祭壇って？」

「タイキが皆さんに力を分けてくださった、あの石柱のあるところですよ」

ああ、あそこか～と軽く頷くと、大人しくタイキの腕に抱えられていたホロが突然暴れ出した。

「ほ、ホロ！？」

「ネクロマンサー！　気をつけてください！」

「……気をつけてって、ちょっとひどいんじゃなぁい？」

前方から聞こえてきた、やや気落ちした様子の女性の声に、タイキは思わず硬直し、デルフェールは眉をひそめた。

「ゼフィストリー、よくまあこのタイミングでタイキの前に現れたりできますね」

「もーあんたの小言はいいわよ。ちゃーんとアンデット式『お説教』も受けたんだからぁ」

暗がりからゆっくりと姿を現わした女性、ゼフィストリーに、タイキだけではなくデルフェールやホロまで「うっ」と引きつった声を上げた。

妖艶な美女、というのがぴったりだったその容姿は、泥と土にまみれて汚らしく、ドレスもショールも髪もぐしゃぐしゃ、……タイキは心の中でつぶやいた。まるでやまんば、と。

「……ね、ねぇデル、ゼフィストリーさんも、さ？　なんかすんごい反省してるっぽいし、あんまり怒りっぱなしもエネルギー使うよ？　だから、ね」

「はい、まあ完全に許すことはできそうにないですけど……そうですね、それぐらいやられれば十分ですか。あの綺麗好きの貴女が、ここまでされて報復行動をとっていないんですし」

「そーよ、我慢したのよ。ネクロマンサーとは……これからもちゃんと仲良くしたいし。ていうか、本当に昨日はごめんなさいね？　魔力枯渇してちょっと錯乱気味だったのよ～」

潤んだ目で見つめられて、タイキはほぼ反射的に首を横に振った。

「あーいやその、うん、かなり、すごく驚いたけど……初めてだったけど、うん、多分大丈夫」

ぼそぼそと、視線は地面に固定したまま解答。そして、沈黙。

（なんか、やばいこと言った？）

タイキが意を決して視線を上げると、髪をかき上げ俯いているゼフィストリーと、ものすごく慈愛のこもった視線で見下ろしてくるデルフェール、頬ずりしまくってくるホロ、そして結局ついてきて一部始終を聞いていたらしいマッドハンドたちがぐーぱーしながらうろうろと。

「……タイキ、大丈夫。まだまだ出会いはありますよ。こんな年増なんかにファーストキス奪われても、こちらから言わなければ全く……全く、なんて汚点を……」

「でっ、デルの表情が黒い！！！　そしてなんか急激にゼフィスト

リーさんが落ち込んでるのは、え!?」
「さんづけしなくていいって言ったでしょー……。うん、あとでまたちょっと身だしなみ整えてから、改めてあいさつにくるわぁ」

じゃあねと言って、ひらひらと手を振り暗がりへ戻っていくゼフィストリー。その足下から、かさかさと何十もの蜘蛛が移動する音が響く。

若干混乱気味のタイキは、ことさら明るい口調になったデルフェールに引っ張られて、なんとか祭壇へと辿り着いた。そこでは、空(フ)っぽの甲冑(アントムアーマー)や揺れる人骨(スカル)たちが何体か談笑しているようだった。

「あ、ネクロマンサー、おはようございます」
「お、おお！　ネクロマンサー、ゴキゲンは、いかがで？」
「うん、みんなおはよう。調子はいい感じ～」

意外と流暢にしゃべるスカルや、もとはどこかの国の騎士だったのか、とても丁寧な礼をしつつ片言なファントムアーマーに向けて、タイキは今度は頭を下げず、代わりにホロを頭に乗せ（霊体なので基本的に重さがない）空いた手をひらひらと振った。

「お、おお……」
「気さくな方だなぁ。今代のネクロマンサーは」

何か、また感激されているらしい。どうあいさつすりゃいいねん、と心の中で突っ込みつつ、タイキはデルフェールに促されてステージへとのぼった。そこには、お披露目の時と変わらず、中心にあの石柱がどかんと居座っていた。

「ここでみんなに力を送れば、アンデットの魔族は元気になるんだったよな」

「はい、ではお願いします」

ホロを頭の上に載せたまま、タイキは自分の手形がついたプレートに手を重ねる。また、浮遊感に似た奇妙な脱力感。これが魔力が抜け出てるときの感覚なのかーと思いつつ、耳にはこんな会話が飛び込んでくる。

「おお、ちからが、みなぎる！」
「いつもの倍速で動けるぞっ、ていうか、今日も『供給』してくれるとか思わなかったぜー！」
「……ずるいわよー、アンデットばっかりなんてぇ」
「あれ、ゼフィスト、うーん、ゼフィいるのー？」

プレートに手を当てたまま、タイキは大声でそう呼びかける。昨日と、先ほどの『さんづけ禁止』が思い返されて、いざ呼んでみようとすると妙に名前が長ったらしく思えたので、思わず省略してしまったのだが。

「あら、いるわよー。ていうかゼフィって私の愛称？」
「タイキーっ！　こんな人愛称で呼ばなくっても！！」
「あーっと、えー、名前長くて舌噛みそうだったから、つい……」

そろそろか、と思い、プレートから手を離して石柱の影から出てくると、ステージの縁に寄りかかりながらにんまりしているゼフィストリーと、彼女がステージに上がってくるのを阻止しているらしいデルフェールの姿が見えた。

「あ、キレイになってる。すげぇ早業」
「んふふ、魔族ですもの～。ちょっと魔法使えば万事オーケーなのよ」

完璧にセットされた、砂粒一つついていない髪をそっと撫でて、ゼフィストリーは満面の笑みを浮かべた。泥だらけのやまんば状態は、ずいぶんとこたえていたらしい。

「ふーん、魔法、ね……やっぱそういうのもあるんだ。ねえ、俺も使えるかな？」

「それはもちろん。ただ、タイキの場合はちょっと特殊だと思いますよ。多分、結構な量の練習をしないと……」

「だよなぁ。魔法なんて、全然感覚わかんないし。魔力が抜けるってのは、なんとなくわかってきたけど」

「うっ」

タイキの最後の呟きを聞いて、ゼフィストリーは顔を引きつらせた。それを見て、タイキは慌てて手を横に振る。

「あ、『供給』！　『供給』のほうね！　こないだのことは、うん、ナシ！　ね！？」

「え、ええ……ほんと、冷静になってみて自分のしでかしたことの重大さにやっと気付くなんて……はあぁ、私も修行が足りないわぁ。これじゃいつまで経っても自分の森に帰れないじゃない」

ひどく悲しそうなゼフィストリーの横顔を眺めながら、タイキはふと、どうして彼女は種族が異なるのにこの永久墓地にいるのだろうか、と思った。ちょっと尋ねてみようかと口を開きかけたところで。

「なんっでぇ蜘蛛女ぁ！？　とっとと祭壇からどきやがれってんだ！」

野太い男の声と共に、ゼフィストリーの足下めがけて、幅広な刃を持つ大剣が飛んできた。ゼフィストリーは表情を一点、小馬鹿にするような笑みを浮かべて振り返る。

「あーらぁ？　別にいいでしょう、のぼろうってわけじゃないんだし、ネクロマンサー……タイキにも避けてって言われてないしねぇ」

「てっ、てめぇネクロマンサーの真名を……っ！」

現れたのは、どうやらスカルのようだった。だが、そこにいるファントムアーマーよりも立派な兜や鎧を身につけており、なんだかずいぶん強そうである。

「おや、リッパーさん。今日はお早いんですねぇ」

近づいてきた戦士型スカルに向けて、デルフェールはのんびりした様子で頭を下げた。リッパーは顔の方向をゼフィストリーに固定したままで（睨んでいるらしい）、ひらひらと小骨の多い手を振った。

「おうよ、また力が流れ込んできたもんだからなぁ、しばらくぶりに体が軽いぜ。で、今代ネクロマンサーは、と」

「お、おはようございまーす」

ぎっ、と骸骨顔を向けられて、タイキは思わず敬語&低姿勢でのあいさつをしてしまった。なんというか、今まで会ってきた魔族の中でダントツの威圧感である。もし人間であったならば、おそらくどこぞの大盗賊団の首領でもやっていたのかもしれない。

恐る恐るというふうに上目遣いで見つめてくるタイキに、リッパーはがちゃがちゃと兜をひっかきつつ、ばつが悪そうな声で応えた。

「あ、あー……なんでぇ、ネクロマンサー。んなにちっこくならんくてもいいだろぃ？　なあデルフェール、お前さんからも言ってやってくれや」
「タイキ、リッパーさんが怖いですか？」
「直球かよ！！！」

リッパーを指さしながらタイキに尋ねてくるデルフェールに対し、リッパーは素早くツッコミを入れる。アンデットの漫才という貴重な光景を目にし、タイキは少しだけ緊張がほぐれた。

「え、ええと、怖いっていうか、威圧感？　こう、俺よりも断然強そうで……」
「なっ、何言ってんでぇネクロマンサー！　アンデットであんた様より強ぇヤツなんているわきゃねぇ！」

がっちゃんがっちゃんと慌てた様子で身振り手振りを繰り返すリッパーの様子に、タイキはとうとう声を上げて笑い出した。

「ふ、あははっ！　そう言われても、自覚ないんだよなぁ俺。えっと、リッパーさん、だよね？」
「ネクロマンサー、さんづけなんて、んな」
「デルやゼフィみたく、俺のことネクロマンサーじゃなくてタイキって呼んでくれる？　あ、これお披露目の時も言ったけど、そこの骸骨さんや鎧さんたちも」
「タイキ、彼らの種族名はスカルとファントムアーマーですよ」
「あ、そっか。ありがとデル」

ほのぼのとしたいつも通りの会話を繰り広げるタイキたちの周りで、ゼフィストリーは苦笑、リッパーを初めとするアンデットの面々は茫然としていた。

「え、ええと、タイキ、様？」
「呼び捨てで」
「どぇえええっ！？」

かぽんっ、と下あごの骨をどこかへ吹っ飛ばしてしまったスカルの隣で、ファントムアーマーが頭を下げたまま硬直している。と、リッパーが動き出し、ゼフィストリーを押しのけ大剣を拾い上げると、それを鞘に収めた。そして、ステージ上に立つタイキを見て、ぼそっとつぶやく。

「……た、タイキ、で、いいのかぃ？」
「あ、うん」

にぱー、と満面の笑みを浮かべたタイキを見て、リッパーは思わず表情を……というか、骨を歪ませる。どうにか笑い顔らしいものを作って、リッパーはどこか、心の底がふわりと温まるような感覚を覚えた。

（なんでぇ、こりゃあ……）

魔族の糧となるのは、人間たちの絶望の気。いつだったか、仲間と共に町を一つ潰し、体いっぱいにそれをたくわえ込んだときと、近いようで根本的に異なる感覚。

ふと、タイキの隣に立つデルフェールへと視線を向けた。リッパーに眺められているなどとは思ってもいない様子で、彼は愛おしそうにタイキを見下ろしている。

（いとおしい？）

浮かんだ言葉を、急いで打ち消した。そんな、人間じみた感情、魔族たる者が持ち合わせているはずがない。

けれど、生まれ落ちたばかりの新しいネクロマンサーを見ていると、自然と笑みがこぼれて、そばにいて、守ってやらなくてはと思ってしまう自分がいて。

（調子狂うってんでぇ、まったくよ）

「リッパーさん、どうかした？」

不思議そうに、怖いといっていたわりに今度は自然な様子でリッパーの顔をのぞき込んできたタイキに、リッパーは今までにないほど穏やかな声で答えた。

「いんやぁ、んじゃ、これからよろしくなぁ、タイキ」

「ああ！」

嬉しそうに頷く、人間そっくりの我らが主（リーダー）。

（こりゃ、賑やかになりそうでぇ）

（6）　～　お散歩ｉｎ永久墓地（後書き）

リッパーさん（叔父さん）登場です。多分、デルフェールの次くらいに人間くさい魔族ですね。
地味にこの人の持ってる剣の名前を出しそびれてしまいましたが、あれです、ファルシオンっていう西洋剣です。それだけ言えば、この人が戦うときどんな風になるか、分かる人はなんとなく察していただけるかと（笑）

……次でも注意前書き一応しますが、次はシリアスです。……なんだろう、このギャグの少なさは。ほのぼのも好きだけど、ギャグの方が好きなのに！

（7）　～　魔族の本能（前書き）

今回の話には、ちょっと残酷描写あります。
こういう展開はこれからも増えていく予定ですが……。

皆さん大丈夫そうな；
警告といっても、はい、初登場な人間がアレなだけです。

（7）～魔族の本能

しばらくの間、祭壇付近に集まってきた魔族たちとにぎやかな談笑をして、タイキはデルフェールやホロの他に、なぜかゼフィストリーとリッパーを引き連れて、散策を開始することとなった。

「なんっでぇてめぇがついて来るんでぇ！？」
「ああもううざったいだみ声ね。いいでしょ別に私がついていったって！　ねぇタイキ～？」
「うん、まあ、そこで後ろからのっかられるとちょっと歩きづらいけど」

タイキはデルフェールの右隣が定位置で、その反対側にリッパー、腕の中には大人しく抱えられているホロに、そんなタイキを後ろからゆるく抱きしめて、彼の頭頂部に顎をのせているという実に歩きづらそうな姿勢をしているゼフィストリーが並んでいる。

デルフェールは先ほどから、ゼフィストリーがタイキに何か粗相をしないかとしょっちゅう眺めてくるのだが、彼女はタイキに軽くすり寄るか、怒鳴り声を上げるリッパーに反抗的な口を利くぐらいで。

（確かに、タイキに危害を加えるつもりは無いみたいですね）

小さく頷き、彼女の腕の中にある少年の顔へ視線を向ける。頭上で飛び交う二人の口げんかに、うるさそうに口をひん曲げてはいるが、決して嫌悪とは結びつかない表情。

「タイキ、あそこが現在、ゼフィストリーが住処にしている森ですよ。よくここまで一人で来られましたね」

「え、こんなとこにあったんだ、ゼフィの森」
「あら、正確にはここもタイキの森なのよ？　私は借り受けているだけ。タイキが命令すれば、この永久墓地で私の居場所は簡単になくなっちゃうのよねぇ」
「しないしない、そんな命令」
「きゃーっ、ありがとタイキ！」
「ぐえっ、締まってる締まってるっ」
「蜘蛛女ぁ！　てめぇいい加減タイキから離れたらどうでぇっ！？　見てる方が鬱陶しいわ！」
「うっさいっつってんでしょ、そっちこそ歩く度にガチャガチャとやかましいのよ！」
「んだとぉ！？」
「なによぉ！？」

タイキを挟んで、ばちばちと火花を散らすゼフィストリーとリッパーの隣で、こほんと軽くデルフェールが咳払いをした。

「お二人とも、タイキにまで危害が及んだら……どのようにするおつもりで？」

途端、ぎりぎりまで高められていた二人の殺気がしぼむ。リッパーはそっぽを向き、ゼフィストリーはタイキの髪の中に顔を埋めた。

「え、えーっと」
「タイキは気にしなくていいんですよ。ゼフィストリーがアンデットの面々とそれほど相性良くないというのは、まあ仕方のないことですし」
「え、なんで？　なんでゼフィとアンデットって仲悪いのさ。デルは普通じゃん。あとホロも」

ぽんぽんとゼフィストリーの二の腕部分を叩いて励ましながら、タイキはデルフェールに向けて質問する。デルフェールは軽く肩をすくめて、それに答える。

「以前申し上げたように、魔族はさらに四つの種族に分けられて、その四種族の間にもいろいろと複雑な事情やら何やらで、友好的だったり敵対視していたりと、魔族だからといって一括りに出来ない関係があります。アンデットとビーストは……あー、なんですか、その」

「なにか言葉を濁すようなことやらかしてるわけ？」

いきなり歯切れの悪くなったデルフェールに対し、タイキは迷いながらもゆっくりと踏み込んだ問いかけを繰り返す。と、タイキの頭上で無感動なゼフィストリーの声が、デルフェールに代わって答えた。

「ネクロマンサーは、他の種族の最上級魔族よりも代替わりの時期が早いのよ。で、ビーストのリーダーであるバルバロイ様は、今はコールドドラゴンっていうドラゴンなのだけれど、もうずいぶんと期間が長くて……。昔は、とあるバルバロイ様がその任期を終えたとき、ネクロマンサーはすでに十回以上代替わりをしていたときもあったのよ。まあ、つまり、ビースト以外の最上級魔族は、リーダーとしての研鑽が足りないと、バルバロイ様はお考えになることが多くて」

「あー、それで一番代替わりしまくっているネクロマンサーが、一番魔族のなかで未熟者だと思われていると。なるほどね」

あっさり納得して、それ以上は特に触れようとしないタイキの顔を、ゼフィストリーは恐る恐るといった風にのぞき込んだ。

「タイキは、怒らないの？　同じ魔族だって言ってても、こんなふうに完璧に隔絶されてて、頭から侮られてるのよ？」
「うん、だって俺、確かに未熟だし」
さらりと答えて、タイキはホロを抱える腕の力を少しだけ強める。
「デルたちにはもうはっきりと言ったけど、……ゼフィやリッパーさんもうすうす分かってると思うけど、俺、こんな風にネクロマンサーになる前は、普通に人間だったんだよ。だから、魔族の生活にはまだ馴染めないし、リーダーとしての能力なんて今のところ『供給』くらいしか分からないし、ドラゴン相手なんて気後れしまくるし。みんながみんな、俺にとっては先生みたいなものだから。侮られてるとか、まだ、そう思えない」
もといた世界から落とされて。
いつの間にか若干体が人外になっていて。
もとの世界にも帰りたいと、家族や友人たちに会いたいとも思うけれど。
ここで過ごした時間も、とても居心地が良くて。
「うん、そんなんなら、俺の方のごたごたが落ち着いたら、会いに行ってみようか。そのバルバロイのコールドドラゴン？　とやらにね」
「え！？　ちょ、タイキっ！？」
あからさまに狼狽する面々を見て、タイキはくすくすと笑い声を漏らす。
「何も、ちょっとお話ししに行く程度だよ。俺が失礼なことしなけりゃ、そう一発で俺のこと殺そうとか……多分、しないよね？　ゼ

フィ」
「え、ええ……さすがに、多種族の最上級魔族をあっさり手にかけるようなお人じゃないわよ。でも、そんなことして一体？」
「いや、お友達の輪は大きい方が楽しいよってこと。単純単純」
へらりと笑って、タイキはもう一度ゼフィストリーの二の腕を叩いた。
「どうして俺がネクロマンサーに選ばれたのかっていうのは皆目見当もつかないけど、もし、そういう理由で選ばれたんなら……俺、ゼフィやリッパーさんみたいに、魔族同士で喧嘩するっていうのが少なくなるといいなって思うから」
タイキの言葉に、ゼフィストリーとリッパーは一瞬だけ視線を交差させる。だが、すぐにお互い仏頂面で、顔を背けてしまった。
「……でも、二人のやりとり見てると喧嘩っていうよりだんだん漫才に見えてきたしなぁ。うん、俺のいたところの変わった言い回しで『喧嘩するほど仲がいい』って言葉もあるし」
「そ、それのどこが仲がいいのよ！？」
「だよなぁっ！　喧嘩するってことは仲が悪いってことじゃあねぇか！？」
「この言葉の裏の裏の意味を、頑張って自分で見つけてください。はいこれネクロマンサーから二人に宿題ね。ちなみに、解答は各自が頑張って考えた分だけあるから」
「それって、解のない問いじゃないですか～」
「へへっ」
また頭上で口論しつつ、タイキが言った宿題の内容を必死に考えている二人を見上げて、タイキはデルフェールの手を掴み、ホロの

柔らかな羽毛に頬ずりした。

「ネクロマンサー、なんだか楽しそうですね」
「うん、いろんな知り合いができて、楽しいよ」
「それは、よかったですね。タイキ」

ほのぼのとした会話を続けながら、タイキたちは次なるポイントへと歩いていった。

※　※　※

最初に、異変に気付いたのはタイキだった。

「……？」

先ほどまで意気揚々と歩いていたのに、突然減速して、ついには立ち止まってしまったタイキに、デルフェールが心配そうな表情を浮かべてかがみ込む。

「どうしました？　タイキ」
「いや、なんか……臭う」
「臭う？」
「うん、これ、まさか……」

少し離れたところで、まだ口論を続けていたゼフィストリーとリッパーも、タイキの様子がおかしいことに気付いたらしく、慌てて駆け戻ってくる。

「ねえデル、このへんってなんかある？」
「いえ～、特になにも目立つような……あ」

眉をひそめながら、ゆっくりと思い出すように宙に視線を滑らせたデルフェールは、最後に小さな呟きを漏らす。そんな彼を見下ろしながら、ゼフィストリーが呆れ顔で続けた。

「この辺りは結界の出入り口でしょうに。ここからもう少し右手に進むと、何本かの柱が立っててね。その柱と柱の間が、それぞれ地上にある森への出口になってるのよー。まったく、デルフェールったら引きこもりだからすっかり忘れてたわねぇ？」
「あはは、はい、返す言葉もなく。と、そういうことですけど」

ゼフィストリーの答えを聞いて、タイキの唇がうっすらと渇いていく。心拍数が上がったのだろうか、彼の腕の仲でホロが心配そうに「ネクロマンサー？」と上目遣いで尋ねてきた。

「どうしてぇ、一体」
「デル、その出入り口、近づくくらいならできるよね？」
「え、ええ。そりゃあできますけど、タイキはまだ結界の外に出たらダメですよー？」
「出ないよ。……うん、近づけるところまででいい、連れてって」
「はあ……あんまり、見るもの無いと思いますけどねぇ」

首をかしげるデルフェールの案内で、結界の出入り口らしい場所へはすぐにたどり着くことが出来た。すると、タイキが感じていた異臭も、より強くなる。

「……」
「あら、この臭い」

顔をしかめて黙り込んでしまったタイキの横で、ゼフィストリーがすん、と軽く鼻を鳴らした。ついで、こぼれ落ちたため息。

「人間の血ね」

瞬間、タイキが駆け出した。ホロがばさりと飛び立ち、駆け出した彼の後ろでデルフェールが何か叫んでいる。だが、今のタイキにそれを聞き入れる余裕はない。

とある柱のそばに、それは転がっていた。そばにはデルフェールに似た姿のゾンビが二体と、全長がタイキの身長ほどもありそうな赤い体毛のコウモリ。彼らは、その転がっているものをどうするか話し合うのに夢中で、タイキが近づいたことにも気付いていないらしかった。

「――――あ、あの」

「あ？　なんだ、ネクロマンサーの……タイキだっけ」

彼らに声をかけようとすると、頭上から聞き覚えのある声がしてきた。思わず見上げて、白目のない赤い瞳とばっちり視線が合う。

「り、リジェラス……」

「お、俺の名前覚えてたか。なかなかイイ奴。……で、何？　お前もそこの人間つまんでく？」

空中で何にも触れないまま逆さまになっていたリジェラスは、一度悪魔の翼を羽ばたかせて、くるりと地上に降り立った。そのまま親指を立てた左手で、くいとゾンビたちのいる方を示す。そこで、ゾンビたちはタイキの存在に気がついた。

「あ、ね、ネクロマンサー！　おはよう、ございます」
「ん～？　あ、この方が今代のネクロマンサーかにゃ。なんとまー可愛らしいお姿で」

ゾンビ二体は恐縮した様子で頭を下げ、デカコウモリは小馬鹿にしているんだか真面目に言っているんだかよく分からない口調で声をかけてきた。ただ、そんな彼らにも曖昧な返答だけをして、タイキはゆっくりと彼らが囲む、『それ』を見下ろす。

手足はおかしな方向にねじくれ、指が何本か引きちぎられている。おそらく、体格からして男らしいのだが、右脇腹が完全に切り裂かれており、なかの臓物がずるりと完全にはみ出していた。頭蓋骨は半分以上潰れており、かなりな範囲の血だまりが広がっている。

「これがどうかしましたかにゃー？　ネクロマンサー」
「……この、人……外で、拾って？」
「拾ってというか、結界付近をうろちょろしていて、どーやら霧にまかれて道に迷ったみたいだったのですけどねー、他のビーストたちに追い回されてぐったりしてたところを、ちょっと、お腹が空いたもので」

無邪気な口調で、コウモリはすらすらと続ける。
それは、魔族の常識。
魔族にとって、人間とは。

「そこなゾンビも手伝ってくれましてー、今から山分けでもするかにゃ、と思ってたところですにゃ。あ、ネクロマンサーも入り用でしたら、ちょっとおこぼれをもらえたらなー、なんて」

体大きいから食べれるところいっぱいですにゃ、と言われて、タイキはもう一度、ぐちゃぐちゃになったその死体を見下ろした。そ

して、

「っ！！！」

「ネクロマンサー？」

目をカッと見開き、両手で強く口を塞いだタイキを見て、デカコウモリは訝しげに全身を傾けた。その隣で、リジェラスも興味津々と言った様子でタイキの表情をのぞき込む。

そこへ、白い影が素早く飛び込んできた。思わず飛び退いたコウモリを威嚇するようにして、ホロはその翼を最大限まで広げる。その背に、主を庇いながら。

「ネクロマンサー、大丈夫ですか！？」

「タイキ！！」

ホロの声に続いて、デルフェールも追いついた。だが、タイキからの返事がない。デルフェールは眉根を寄せて、そっとタイキの肩に手を置き、彼が凝視しているものに目を向けた。そして、顔色を変える。

「……少し、失礼します」

やや遅れてやってきたゼフィストリーたちを置いて、デルフェールは素早くタイキを抱き上げると、ホロを引き連れてその場を離れてしまった。残された者は、そろって首をかしげるばかり。

一方、彼らの目にもなるべくつかないような、ちょうどいい茂みを発見して、デルフェールはそこでタイキをゆっくりと下ろす。タイキはまだ、自身の口元をつかんだままだった。

「タイキ、タイキ、すみません、すみません……私の五感が鈍いば

っかりに。私がきっと、この世界で一番タイキのことを知っていたはずなのに」

すみません、と、デルフェールはタイキの肩をそっとつかんで、何度も何度も謝った。しばらくして、ようやくタイキは手を口元からどかした。手の平や口元は、彼の唾液でべとべとになっていた。

「デル」

濡れた手の平を拭おうと、タイキと地味におそろいになっているポーチからハンカチを取り出したデルフェールは、名を呼ばれてすぐさま顔を上げる。

「はい、タイキ」

「……俺、やっぱり、魔族なんだな。なんか、やっと分かった、かもしんない」

ぼろりと、タイキの目から大粒の涙がこぼれる。そこで、タイキの顔に浮かぶ表情を見て、デルフェールは理解した。この少年は、気持ちが悪かったから、男がかわいそうだったから、あんな状態になったわけではないのだと。

「俺、俺さ。喜んだんだ。あのコウモリさんに言われて。人間を、死んだ人、美味しそうって思ったんだ」

血の匂いが、不快じゃなかった。むしろ、その逆。
飛び出た内臓が、不快じゃなかった。むしろ、その逆。
いかがですかと勧められて、断れなかった。むしろ――。

「俺とおんなじ人間だった！！！　あのひっあの人も、俺、俺――――！！！」

「タイキ、タイキ」

自分の耳を塞いで叫ぶタイキを、デルフェールは泥だらけの腕で抱きしめた。虫食いのシャツに顔を押しつけられて、それでもタイキは、必死にそれにしがみつく。

「魔族は、人を食らいます。転生し、もとは人間だったあなたも、魔族となった今ではそれが根源、本能なんです」

「でも、でも、でもぉ！！」

昔ならば、あんなものを見たらすぐにでも吐いていた。あんなに長く他人の内臓を眺めるなんてできなかった。それをまさか、食べようと思うなんて！

「やだ、俺、食べたくない。人間、は、やだよ……なんで、俺、食べたいなんて……」

「人は人を食べませんけれど、牛や豚や鳥は食べるでしょう？　生きている世界が違うから。魔族も同じ、魔族同士で食い合うことは滅多にありませんが、魔族は人を食らう……これは、この世界に人間と魔族が生まれたときからの大原則なんです」

「お、俺、人間、だもん……」

「……はい、でも、タイキはネクロマンサーです。私たちの、大切なリーダーです」

震えていたタイキの体が、デルフェールがゆっくりと背を撫でるごとに落ち着いていく。やがてシャツをつかんでいた手からも、必要以上の力が抜けて、タイキはデルフェールにしがみついたまま気

を失った。
　しっかとタイキを抱きしめたまま、デルフェールは、まるで自身が傷ついたかのような表情を浮かべ、薄い唇を噛んだ。血が流れるわけでもなく、あっさりと噛み千切られた唇の肉が、口腔内で揺れる。

「これも、試練ですか？　私のように、タイキにも、魔族に近づくべく科せられた……」

　小さくつぶやかれた彼の言葉は、誰の耳にはいるわけでもなく、そのまま空中に溶けて消えた。

（7）　～　魔族の本能（後書き）

しばらくの間、タイキや彼の周りの魔族たちが悩む事件、発生しました。
もうしばらく、シリアスにお付き合いくださいっ；
次で一応、一段落というか、なんというか。

……

補足するならば。
タイキはもともと人間でしたが、今ではれっきとした魔族なんです。

（8）　～　エゴ

全身、ふわふわの感触に包まれているのが心地よくて、タイキはゆっくりと浮上する意識のなか、頑なにまぶたを開こうとはしなかった。軽く寝返りを打つと、周囲のふわふわもタイキの体に沿って移動する。

（気持ちいい）

そのうち、一つのふわふわが右手の下に潜り込んできたので、ゆっくりと手繰り寄せて抱きかかえる。それはもぞもぞと動いていたが、やがて大人しくなった。

と、かちゃんと音がして、いくつかの靴音が聞こえてくる。

「……まだ、寝てるの？」

「ええ、あれから目を覚ましません」

「っつーか、なあ。おい、まさかこいつ、俺たちに人間食うなとか言わないだろーな」

「どうでしょうね。それはタイキがどう、このことを受け止めるかによります」

「私たちへの対応もねぇ。長く生きて、より多くの人間を食らった者ほど、きっとタイキにとっては殺戮者に見えるでしょうよ」

「っだぁもう」

同年代の少年の、苛立った声が部屋に響く。他の声が彼を小声で諫めるのも聞こえてきて、タイキはゆっくりと目を開いた。

「……あ、デル？」

「タイキ！？」

かすれた声で名を呼ぶと、素早く駆け寄ってくる気配。だが、それもすぐに止まった。タイキは自分で上体を起こし、ベッドの周囲がフクロウもどきのホロウフレアでいっぱいなことに少し驚いて、声のした方に目を向けた。

デルフェール、ゼフィストリー、リジェラスの三人がそこにいた。リジェラスはどうでもよさそうな表情を浮かべているが、ゼフィストリーは何かを恐れているかのような、デルフェールに至っては絶望に近い表情であった。

「あ、の……タイキ、ご気分は？」

「うん、いっぱい寝たから、大丈夫」

静かな目を宙に向けて、タイキはホロの頭を撫でる。すると、他のホロウフレアたちもタイキの名を呼びながら、わらわらと彼の体へ群がった。

「うぉうっ」

顔以外、ほぼすべての場所をホロウフレアの羽毛に覆い尽くされてしまったタイキは、一度ベッドの上に戻るよう指示を出す。ホロウフレアたちは、心配そうな目でタイキの頭を撫で、軽くすりよってもとの位置に戻った。

「ねえ、デル」

「はい」

タイキの呼びかけに、デルフェールは固い声で答える。

「いきなり倒れちゃって、ごめん。ホロも、ゼフィも、リッパーさんとかにも心配かけちゃったんだろ、俺」
「俺はお前の心配っていうか、今後のアンデットについてが心配だがな」
「リジェラス！」
デルフェールが、ゾンビらしからぬ怒鳴り声を上げる。その音量に思わず肩を震わせたタイキを見て、デルフェールはハッと押し黙った。
「ん、ちょっと驚いただけ。デルってなんか他のゾンビよりもやっぱ元気あるよねぇ」
「え、ええ……」
デルフェールの視線が、床に落ちる。ゼフィストリーとリジェラスは、そっとデルフェールに視線を向け、また元に戻った。
「俺、止めないよ」
そこで唐突に、タイキがつぶやいた。思わず、周囲にいた彼らは「え」と声を漏らす。
「魔族が人間を食べること。気絶する前、デルフェールが言ってたでしょ。人が他の生き物を食べるように、魔族は他の生き物のくくりに人間が入ってる。それだけ、なんだから。だからといって、俺は食べないけど。多分、食べて、正気に返ったら死のうとすると思うから」
「そんな！」
「でもね」

慌ててタイキに駆け寄ったデルフェールの目を真っ直ぐ見据えて、タイキは続ける。

「みんなは、面倒くさいっていうかもしれないけれど……俺もつくづく自分最低かなって思うけど、まあ、ぶっちゃけていうと、獲物は選んで欲しいかな」

「獲物を選ぶって、襲っていい人間を見分けろってことぉ？」

ゼフィストリーが困ったような表情で言う。その隣で、リジェラスも「んな器用なことできねー」とつぶやいた。

「ま、正当防衛は仕方ないとして、このへんの魔族の住処とかって、基本的に山の中なんだよな？　デル」

「え、ええ……洞窟もちらほらありますけれど、山や森の中に潜む者が大半です」

「だったら、道に迷ってる感じの、明らかに怯えてる村人ですって人達を見逃して欲しい」

真剣な表情で言うタイキに、小馬鹿にしたような笑みを浮かべて飛んできたリジェラスが吐き捨てる。

「んなこと言って、誰が従うもんか。ネクロマンサー、お前さ、目の前で壁も罠も毒もない高級食材がどかーんとあったとして、それ、絶対に手を出さないって言えるのか？」

「俺がその壁になる。それで、別なところに食べてもいいよっていう対象を出してやればいい」

「……はあ？」

「ねえデル。魔族ってよく人間のこと食べたりするの？」

リジェラスを押しのけて、タイキはベッドから立ち上がる。寝間

着を脱ぎ始めたタイキを見て、ばたばたと彼の着替えを運びながらデルフェールは答えた。

「いえ、たまに迷い込んでくるものを襲ったりするだけで、この間のように殺して食べるというのは、あまりなくて……リジェラスの言うとおり、魔族にとって人間は高級食材なんですよ」

「ふぅん、じゃあさ、そういえば俺の魔力って結局なんなの？　俺が『供給』をみんなにするってことは、どんなふうな感じ？」

「『供給』は……そうですね。人間が高級食材なら、我ら魔族にとって、リーダーから供給された魔力は、直接的なエネルギー源でしょうか？　私を見てもらえば、ほら、タイキに会ったばかりの頃は体がぼろぼろでしたけど、今は二回の『供給』が行なわれて、ずいぶんと頑丈になりました」

脱いだ寝間着をデルフェールに手渡して、いそいそといつもの服を着込むタイキは、今度はゼフィストリーとリジェラスに視線を向ける。

「ゼフィ、リジェラス、君たちのほうがデルより結界の外のこと、詳しい？」

「ええ、私の方はデルフェールよりちょっと知ってるくらいだけど……」

「俺はデーモン領とよく行き来してるからな。で、なんだよ、結界の外のことが知りたいのか」

「うん。あのさ、この世界って山賊とか盗賊とかいたりする？」

「はぁ！？　そりゃめぼしい山とか街道付近には大体何グループか必ず……て、おい」

タイキの言わんとすることを理解したリジェラスが、ぱしんと自身の右頬を叩いた。

「お前さ、まさか山賊標的にしろってか。あのな、そんな簡単に――」

「人間食べに行きたいって言ってくれたら、俺が魔力を『供給』してやる。ていうか、これから『供給』する回数をちょっと増やしてみようと思う。体調がおかしくなったら休むけど。で、俺の魔力で強化したところで、襲いに行ってもらう。賊といえど、いつも集団行動してたりするわけじゃないだろーし」

火の玉の形態に戻ったホロウフレアに髪をまとめてもらいながら、ナポレオンコートのボタンを留めていくタイキの表情は、無い。

「山賊盗賊なら、着ているものと風貌、雰囲気で道に迷った村人と区別つくだろ。それに、それぞれの山に何グループもいるんなら、そうそう尽きないだろうし……まあ、よっぽど強いヤツがいるなら、無茶はしないでもらうけど」

「この辺りの山賊は、一般の人間には驚異でしょうが、騎士たちと違って神の加護を受けている武器なんかは持っていませんからね。確かに不意打ちをすれば、立派に食料になりますねぇ」

ふむふむと顎に手を当て、頷きながらそう言ったデルフェールは、自身の口にした言葉を反芻してギクリと体を強張らせた。いつの間にか、タイキが目の前に立っている。

「あ、あの、タイキ」

「いいんだ、デル。魔族は、人を食べる。それは思い知ったから。だから、俺が嫌がってるからって、みんなまで無理しないでいいんだ」

デルフェールの手を、手袋をしていない手で迷わず掴み、タイキ

は次にゼフィストリーとリジェラスのほうへ近づいていく。

「もうさ、いいんだ。いやいくないかもしれないけど、魔族とか、人間とか」

ゼフィストリーの肘の辺りに、残った方の腕を絡めて、手はリジェラスのものを握る。

「今の俺は、みんなが好きだよ。デルも、ホロも、ゼフィも、リッパーさんもリジェラスも。言ったじゃん、みんな俺にとっては先生みたいなもんだって」

タイキを囲む輪のようになった三人は、困惑した様子のままだった。

「嫌いになんかならない。不安でしょうがないって顔に書いてあるよ？　デルも、ゼフィも、ホロもさ」

「えっ、ええと、あの」

「それで、その……俺みたいな中途半端なヤツの方こそ、嫌いになってほしくない、かなーなんて」

口ごもるデルフェールを見ながら、タイキは困ったように笑いつつ、だんだんと視線を下げていってしまった。と、タイキ自身のつま先が見えたところで、ぐいっと頬をつねられる。

「いひゃいひゃいぃ！？」

「私たちがタイキを嫌うわけないでしょー、こんな面白くて可愛いリーダーを。ねえ、親ばかゾンビ？」

「う、今回ばかりは言い返せませんね……」

「まあ、妙に人間の肩を持とうとしてるところが少しばかり気にい

らないけど、嫌いじゃねーかなぁ」
「俺も嫌いになれっかいぃ！」
「うっさい鎧は外出てな！！　頭に響くのよ！」

ぎゃいぎゃいと騒ぎ始めた面々をよそに、タイキの肩へホロがとまった。振り返って見れば、他にもいたフクロウもどきたちはみんな、いつもの火の玉形態へ戻っている。

「ネクロマンサー、アンデットは、いつでも貴方についていきます。だから、大丈夫」

すりすりと頬ずりしてきたホロに、タイキは目を閉じて同じように顔を寄せる。

「ありがと、ホロ」

目を開けば、目の前には見慣れたゾンビ顔。

「デル」
「はい、タイキ」

見た目の幼さとはまるで異なる、強い意志を秘めた瞳と視線が重なり、デルフェールはこれから彼が何を成そうとするのかを理解した。
その上で。

「では、行きましょうか」
「うん」

笑って、タイキと手を繋ぎ、彼の導（しるべ）となった。

※　※　※

その後、タイキは祭壇へとおもむき、三度目の『供給』を行なった。どうやらこんなにも短い期間に『供給』を行なってくれるネクロマンサーは、しばらくいなかったらしく、アンデットたちの喜びようは言葉では言い表せないほどだった。

『供給』を終えてから、タイキは後ろにデルフェールとホロ、リッパーを従えた状態で（ゼフィストリーとリジェラスは他種族なので、ステージには上れない）この場に集めたアンデットたちへ例の話をしはじめた。

「見た目からして勘づいている人もいると思うけど、俺はネクロマンサーになる前は、ごく普通の人間でした」

何割かのアンデットがぎょっとした様子でタイキに注目し、スライムやマッドハンドたちはそわそわとその身を震わせた。

「それで、この間……俺は丸二日眠りこけてたって聞いたけど、結界の出口で人間の死体を見ました。それを拾ってきた魔族たちの言葉を聞く限り、その死体は森に迷った村人のようでした」

今度は、少し遠くの木々に並んでぶら下がっていたコウモリたちや、数名のゾンビが肩を揺らす。

「そこで俺は、その人間を食べませんかと言われました……はい、はっきり言います。自分でもすごく驚きましたが、ぶっちゃけむちゃくちゃ食べたかったです」

言いつつ、タイキの表情は嫌悪そのもの。だが、見ようによっては開き直ってふてくされている、ごく普通の少年のようにも見える。ステージの下からそれを見上げていた山羊頭の魔人、ヴォーゴは、大鎌を抱え直すと、彼の話に集中しだした。

「でも、俺はまだ人間だった頃が忘れきれてないので、食べたいって思っても、それを口にすることを理性の方が許してくれませんでした。多分、これは俺が本気で『壊れる』まで続くと思います」

タイキの何が『壊れた』ら……。そこから先は、その場にいた魔族たちのほぼ全員が察した。

「で、その……俺は今までこんな風に『供給』しかやってない新米ネクロマンサーですけど、一つこれからわがままを言わせていただきます」

「ね、ネクロ、マンサー様」

「はいなんでしょう、小人チックな人！」

「彼の種族は子鬼（ゴブリン）ですよ～。ビーストに属する下級魔族です」

「こほん、ゴブリンさんどうぞ」

かすれた声で、小さく手を挙げながら前に進み出たそのゴブリンは、小さな頭に無理矢理はめ込まれたかのような大きな眼球をぎょろつかせ、もみ手をしながらタイキに尋ねた。

「そ、それは、その……お話しの流れから、して、わたくしどもに、人間を食べるな、と？」

魔族たちがざわめき出す。そのざわめきが大きくなる前に、タイキはあらかじめデルフェールから受け取っていた、体育用のホイッ

スルのような笛を強く吹いた。
甲高い、耳障りな音が響き渡り、魔族たちは一瞬で静まりかえる。
笛を吹いた本人であるタイキも、笛から手を離してゆっくりと耳に指を突っ込んだ。

「い、痛い……これものすっごい至近距離だとダメージでかいよ……」

「タイキ、タイキ、頑張ってください！」

後ろで、デルフェールが参観日のお母さんか何かのように、必要最低限の身振り手振りで応援の言葉をかけてくる。というか、他のゾンビたちは表面の肉がとろけだしているのに、あなたはどうしてぴんぴんしているんですか。

「ふう……えーっと、はい、そういうこと聞かれると思いました。結論、答えはノーです。それは人間式に置き換えると、アンデットの皆さんに肉を食うなと言っているようなものですから。それはさすがに」

「そ、そうでございますか！　では……？」

嬉しそうな声をあげたゴブリンが、小さく首をかしげている。というか、彼の種族はビーストのはず。どうしてこんなにネクロマンサーの言葉を聞こうとするのだろうかと疑念が頭をもたげるが。

「この辺りのゴブリンは、数世代前からバルバロイよりもネクロマンサーとの繋がりが強いのですよ。そこらへんも、まあいろいろありまして」

「ん、ありがとデル。えーと、はい、じゃあ結局俺の言うわがままとはどういうものかというと、食べる人間の方を選んで欲しいっていうエゴの塊です。俺自身の罪悪感を消すための」

タイキは静かに告げて、ざっとステージの下を見回す。大半の魔族たちは、困惑した様子で互いにぼそぼそと話し合っていた。

「この間のことは水に流すとして、ようするに悪い人間をとっ捕まえて食べちゃいましょう。んで、道に迷ったり事故にあったりしてた……みんなからすれば格好のカモは見逃して欲しいということです」

「わ、わるいにんげん、それ、さ、さんぞく、とか？　きし、とか？」

プルプル震えるスライムが、たどたどしい言葉で尋ねてくる。

「みんなが襲われた場合は全力で抵抗してもいい。今のネクロマンサーとしての俺だったら、外の人間よりも結界のなかで知り合ったみんなの方が大切だから。で、こっちから襲っていって食べていいのは、今スライムくんが言ったように、このへんの山で暴れてたりする山賊とかね」

「しかし、ネクロマンサー……きゃつらはなかなかに厄介でございます。我々が集団で襲撃したとして、勝てる確率は今までの経験からして五分五分かと」

ふわふわと微妙に地面から浮かんでいる黒外套（マジシャン）が、人間のシルエットをかたどった頭を思しき部分の外套を、軽く振った。

「えっと、マジシャンさん。それは一体どういう状況で、五分五分の確率なんですか？」

「む、それは、およそ三十の魔族で賊の拠点に赴いたときが多いかと」

「うん、根本から俺の考えてる状況と違うね。拠点は叩かない」

タイキの解答に、マジシャン含めその他大勢の魔族が目を点にする。

「上手くいけばたくさん人間が手に入るって考えだったんだろうけど、それじゃあリスクも高すぎる。山賊といっても、他の人よりちょっと武器や防具を持っていたり、荒事が得意だったりするわけで、不安がないわけじゃないだろ？　自分たちの縄張りに異常はないか、常に確認してなきゃね」

「……なるほど、斥候の方を叩くと」

「そう。見回りだったら、多くても四、五人だろうし。そこを十人くらいの魔族で襲っていけば、それだけでも確率はだいぶ上がると思うよ。人間と魔族の能力差は、かなりなものなんでしょ？」

「ええ、ええ！　やつらは自分たちが一番森を早く走れるなんて思ってますけど、そんなの大間違いですとも！　やつらの居場所なんて、あっという間にわかっちまうし！」

マジシャンに場を奪われていたゴブリンが、嬉々として声を上げる。それにタイキは微笑みかけて、さらにたたみ込んだ。

「そこで、さらにもう一つ。これは俺からの保険ってことで」

くるりと身を翻して、ぺしぺしと『供給』に使う石柱を叩く。

「これから、三日に一回、俺の体調が優れないときには一週間に一回くらいのペースで『供給』を行なうことにする。山賊を襲撃しに行くって教えてくれれば、まあまたそこも俺の体調次第だけど、臨時で『供給』を行なう。これで、みんなの力の底上げをするってこと」

ざわめきが、一気に広がる。

『三日に一度!?』『そんなにたくさん……』『しかも頼めばしてくれるなど』

「全部をたとえて簡潔に言うと、肉を完全に食べるなということじゃあない、けれど、その肉のうち豚肉だけは食べないで。代わりに体調を整える栄養剤をあげるから、って感じかな」

タイキはそこまで言いきって、魔族たちを見下ろしたまま。

「どう？　これが、俺がネクロマンサーになって初めてのわがまま……もとい、命令ってやつ」

……魔族たちの答えは、すでに決まっていた。

（8）　～　エゴ（後書き）

少し、強引な気もしますが……。話が進んだら、本編にも書くと思いますけれどメモ程度に。というか前回の後書きもこんなんだったような；

タイキはベースが人間で、今も人間としての理性とかそんなのが勝っているので分かりづらいですが、やっぱり根底は魔族なので、こういった結論に至りました。

さて、ここで一応シリアスは区切りとなる、はずです！

次もまたお友だちが増える予感かと……あの悪魔小僧動かし辛いです；；；；

（9）　～　リジェラスの特別講座（前書き）

はい、またちょっとほのぼの？　なんでしょうか……これは。

（9）　～　リジェラスの特別講座

その日、タイキはのんびりとデルフェールにもらった、指一本ほどの厚みをした本に目を通していた。

あの、ネクロマンサーとしての最初の命令を発した日から、タイキは宣言通り、三日に一度のペースで『供給』を続けている。今はまだ直接『供給』の要望をされることはないが、たまに永久墓地を漂う鉄の臭いを感じる度、ああまた狩ってきたんだな、とぼんやり思う。それでも、最初こそ若干の後ろめたさを感じてはいたが、三度目に血の匂いを感じた頃には、もう慣れてしまっていた。

「……ふぁあ」

「おや、タイキ、ずいぶんと進みましたね」

本を机の上に置き、伸びをしながら盛大にあくびもする。そんなゆるみきったタイキの姿を見て、キッチンの方から顔をのぞかせたデルフェールが笑った。

「デルやゼフィが交代、つきっきりで読み方教えてくれたからなぁ。なんか、もといた世界で習ってた外国語よりすらすら入ってくるや。……母国語が無いからかな？」

「ああ、それはきっとあると思いますよ。読み慣れた言葉がなければ、別の言葉を習得しなければならないのは、確立された世界のなかでは必要不可欠なことですから」

「んー、あ、そうだここ。ここの意味いまいちわかんない」

「どこです？」

やや痛んだ紙に、角張った形で記された異世界の文字を指さして、

タイキはデルフェールの解説に耳を傾ける。
　最初は、話し言葉が通じるのだから文字が読めなくとも、と思っていたタイキだったが、デルフェールとゼフィストリーが強く学ぶことを主張したのだ。しかも、山賊の拠点を漁ってきたという下級魔族が持ち帰ってきたものに数冊の本が混じっていたことで、ほぼ強制的にこの世界の人間の言語を習わされることとなった。
　異世界にきてまで勉強なんて……とテンションうなぎ下がりのタイキであったが、選んだ本の内容がとある探検家ののんびりとした旅路といったもので、これが意外と面白い。今ではデルフェールに無理矢理机に座らせられずとも、勉強時間外から本を開いて言語の習得にいそしむ始末。

「スロンディア山脈、といって、ここフォリアル王国からだいぶん西にいった先にある山脈のことですね。これは固有名詞ですから、そのまま覚えるしかありません」
「ふーん、スロンディア、っと」

　ホロが器用に足に引っかけて持ってきた羊皮紙とペンを受け取り、タイキはそれにかりかりと今聞いた地名を紙の端に書き足した。そして、歪んだ線が何本も交差している、タイキお手製の異世界地図に書き付ける。

「デル、このへん？」
「あー……もう少し、南ですか。はい、そのあたりです」
「ん、ありがと。でもさ、ホント不思議だよなぁ。ゼフィは人間の町とかにも行ったりすることがあるって言ってたからわかるけど、デルはどうやって文字覚えたのさ？　あと地形とか。ゾンビって基本、縄張りから出ないものなんでしょ？　ていうか、浄化されやすいからむやみに出れないんだよね」

タイキから矢継ぎ早に浴びせられた質問の群れに、デルフェールは困ったように笑いながら返した。

「私の場合は、少し特殊なんです。なんて、言えばいいんでしょうか……。いえ、もうそろそろお教えしてもよいころかもしれませんね」

「……デル？」

羊皮紙から顔を上げて、タイキは訝しげに、机の正面に座るデルフェールを見つめる。迷うように両手をすりあわせていたデルフェールだったが、しばらくして、意を決した表情を浮かべ。

「タイキ、私は」

「おいこら何引きこもってんだぁあああああっっっ！！！」

ズドパァアアンンッッッ！！、とすさまじい音と共に、屋敷の玄関扉が蝶番ごと吹っ飛ぶのでは、という勢いで開かれた。そこからひょいと軽い調子で顔をのぞかせたのは、色黒な悪魔の少年、リジェラスであった。

「お前、前の『供給』んときから一回も外出てないだろ！　毎日毎日本ばっか読んで、つまんねぇの。ほら、たまには運動してみろよ！」

「え、ちょ、リジェラスちょっと待てって！？」

放心状態のデルフェールをちらりを見て、無視し、リジェラスは問答無用でタイキのナポレオンコートの襟を掴み上げた。そのまま壁際に引っかかっていたマントをはぎ取り、タイキに頭から被せて屋敷を出る。

「なんだよ急に、ていうか運動って？　俺そんな激しい運動できないししたくないし」

数分して、文句ばかり言い続けるタイキにとうとう堪忍袋の緒が切れたリジェラスは、鋭い犬歯をむき出しにして振り返った。

「お前見てるとほんっとーに苛つくんだよ。この魔力の持ち腐れ野郎。『供給』にばーっかりまわしやがって、ディアボロ様と同じくらいの力を持ってるっつーのに！」

「え、それってすごいの？」

「すごいどころじゃねーよ！　今までネクロマンサーといやあ、魔族四種族のなかでも最弱とか言われてたんだぜ？　それが今回いきなりパワーアップして……」

襟の代わりに、タイキの左手首をがっちりと握りしめ、リジェラスはにやりと獰猛に笑った。

「お前の身辺整理だの、こないだの騒ぎだのも落ち着いてきたからな。そろそろだろうと思ってたんだぜ」

その笑みと言葉に、タイキは思わず体を強張らせ、タイキにしっかりとくっついてきていたホロは全身の羽毛を逆立てた。

※　※　※

リジェラスに引きずられてやってきたのは、ゼフィストリーのい

る森と正反対の方向にある空き地で、すでに先客が二人いた。

「リッパーさん、と……」

「魔人ヴォーゴ。俺の上司で、ディアボロ様の腹心の一人でもあるお方だ」

鎧をガチャガチャと鳴らしながら、身振り手振りをまじえて感情的に話をしているリッパーの前で、山羊頭に黒い大鎌というステレオタイプな魔人の姿をしているヴォーゴは、淡々とした様子で首を振るか頷くか……そのどちらかの動作しか行なっていなかった。

「ま、俺にとっては父親みたいなもんでもあるけど……ヴォーゴは見てのとおり、無口で無表情なもんだから、交流にはけっこうコツがいるぜ？」

「……頭の運動？」

「ちっげーよ運動は別にするっつーの！！！」

「お、やっときやがったかリジェラス！　あと、タイキは久しぶりな気がするぜぃ」

近づいてきた二人に気付き、オーバーな動作で振り返ったリッパーは大きく手を振ってきた。

「三日ぶりってところかな。おはようリッパーさん。あと、初めましてヴォーゴさん」

ひらひらとリッパーに手を振り返し、タイキはいつも通りの調子でヴォーゴに頭を下げる。途端、ヴォーゴの変化の少なかった表情に若干しわが寄り、リッパーがその隣で器用に跳ねた。

「うぉっと！　どうしたんでぃヴォーゴ？」

「……いや」

地鳴りのように低い声で返し、ヴォーゴは目を白黒させているタイキを数秒見下ろしていたが、やがて無言のままその場を離れ、適当な岩場に腰掛けてそのまま動かなくなった。

「？　……？？？」

「あー、まあ、気にすんな。ってことで運動だ、運動」

首をかしげるタイキの背を、明後日の方向を向きながら叩くリジェラス。ヴォーゴに関しては「リジェラスが言うとおりよくわからん人」という印象をもったタイキは、とりあえず、リジェラスに言われるがままに動いた。

最初は、軽くランニング。

「……ぜぇーっ、ぜぇーっ」

「……お前、どんだけ運動嫌いなんだ」

お次は（身体能力の確認のため）柔軟。

「いだいだっだだだ！？」

「硬ぁっ！？　おま、体どこもかしこも石だろこれ！」

最後は一応（？）本命、魔力制御。

「や、やっと運動じゃないのが！」

「ところがどっこい、これが一番疲れるんだな」

にやりと笑うリジェラスに戦慄したタイキは、今まで頭上で見守っていたホロを抱き寄せ、リッパーの背後に隠れた。そこからこっそりとリジェラスをうかがい、震える声で尋ねる。

「……え、どんな風に？」

「まずは、初歩中の初歩ってことで……ほら、こっち来いってば」

ちょいちょいと手招きをするリジェラスを見つめつつ、タイキはこんこんとリッパーの鎧を叩いてみた。とりあえず、一緒に来てくれないかなーという意思表示だったのだが。

「ほれぇ、頑張れタイキ」

無情にも、リッパーはその仕草に気付くことはなく、むしろ無理矢理リジェラスのもとまで引きずられていってしまった。

「さてと、んじゃ見てろ」

近づいてきたタイキに軽く頷いてみせて、リジェラスは差し出した右手の人差し指に、ふっと息を吹きかけた。すると、指先から一センチほど離れたところに小さな明かりが灯る。それを順繰り、小指まで行なって、リジェラスの右手には四つの光の粒がくっついた。

「これ、魔法……だよなぁ」

「魔法は人間が使うマガイモノ。俺たち魔族が使うのは、純粋に自分の魔力を対価に行使する魔術だ」

くるりと手の平を返して、タイキの目の前に右手を寄せる。その

まぶしさにタイキの瞳孔が素早く縮み、思わず目を押さえた彼を見ながら、リジェラスは笑って光を消す。

「ほい、じゃあやってみろ」

「え、いきなり!?」

「いきなりっつってもお前、何回も『供給』してんだから自分の魔力がどんなもんかは知ってんだろ？　それをこう……指の方に集めるふうにして、光れって念じればいいだけだ。魔法みたいに面倒くせぇ手順なんて、無いようなもんだからな」

急かすリジェラスに戸惑いながらも、タイキは抱えていたホロを頭の上に移動させ、自身の右手を睨むようにしていた。だが、いつまでたっても変化は訪れず、タイキは小さくため息をついて目を閉じた。

（『供給』のときは、どこか、深い深いところから何かが引きずり出されて、体の外へ流れていくような感じがした。その深い深いところは、多分、俺の体とか心とかを支えてる柱のなか。つまり）

抽象的な表現でも、とにかく自分で魔力がどんなものであるかを再認識する。そして、思い描いた場所に意識の手を伸ばし、……何かにかすめた。

「ん？」

眉をひそめ、タイキはもう一度集中し直した。もといた世界では全く感じたこともなかった『異質』が、自分のなかで渦巻いている。最初はごく小さなものだったが、一度あると気付いてしまうと、それはタイキのなかで一気に膨れあがった。

「……ふむ」

しばし考えたあと、意識の手を最大限まで伸ばし、今や怒濤の流れを生みだしている渦のなかに突っ込んでみた。渦の流れ……タイキの魔力は、そのまま意識の手を遡り、遡り……やがて、タイキの右手へと到達する。

（光れ）

ぽぅ……

「おわっ！」

リジェラスの驚いた声が聞こえてきて、タイキは失敗したのかと思い、慌てて目を開いた。そして、絶句し、見とれてしまう。

タイキの右手から、先ほどリジェラスが発生させたものよりもだいぶ大きい光の球がいくつも飛び出してきていた。それらはホロウフレアと異なり、純粋に白い光を周囲に放ちながら、螺旋状にタイキの周囲を巡っている。

「タイキ、もういい！」

「あ、うん」

タイキが素早く右手を握りしめると、光の球はその場で弾けて消えた。一気に暗くなった視界に目を細めつつ、タイキはリジェラスに声をかける。

「こんなんになったけど、どう？」

「いや、お前、疲れてないのか？　魔術、まともに使ったのって初めてなんだろ？」
「そうだけど、そんな疲れた感じはしないかな。そういや最近『供給』のほうでも、あの変な脱力感無くなったし」

軽く肩を回しつつ、ホロをつついているタイキに作り笑いを向けるリジェラスは、ふわりと風に乗せて細い交信の糸を放った。ヴォーゴがそれを感知したのを確認し、念話をする。

『さすがだな。もとは人間だったっていうから、魔力の使い方なんざ今日中にはできないだろうって思ってたけど……面白いヤツ。俺が「できる」って言ったら、ホントにやりやがった』
『転生前、ただの人間では、なかったのだろう……』
『ま、でなきゃネクロマンサーにも選ばれないってか』

やれやれというふうに小さく肩をすくめて、リジェラスは適当にその場を切り上げようと考える。もともと、今回タイキを無理矢理連れ出したのは、彼の潜在能力の確認、および行使範囲がどの程度なのかということを知るためである。
魔力は予想通り底なしに近い。行使範囲は、訓練を積めば無限大。

（あーあ、ディアボロ様への報告、こんなあいまいでいいのかよ）

デーモンを統べるリーダーへの報告を脳内でまとめていたため、リジェラスは視界の端から伸びてきた手に反応するのが、一瞬遅れた。

「リジェラス！」
「っ！？」

いつの間にか、すぐ隣にまで移動してきていたタイキは、周囲に先ほど発生させた光球と同じものをいくつも浮遊させてリジェラスの腕をしっかとつかんでいた。ただ、光球に関して先ほどと違うのは、十数個あるそれを明らかにタイキ自身がコントロールしているということだ。

「……お前、この短時間で？」

「あー、まあ勘で。なあ、魔術って他にもあるんだよな？　なんか、こんなんでも俺が使えそうな他の魔術ってどんなんがあるんだ？な！」

瞳を煌めかせながら迫ってくるタイキに、リジェラスは振り払うことも出来ず、ただただ困惑の表情を浮かべるばかり。

（どういうことだ、魔術の行使は今回が初めて。なのに、この完璧な制御……！）

小さく、音を立てないように唾を飲みこんだリジェラスは、ゆっくりと言葉を選びながら吐き出した。

「魔術は、基本的にこれが制御できりゃ、お前のスペックならいくらでも使えるだろ。まずはネクロマンサーとしての能力の方探したらどーだ」

「いや、デルとかにも昔のネクロマンサーがどんな力を持っていたかって聞いてみてるんだけど、やっぱりわかんないんだよなぁ。全関節外しとか。俺やったら普通に死ぬって」

「能力なら死なないだろ」

「確認する前に肩脱臼とか俺やだよ！？」

「しばらく腕回したらすっぽ抜けやすくなるだけだって！　つか、今やるそれ？」

「ご勘弁をー！」

ずざざざっ！、と素晴らしいスピードで後ずさっていったタイキを見て、リジェラスは知らず、本当に楽しそうな笑みを浮かべた。それを見て、タイキはホロを抱きかかえたまま「お？」とつぶやく。

「なんだよ」

「……いや、なんか今すっごくリジェラスが身近に感じた。そーいうふうに子どもみたく笑えるんだね」

「なっ」

けらけらと笑うタイキの前で、リジェラスの赤い瞳がゆっくりと色味を失っていく。ばさりと、コウモリとよく似た形状の翼が、大きく羽ばたいた。

「りっ、リジェラス？　リジェー？」

「お、れ、の、どこがガキだぁあああっっっ！！！　あとどさまぎで愛称つけてんじゃねーよっ！」

「うわ空からの襲撃禁止、ちょ、ハンデハンデ！？」

少年二人は、ぎゃあぎゃあとやかましく叫びながら、しばらく空き地中を走り回っていた。

（9）　～　リジェラスの特別講座（後書き）

以上、異世界における魔法と魔術についてさらっと触れてみました。序盤で何かデルが言いかけてますけど、うん……うん、特に触れないでおこう。本編で否が応でも書きますから。書かないって選択肢ないですから。

今回はデーモン側の思惑がちょっぴりだけ……ええ、うんまあ、ろくな思惑じゃないんですけどね。アンデット、ビースト、ヴァンパイア、デーモンの種族の仲で、デーモンのリーダーが一番変態臭いです。↑今言うことかｗ

……うん、とにかく、リジェラスがこっちに落ちてくるまでもうちょっとですか。ヴォーゴは芋づる式だと思うので、もうしばらく……。

次回は多分外伝です。最終的に放置された、保護者二人の視点で短く。

外伝（2）　～　無表情＝冷徹は常でない

「……なあ、ヴォーゴの旦那。あれ、止めなくていいのかぃ？」
「止める、理由もないだろう」

地上を駆け回るネクロマンサーに、上空からちょっかいをかけているようにしか見えない悪魔、そして彼らを取り巻く、ホロウフレアが姿を変形させた白フクロウたち。

「まあ、ここも、ずいぶん平和になったものだ」
「ああ……まぁなぁ」

たまに聞こえてくるタイキの本気の悲鳴も特に気にせず、適当に離れたところから眺めていたリッパーとヴォーゴは互いに顔を見合わせて頷いた。

「昔はぁひどかった。ネクロマンサー自身も力が弱くてなぁ。ま、アンデット狩りなんてされたもんで、全体的にアンデットの力が衰えていたっつぅのもあるんだろうがよ」
「あの時は、主らの種族が滅ぼされるのではと、さすがに危機的状況だったな」
「のわりに、ビーストはもちろん、ヴァンパイアやデーモンもこっちに乗り込んでは来なかったがねぇ」

かかか、と下あごを震わせながら笑うリッパーから、ヴォーゴは思わず視線を逸らした。

「……謝罪も、この場合は、ただこちらの自己満足にしかならない」

「分かってんならもういいだろぃ。今はアンデットだって、あんな面白くて良いリーダーができたんでぇ。それをそちらさんが利用しようと考えてんのはいただけねぇがな」

がちゃん!、と乱暴な動作でファルシオンを抜き放ち、リッパーはその剣先をヴォーゴに向けて軽く揺らした。

「タイキを利用しようなんざ、ふざけた考えは捨てやがれとディアボロに言っておけよ。今代のアンデットは一筋縄じゃいかねぇぜ」

「……刻んでおこう。だが、ディアボロ様がその言葉をお聞きになるかは」

「ああー……」

狂戦士（バーサーカー）の称号を授けられるスカルとなるほどに、この世で時を過ごしてきたリッパーは、自分が知る限りのディアボロの情報と印象を思い浮かべ、がくりとファルシオンを取り落とす。

「ヴォーゴの旦那も、きっついねぇ」

「それが、腹心たる者の務め……」

言いつつ、山羊顔にうっすら哀愁が漂う。どんだけ尻ぬぐいさせられてんだろうと流れないはずの涙を拭いつつ、リッパーはもう一度空き地の方へ視線を向けた。いつの間にか、息も絶え絶えな様子の少年二名が地面の上で大の字に寝転がっている。面白いのはそれぞれ、タイキにはホロが寄り添い、リジェラスにはいつもの火の玉形態をしたホロウフレアたちがたかっているというところか。見ていて暑苦しい。

「さあて、それじゃそろそろ屋敷に連れて帰るとするかぃ」

「……リジェラスは、ここからどう動くか」

「あー、あいつなら、妙なところで情に厚いからなぁ。今頃タイキにほだされてんじゃねぇの？」
「……それも、よかろう」

立ち上がり、ヴォーゴは滑るようにしてタイキたちのもとへ向かっていった。その後ろ姿を眺めつつ、リッパーは笑いを堪える。

（しっかり親ばかやってんなぁ、ヴォーゴの旦那も。ずいぶんと丸くなったもんでぇ）
「……リッパー、ネクロマンサーを」
「あいよ！」

取り落としたファルシオンを鞘にしまい、リッパーは相変わらずがしゃがしゃと騒音を響かせながら、己のリーダーのもとへ歩き出した。

外伝（2）　～　無表情＝冷徹は常でない（後書き）

リッパーはもう完璧にタイキの第二の保護者です。
魔族のなかであったゴタゴタは、まあ多分これからかくことになるでしょう

それでは。

（１０）　～　就寝時の訪問者？（前書き）

ほのぼのを越えました！　うん、本来の空色レンズのノリです。

（10）　～　就寝時の訪問者？

『供給』以外で外に出ることが少なくなり、このまま本を片手に引きこもり生活突入か？、と思われたところで追加されたリジェラスによる魔術講義。これにより、タイキの一日ごとのスケジュールはかなりアクティブなものへと変わっていった。

最近ではデルフェールも、そうしつこくタイキに永久墓地内で警戒するよう言い含めなくなってきており、その裏には、永久墓地の面々がタイキのことを認めてきているという事実があった。最初はリジェラスと二人きりになるのも渋っていたが、彼とタイキがどう交流しているのか、どんな会話をしているのか……そんな他愛もないことを話しているうち、デルフェールも若干身を引き始めた。

「タイキは、ここでの生活は楽しいですか？」

「そりゃもちろん！　今のところ、会ってる人はみんないい人だしね。あ、デルは格別だけど」

「あ、ありがとうございます」

……その日の夕食時、ビーストの下級魔族たちに頼んで、結界の外の森から採ってきてもらった木の実やら兎の肉やらをアバウトに調理したものを食しつつ、タイキはちらりとダイニングテーブルの隣に座るデルフェールを盗み見た。

どうにも、最初にリジェラスが押しかけてきて、初めて魔術が行使できるようになった日から、デルフェールの態度がおかしい。タイキに優しいのは変わらないが、タイキと話が続かなくなったりすることが多くなり、一人で何かを考え始めると、途端に険しい表情になって硬直してしまうのだ。

以前、その様子が気になって、なんでも思ったことは口にしてく

れて構わないとタイキは言ったのだが。

『いえ、これは、その……』

『あの時もさ、デルがなんか言おうとしたときにリジェラスが来たから結局分からずじまいだったし。な、あれなんて言おうとしてたんだ？』

『そーそーれーはー……』

こんな調子で、いつもはぐらかされてしまう。よりタイキが強気に出て、上位命令ということで聞き出すことも可能ではあるのだが、それをするのはタイキの人間としての感性が許さない。

今日も今日とて、タイキの食事が終わるやいなや、デルフェールは会話する間もなく食器を片付け、タイキの着替えを手伝い、そのままホロともどもタイキを寝室に連れて行って、自分はどこかへ消えてしまった。

「……ねえホロ、俺、デルに避けられてる？」

「いいえ、あれはネクロマンサーに一片たりとも責任などありません。彼自身の問題なのです。今はできるだけそっとして差し上げて、彼のなかで整理がついてからお話しをうかがうのがよろしいかと……」

「ん、そっか」

ホロの答えにひとまず安心し、タイキはベッドの中央まで這っていって、ふと動きを止める。

「ネクロマンサー？」

「……ホロ、さ。ひょっとして、デルが何に悩んでるか、知ってない？」

「うすうす、気付いてはおりますが」

「マジで！？」

枕元に並ぶ白フクロウに詰め寄るタイキだったが、まんまるの黒い瞳に見返されて、言葉に詰まった。

「ネクロマンサー、デルフェールのこと、待って差し上げてください。彼の悩みは彼の口から聞いて差し上げてください」

「う……わかった。じゃ、寝るね」

毛布にくるまり、タイキが枕に頭を預けると、どこからともなく湧いてきたホロウフレアたちが次々にホロと同じような白フクロウの姿をとって、タイキに寄り添ってきた。

ふわふわもこもこに埋もれる状況をうれしがりつつ、タイキはゆっくりと意識を深い場所へ落としていき……。

ガンゴンダンダンダダンッッッ！！！

「な、何、何々っ！？」

突然聞こえた轟音に、ホロもタイキも飛び起きた。寝間着のまま寝室を出ると、ちょうどこちらに向かってきていたデルフェールと鉢合わせする。

「デル、今の音は？」

「ああ、タイキ、どうしましょう、どうしましょう！」

「ちょっと一旦落ち着いて……」

「か、かかか彼が、彼の人が！」

彼?、とタイキが軽く首をかしげる。しかし、タイキの腕のなかにいたホロはそれだけで何かを察したらしく、ぶわりとものすごい勢いで全身の羽毛を逆立てた。

「で、デルフェール、では」

「はい、はい！　まったくもう、あんな人はゼフィストリー一人で十分だというのに！　しかもタイキの休息時間ですよ！」

完璧にパニックに陥っているデルフェールを必死になだめながら、タイキはどうにか彼の言葉の断片から、唐突な客人がこの永久墓地のある結界に訪れたらしいという情報をまとめあげた。

……しかも、その人物の人柄はゼフィストリーが引き合いに出されるほど。

「ホロ、デルのことはまあ納得した。けど、今回のことは知ってるなら本当に教えて。こんなにデルが慌てふためくって……」

「ネクロマンサー、とにかく準備を。その合間にお教えいたします！」

あれよあれよという間にホロウフレアたちに寝間着を剥がされ、先ほどまで着ていたものと同じ形の衣装を押しつけられ、タイキは若干頬を膨らませる。

「だからさ！」

「魔族四種族が一柱、夜の血族、ヴァンパイアを統べる吸血貴族（ヴァンプ）がいらっしゃったようです」

「……はい？」

※　※　※

どったんばったんと仕度を終えて、だいぶパニックの収まったデルフェールの手を握りながら、タイキはホロを肩に止めて屋敷の玄関扉を開いた。

屋敷の前には、ゼフィストリーやリジェラス、ヴォーゴ、リッパーの他にも、デルフェールが従えているらしいゾンビの一団やマッドハンドたちが、そわそわと落ち着かない雰囲気で集まっていた。タイキが姿を見せた瞬間、勢いよくそちらへ視線を向ける。

「ちょっとちょっとちょっと、タイキ、どうしましょ！？　撃退！？」

「ストップ、ゼフィ。いろいろ冷静になってみようか。その発言かなりやばいよ！」

「いーや、こればっかりは案外やばくもねぇんだよなぁ……」

「え、どーゆうことさリジェ？」

硬質な髪をがしがしと引っかき回し、リジェラスはタイキの前まで移動して、非常に言いにくそうに口をモゴモゴと動かした。

「あー、な？　つまりはそういう性格なんだよ、これから来るヴァンプってのは」

「……俺はまぁいいとして、ディアブロとかバルバロイとかとも、全然？」

「中身的には、戦狂いのバルバロイが一番まともっちゃあまともなのかね」

「バルバロイ様を侮辱することは許さない……と言いたいところだけど、まあ争いごと大好きなのは否定できないわねぇ」

細い顎に指先をちょいと這わせて、ゼフィストリーは心からのため息をついた。

「いいこと、タイキ。ヴァンプに会ったらとりあえず一通りあいさつして、ちょっと最近の状況とかぼやかして、じゃあ寝ますって引っ込めばいいわ。私たち上級魔族だったらヴァンパイアどもに八つ裂きにされるだろうけど、タイキならまだ、ヴァンプと同じ最上級魔族だから大丈夫なはず！」

「その根拠のあいまいな保証やめようか！？　ていうかなに、そこまでヴァンプの人って……」

なんとか周囲の者たちからヴァンプに関する情報を集めようとしたタイキだったが、勢いよくこちらに飛んできた一体のホロウフレアが持ってきた報で硬直する。

「ネクロマンサー、ヴァンプがこちらに……数秒で到着かと」

「うえ！？」

ホロウフレアが言うやいなや、ゾンビやマッドハンドたちが小さく悲鳴を上げながら散らばった。大きく開かれたスペースのど真ん中に、直径一メートルほどの漆黒の円が浮かび上がる。

タイキが茫然と、他の者達はどんよりとした表情でそれを眺めるなか、円は中央からするすると伸び上がって錐体を成し、それもまた二メートル程度の高さにまで先端が達したところで、真っ二つに割れた。

溶け消えた錐体の中から現れたのは、一人の美丈夫だった。絹のような白銀の髪が肩より少し下の辺りまで伸びており、その目から放たれる眼光は鋭く、紅い。月光のもととはいえ異常に青白い肌と、やや先端が尖っている耳が、彼が魔族であると言うことを周囲に知らしめている。

「……ふう」

長く厚みのある黒マントをひるがえし、ヴァンプたるその青年はゆっくりと辺りを見回した。そして、目当ての人物らしき少年の姿を認めると、ふっと妖しく笑って腰を折る。

「初めまして、ネクロマンサー。わたくしはヴァンパイアを統べる者、名をロスティスラフと申します」

「……あ」

周囲をアンデット以外にも、ビーストやデーモンなど他種族の魔族に囲まれていたタイキは、慌ててロスティスラフに駆け寄り、肩にホロを乗せたままぺこりと深くお辞儀を返した。そして、また顔を上げて、ロスティスラフの顔をまじまじと見て一言。

「すっげぇ格好いいー……」

――――――――――――――――――――――――――。

瞬間、タイキの屋敷の周囲を、沈黙よりもなお重苦しいものが支配した。

タイキがうろたえるなか、彼の背後ではデルフェールが両手で顔を隠し俯いた。ゼフィストリーはぱしりと片手で自身の右顔を掴み、目を閉じた。リジェラスとヴォーゴはそれぞれ天を仰ぎ、リッパーは思わず両手を合わせ軽く頭を下げた。ホロは、じっとタイキの肩の上で耐えた。

「……ふ」

「え、えぇ？」

タイキの発言の後、顔を伏せて拳を軽く振るわせていたロスティスラフの口から漏れてきた言葉に、タイキは戦慄する。何か、嫌な予感しかしない。それほど自分はまずいことを言っただろうか？

（外見ワードはＮＧだったとか！？　え、でもこんなかっこいいのにアウトってどういうことさ！）

なるべくロスティスラフを刺激しないよう、その場から移動せずに視線だけを巡らせてみれば、下級魔族の姿はホロぐらいしか見当たらない。ゾンビやマッドハンドたちは、一足先に逃げ出してしまっていた。

と、ロスティスラフの口から漏れる言葉が、だんだんと形を取り始める。

「……ふ、ふふ、ふふふふふふふ……」

「え、えーと……ろ、ロス、ティ、スラフさん？」

噛まないようゆっくりと彼の名を繰り返し、タイキは彼の顔をのぞき込もうとさらに近づいた。近づいてしまった。背後から、デルフェールの悲鳴が響く。

「タイキ全力で離れてくださいお早くぅうううっっっ！！！」

「へっ」

「ふふふふふっ、そう、そうでしょう、そうでしょうともぉおおおおおおおおっっっ！！！」

そして、爆発。

タイキは目に見えない衝撃波に襲われ、「うぴゃあああああああっ!?」と奇声を上げながら吹っ飛んでいった。高速で回転する視界に酔いながら、必死に体を丸めようと空中でもがく。と、全身を誰かにしっかりと抱えられ、視界の回転が収まった。

「おい、生きてるか!?　生きてんなチクショウ!」

「……り、リジェ？　あ、ヴォーゴさん」

デーモン二人に抱えられて、タイキは頭痛のしてきた側頭部を押さえながら、今の状況を呑み込もうと地上を見下ろした。そして、後悔した。

なんでかタイキの「格好いい」発言で理性の枷が吹っ飛んでしまったらしいロスティスラフを中心に、台風もかくやという暴風が吹き荒れていた。リジェラスたちの周囲には独自の結界が張り巡らされているらしく、暴風に巻き込まれてまた吹き飛ばされるという心配はないようだったが、地上にいるデルフェールとゼフィストリー、リッパーは必死に地面に伏せて風をやり過ごそうとしていた。

「ま、まずい、このままじゃデルフェールが五体バラバラになるし、ゼフィがやまんばになるし、リッパーさんの体が小さくなる！　りりリジェ、あの人なんかどうにかして止める方法ないわけ!?」

「そんなん俺が知りたいわ!!!　あのいかれヴァンプ（ロスティスラフ）の大暴走を問答無用で止められるなんて、あいつ直属の部下かバルバロイかディアボロ様ぐらいのもんだぜ!?」

「問答無用、てことは力業ってことだよな」

ヴォーゴに抱えられたまま、ぼそりとタイキがつぶやく。は?、とリジェラスが眉をひそめるのと同時に、タイキは目を閉じて精神統一を開始した。

「……集え集え集え集え集え」
「え、ちょ、お前も一体何する気……！？」

タイキの言霊に反応して、面白いぐらいに彼の手元に集まっていく力の大きさに、さしものヴォーゴですら口元を引きつらせる。彼はタイキを止めようとするリジェラスを逆に制止して、完全に瞑想（トリップ）状態のタイキの体を抱え直し、ゆっくりと高度を下げていった。

一方地上では、完全に目が蕩けてイッてしまっているロスティスラフに向けて、無駄だと思いつつも残されたデルフェール、ゼフィストリー、リッパーが口々に制止の言葉を放っていた。

「こんの白髪ぁ！！　とっとと黙りやがれっつってんでしょーぉ！？」
「おるぅあぁこの充血ヤロー、タイキまで吹っ飛ばしやがってテメェただじゃおかねぇからなぁっ！？」
「アンデット総力であんたのこと叩きのめしてやりますよぉっ！」

……訂正、制止と言うより最早暴言であった。特にデルフェールの言葉はキャラが変わってしまっている。

そんな彼らの頭上から、思わず体の奥底から震えがはしるほどの存在感が近づいてきた。口を閉ざし、デルフェールたちは視線を上に向ける。暴風の中央にいるロスティスラフですら、「ん？」といった表情でそちらに顔を向けた。

ヴォーゴに腰の辺りを抱えられて降下してきたタイキはすでに目を開いており、自分でも驚くくらい集まった純粋な力を両手でしっかりと押さえ込んでいた。リジェラスの講義によって魔力をだいぶまともに扱えるようになっただろうとは感じていたのだが、彼自身、ここまでとは思っていなかった。

「……みんなと、俺の家を吹っ飛ばす気かぁあああああああああっっっ！！！」

そして、淡い光の粒として視認できるほどまでに高められた力をリング状にして、タイキはそれを勢いよくロスティスラフに向けて放った。その速度は、ロスティスラフが本能的に展開しようとした結界よりもなお速く。

……一秒後、ロスティスラフ暴走開始時よりもすさまじい衝撃が永久墓地全体を揺らした。

（10）　～　就寝時の訪問者？（後書き）

スミマセン。

爆音、絶叫、暴言の一大漫才。まさかロスティスラフの初登場でこのテンションを書くことになるとは思いませんでした。ええ、でも後悔は多分してません。このノリが大好きな人間ですから。

彼の訪問はまだ続きます。一ページにまとめようかと思いましたが、長い！と思ってやめました。

（11）　～　カモン・ナルシスト！（前書き）

すごく、前半後半でテンションが……。
別々にすればよかったのに、なんでか抱き合わせみたいな感じになってしまいました；

（11）　～　カモン・ナルシスト！

「いや、取り乱してすまなかった、タイキ。しかし、ふふ、あそこまで真っ向から僕のことを褒めてくれた人は久しぶりで……嬉しさのあまり」

　タイキの屋敷の中、こぢんまりとしたリビングに設置しているダイニングテーブルの一席に座っているロスティスラフは、すっかり落ち着いた様子で口調も柔らかくし、タイキ自身が用意したお茶をすすった。はたから見ていると、ごく一般家庭のど真ん中に上流貴族がいるようで、周囲の雰囲気から彼の存在はかなり浮いて見えた。

「嬉しさのあまりじゃないわよ、このはた迷惑ナルシストっ。ていうかなんでコイツごと吹っ飛ばさなかったのよタイキ！？」

「そりゃ俺も思ったぜ、なんっで周りの地面だけどっかんと吹っ飛ばしておきながら、コイツは無傷なんでぇ！？」

「……ゼフィもリッパーさんも意外と好戦的というか、ヴァンパイアのリーダー相手に『コイツ』呼ばわりっていうのもすごいね」

　ロスティスラフの正面に座って、同じようにお茶を飲んでいたタイキは、後ろに立つ二人の言葉に思わずため息をついた。ちらっと視線を右に移動させると、デルフェールも小さく頷いているのが見えて、さらに脱力する。

「あのね、確かに突然この人が暴走したんだから報復したっていいかなーって俺たちは思うけど、ヴァンパイアの人達の方がなんて言うか」

「あら、ヴァンパイアたちだってコイツの実力は認めてても、性癖

は認めてないわよ？　むしろ「なんで吹っ飛ばさなかったんですか！」って下級のヴァンパイアには泣きつかれるでしょうね」

がくり、とタイキは両肩を落とした。ロスティスラフはゼフィストリーの言葉に軽く頷き、口角を僅かに上げる。

「しかし、仕方がないだろう。僕のこの姿、僕以外の存在すべてが褒め称えるというなら、僕が一番に褒めて、愛してあげなくて何になると言うんだ！」

「タイキ、とりあえずコイツ叩き出しましょう。満場一致よ。あとはタイキがゴーサイン出すだけよ」

「あのねぇゼフィ、確かにいきなり暴走されて困ったけど、俺としては話も聞いてみたかったりするんだよ？」

なにせ、タイキが初めて会った自分以外の最上級魔族である。ここまで変わった人だとは思っていなかったが、先ほどゼフィストリーが言っていた「実力は認められている」という言葉を支えに、タイキはぐるぐると質問を考える。

そして、ふと質問云々よりも先に、素朴な疑問が浮上した。

「ていうか、ロスティ、スラフさんはなんでここに？」

途端、タイキの周りにいた魔族たちも深く頷いてロスティスラフに注目した。ロスティスラフはさらに笑みを深めながら、ゆっくりとカップをソーサーに戻して答える。

「新しいネクロマンサーがどのようなものか、自分の目で確かめてみようと思ってな。ゼフィストリーはもともとここにいたと噂を聞いていたが、魔人ヴォーゴが来ているというのは……まあ、そちらも大方僕と同じなんだろうが」

「よくまあ、上級のヴァンパイアたちが許しましたね？」
「いいや、無許可だ」

ずるり、べしゃりとダイニングテーブルの周囲でそれぞれがすっ転ぶ。ヴォーゴだけは、なんとか大鎌を取り落としかけるだけにとどめていたが。

「っ、じゃあとっととご自身の領土にお帰りになって下さい！！可哀想に、今頃トップがいなくなって阿鼻叫喚の地獄絵図となっている貴方直属のヴァンパイアたちが目に浮かびます！！」
「ふむ……確かに、新生ネクロマンサーの性格や、力の片鱗はしかと見せてもらったしな。なかなか面白い。今度は先に知らせを寄こしてから来訪するとしよう」
「二度と来ないで下さい。ヴァンパイアとは長いお付き合いでしたが、貴方がどこかの結界に足を踏み入れるたび被害が尋常じゃないんです。今回はタイキが直々に止めて下さったおかげで、なんとか屋敷周辺で収まりましたが……いえ、屋敷周辺というのが一番問題……！」
「デル、落ち着けって。何も屋敷が吹っ飛んでるわけじゃないんだからさ」

肩を震わせるデルフェールをそっとなだめて、タイキはお茶を飲み干し、身軽な動作で椅子から立ち上がった。それと同時に、ロスティスラフもそっと口元をどこからか取り出したハンカチで拭い、立ち上がる。

「では、突然の来訪申し訳なかった。僕はそろそろ自分の結界へ戻るとする」
「あ、はい。なんか会ってすぐに暴走だの爆破だので、大したおもてなしもできずに」

帰れ帰れーと小声でつぶやく外野を華麗にスルーして、タイキはロスティスラフに頭を下げる。そんな彼の様子に、ロスティスラフは一瞬目を見開き、次いで愉快そうに吹き出した。

「ふっふふ、『おもてなし』は十分に受けた。それと、僕もこうして砕けた口調になっているんだ。人間の世ならいざ知らず、魔族の世界は実力一番。タイキ、君も僕に対して敬語なんて使わなくていいのだよ？」

「あー、そう？　じゃあロスティ、スラフ……ごめん、なんか言いづらい。ゼフィよりも口が回らないや。普通に会話するときはロティでもいい？」

「もちろん。なかなか可愛らしい愛称ではないか……」

ロスティスラフはにこりと、同性から見ても魅力的としか言いようがない笑みを浮かべた。それを口に出せばまた先ほどの惨劇が繰り広げられるであろうことは分かっていたので、タイキもぎこちなく笑い返すに留まる。

「じゃあねーロティ」

「ああ、さらばだ」

玄関扉をくぐり抜けた瞬間、ロスティスラフの全身を漆黒の影が覆う。タイキやデルフェールたちが見守るなかで、ロスティスラフは包み込んだ影は次第に小さく、細かく分かれて、ぱさぱさと小さな羽音を響かせながら飛び去っていった。

月に向けて飛んでいった影のコウモリを眺めていたタイキは、ぽん、と背後から軽く頭に手を乗せられて振り返る。そこには、強い苦笑を浮かべたデルフェールの顔があった。

「タイキ、あんなことされて、あなたも疲れたでしょうに……どうして怒らなかったんです。あなたが一番、文句が言えたのに」
「だって、俺が言いそうなことみんな先に言うもんだからさ。それにあれだけ言われてて笑ってるし、あ、俺無理だって思っちゃって。もう怒れなかった」
「もぉ、タイキってば優しいんだからっ」
するりと近づいてきたゼフィストリーが、タイキを後ろから軽く抱きしめる。あはは と彼女の腕の仲で笑ってから、タイキはふと真顔になって。
「まあ、俺の怒りの大半は、あの爆発にぶち込まれたってのもあるんだけどね？」
……それからしばらく、永久墓地に住まう魔族たちの間では、今代ネクロマンサーの怒りに触れるべからずという言葉が幾度も繰り返された、とか。

※　※　※

それから数時間後。改めて睡魔に襲われたタイキがゼフィストリーたちを帰し、自身もベッドに潜り込んですやすやと寝息を立てていた頃。
音もなく、タイキの寝室の扉が開かれた。ベッドの上にいるなかで一番タイキから離れているホロウフレアがそちらを一瞥し、デルフェールの姿を確認してまた元に戻る。
「……まったく、妙なタイミングで、いろいろな人が来るものです

ね」

タイキを起こさないようにゆっくりとベッドに近づいてきたデルフェールは、己の主のあどけない寝顔に笑みを浮かべて、ぽつり、ぽつりと言葉をこぼす。今まで、言おうとして言えずにいた、自分のこと。

「あなたの記憶に残らずとも、あなたに向けてこのことを言うというだけで、私は満足ですから。……タイキには少し、理不尽だと思われるでしょうけれど」

ふわりと、結界内ではありえないほど清らかな風が、部屋を満たす。その風に乗せて、デルフェールは言った。

「私もまた、人間だったのですよ」

枯れ葉がこすれるような、かすかな声。それでも、それを音として吐き出せたことに酷く安堵した様子で、デルフェールは笑みを深め、また音もなくその場に背を向けた。

一歩踏み出すと、くい、とシャツが後ろにひかれた。

全身が強張る。振り返ることができない。何も、何も。

「ごめん、ついさっきホロに念話ってヤツで起こされてさ。寝てるふり、してた」

シャツから手が離されて、もう半歩、前に踏み出せるようになる。

「デル、そのことで、ずっと様子が変だったの？」

「……はい」
「どうして？」
タイキの疑問の言葉に、デルフェールの方が首をかしげる。どうして、など。
「だって……私は、タイキのように、選ばれて人から魔の道へ堕ちたわけではありません。それ相応の行いをしたからこそ、私は今、ゾンビとしての生を受けています。一度、タイキがもとは人間だったとおっしゃったとき、私も自身のことを明かそうかと思いましたけれど……」
「デルが魔族になったのと、俺が魔族になったのとじゃ、意味が違うってか」
振り返らないまま、デルフェールはぎこちなく頷く。すると、後ろからかなりな勢いでタイキが飛びついてきた。思わず前に転びかけながら、必死で踏みとどまる。
「た、タイキ？」
「そんな気ぃ使わなくてもいいんだよ！　俺はデルに、別の世界から来たってことしか話してないだろ？　ひょっとしたら、知らないうちにすんごい悪いことしてて、それを知ったこっちの世界のお偉いさんが「ああ、こいつは魔族にぴったりだ」って思って呼び寄せたのかもしれないじゃん」
「し、しかし」
「もういいもういい！」
デルフェールの言葉を遮って、タイキは素早く彼の前に回り込む。
「大体さ、他の魔族と話すようになってから、デルが周りと違うっ

てこともうすうす勘づいてたし。一人だけやたら速いし力強いし、頭良いし、本も読める。むしろ人間でしたーって言われて大納得だね」

にやりと笑って、タイキは戸惑いっぱなしのデルフェールの胸を軽く拳で叩いた。

「聞くだけじゃなくて、ちゃんと覚えておくよ。けど、デルがいいって言わない限り、俺も絶対他の人達にこのこと言わないから。だから、安心して、さ？」

「……はい、ありがとう、ございます」

デルフェールはそっと、タイキの頭に手を伸ばした。そこで、気持ちが表れてか若干ただれている自分の手の平に気付き、慌てて引っ込めようとする。しかし、すぐに手首をタイキにつかまれて、彼自身によって頭に置き直された。

「これも、もう特に気にしない」

「いえ、私が気にするんですけど」

「いーのいーの」

そこまで言って、タイキは一度大きくあくびをした。ベッドの上でじっとしていたホロが飛んできて、タイキの肩に一枚の毛布を掛ける。

「さ、ネクロマンサー、そろそろお休みを」

「あー、……うん……デル？」

「はい、タイキ」

「おやひみ」

「……おやすみなさい、良い夢を……」

（11）　～　カモン・ナルシスト！（後書き）

はい、やっと言わせてあげられました。
いつもの自分なら、こういうことはほとんど最終回くらいまでバラさないはずなんですけどね。なんとなく、今回はいいだろうって思えて……。
デルが人間だった頃のお話しも、もちろんさせていただきます！
……よ、余力さえ、あれば；；；；

（12）　～　太陽光って大切だよね（前書き）

ギャグ　↓　シリアス？　↓　ほのぼの　↓　ギャグ……

この循環が意外に書きやすいと言うことに気付きました。だんだんとテンションが上がって、突然下がるという感じですね。

そして、その法則で言うと……って、タイトルからして分かりますかｗ

（12）　～　太陽光って大切だよね

いろいろと大騒ぎだった夜を終えて、次の日。
デルフェールは鼻歌交じりに、手袋をはめた手で待機の使う食器や調理器具などの手入れをしていたが、ふと背後に視線を感じて笑顔で振り返る。

「おはようございます、タイキ」
「……お、おはよー」

若干挙動不審な様子で近づいてくるタイキに、デルフェールは思わず昨夜の会話を思い出す。
彼の表情が一瞬無くなったことに気付いたタイキは、慌てて手を振り、彼の考えを否定した。

「違うから！　断じて昨日のことでこんなんなわけじゃーなくて、そのー」
「で、では……？」

そろって挙動不審になり、視線すら合わせることが困難になってきた二人の様子に、ぱたぱたと軽い羽ばたきを響かせて近づいてきたホロが呆れたように言った。

「ネクロマンサー、言うだけ言ってみたらどうですか？」
「あ、ああうんそうだね！　よし、デル、俺外に出てみたい！」
「ダメです」

このやりとり、およそ二秒。がくりと膝をついたタイキの前で、

デルフェールは腰に手をあてていつもの『お説教タイム』に入る。

「まったく、突然どうしました？　最近リジェラスに魔術の扱い方を教えてもらって、まあ昨日もその力を拝見しましたが……力が使える、イコール自分の身を確実に守れるということではないのですよ」

「いや、遠出じゃない。全然。ちょっと森に行きたいだけなんだってば。うん、森っていうか……」

上目遣いでデルフェールを身ながら、タイキはため息をつきながら言う。

「さすがに、太陽が恋しい」

「……はい？」

※　※　※

二時間後。身支度を調えたタイキは、自分の護衛を買って出てくれた面々を見回した。

「ごめん、俺の我が儘にまた付き合わせちゃって」

「いいのよ～、結界の外に行くって言われたときには、どうやってタイキの記憶をいじろうかって思ったけど……人間の町に行きたいとか、そういうのじゃなかったのね」

くすくすと、普段よりやや露出の少ないドレスをまとっているゼフィストリーが言う。その隣で、翼や尾をしまい、人間そっくりな容姿に擬態したリジェラスが、組んだ手を後頭部に回しながら笑う。

「見える護衛は俺とゼフィストリーで、見えない護衛にデルフェー

ルの率いるアンデット集団か。お前、本当に気に入られてるよな」
「あら、あんただってタイキのこと気に入ってるようにしか見えないけどぉ？」
「はんっ、俺は上の命令でここにいるだけだっつーの！」
「その上からの命令に、タイキに魔術を手取り足取り教えるなんて項目あったのかしらぁ～。そこんとこどうなの？　ヴォーゴ」
「……ある、とは、言えんな」
「ちょ、おい！？」

賑やかな面々に囲まれて、タイキはデルフェールの手を握ったまま笑みをこぼす。

「デルは、他のゾンビとマッドハンドたちと一緒に地中からだっけ」
「はい、確かタイキはホロに『念話』を教わったのですよね？　それで私たちとも会話ができるはずですから」
「……あれさ、意外と難しいんだけど」
「それも練習あるのみです。頑張ってください」

やがて、タイキの屋敷から一直線に歩いてきた彼らは、永久墓地と外界の森とを繋ぐ結界の出入り口に辿り着いた。いくつかの柱を眺めて、ゼフィストリーが今回使う出入り口を決める。

「ここが一番人気少ないかしら。じゃあ、ちょっとだけよ、タイキ。私たちから離れたら、しばらく我が儘きいてあげないんだから」
「う、うん」

惜しみながらデルフェールの手を離し、代わりにゼフィストリーの手を握る。タイキがそっと振り返ると、デルフェールは他のアンデットたちにそれぞれ指示をして、するりと地中に消えてしまった。

『タイキ、タイキ、私の声が聞こえますか？』
「うん、感度良好って感じ。ちゃんと聞こえるよ」
「うっし、じゃあ行くとするか！」

リジェラスの言葉に頷いて、タイキは周囲を飛び回っていたホロに軽く手を振って、ゆっくりと柱に向けて歩き出した。
一歩先を歩いていたゼフィストリーの姿が見えなくなった、かと思えば、水の中を泳ぐような抵抗を感じ、足を止めかける。

「え？」
『タイキ、そのまま進んでください。大丈夫ですから』

戸惑うタイキに向けて、デルフェールの穏やかな声がそう促す。彼がそう言うならばと、タイキは決意を新たにもう一歩足を踏み出した。
妙な抵抗力は、足を踏み出した瞬間に消え去った。かわりに、今までごつごつとした永久墓地の土しか踏んだことのなかった足の裏に、さくりと柔らかな感触が伝わってくる。見上げれば、蒼天。

「っぉおー！」

久しぶりに見る青空に歓声を上げて、タイキはきょろきょろと辺りを見回した。この世界にやってきてから、今まで黒と灰色と薄青で構成された結界世界ばかりを見てきたタイキにとって、草花が覆い茂る深緑の森はとても新鮮だった。
そして、なにより。

「太陽！　うわっすげぇラッキー、ど真ん中！」

再度見上げた空に浮かぶ、直視することなどできそうにないほど

輝いている太陽。その光を全身に浴びて、タイキは大きく深呼吸をした。

「すーっ、はーっ、あー、目が覚めたって感じがするなぁ。魔族の体になったおかげで、月明かりでも十分なんだけど」

長々と独り言をつぶやきながら、ふと、先ほどまで肩にあったホロのふわふわとした感触が消えていることに気付いた。一気に冷静になって辺りを見回してみれば、なにやら森の方でうずくまっているリジェラスと、その背を軽く叩いているゼフィストリーがいる。

「ちょっと、どうしたのさー？」

「あ……タイキ、ごめんなさいね～」

タイキが呼びかけると、引きつり笑いを浮かべたゼフィストリーがリジェラスの背から手を離す。

「リジェラスってば、人間に擬態するのは完璧だったくせに、地上に流れている神気への護りを忘れてたっていうのよー？　まあったく」

「ち、ちくしょう……最近結界内の通路しか使ってなかったから、うっかり……」

しばらく奥でごそごそしていたリジェラスは、若干青い顔をして、のろのろとした動作で茂みから姿を現わした。あまりに具合が悪そうで、タイキも心配そうな表情を浮かべる。

「リジェラス、平気？　俺もう戻ってもいいけど……」

「え、もうって、まだ五分もいないじゃない」

ゼフィストリーが目を丸くするが、リジェラスはタイキの言葉に深く深く頷いた。初めて見る弱々しい悪魔の姿に、タイキは「地上って魔族にとっては危ないんだなぁ」と再確認。

「デル、リジェが倒れそうだし、俺も満足したから戻ろうか」
『本当に、よろしいのですか？』
「うん、また太陽恋しくなったらみんなに頼むよ」
『わかりました……っ！？』
「デル？」

呼びかけて、タイキはデルフェールの返事を聞く前に、乱暴な動作でゼフィストリーに抱きしめられた。突然のことに目を白黒させるタイキの周囲で、空気が一気に張り詰める。

「……んだぁ、女子どもがこんな山ん中なんて」

がさがさと茂みを豪快に蹴散らして、タイキたちの前に現れたのは、巨大な弓矢を背負い動物の毛皮を纏った、タイキがイメージする『狩人』そのままな大男だった。

（13）　～　初・人間との接触（前書き）

前回の続きになります。

（13）　～　初・人間との接触

ハンスと名乗ったその大男は、タイキが思ったとおり、この山のふもとに住んでいるという狩人だった。ハンスはタイキたちを自身の小屋に案内して、からからと笑う。

「いや、よかったなぁあんたら。最近この辺りの山々じゃ魔族の動きが活発になっているって聞くしよ。あんたらも多分アレだろ？魔族に襲われた山賊んトコから逃げてきたって感じか。その手の人間も多くて、下の村の奴らはバタバタしてらぁ」

彼が自分で作ったという果実酒を、これまた彼お手製の木のカップになみなみと注いで、テーブルに座るタイキたちの前に置いていく。まっさきにリジェラスが手を伸ばして匂いをかぎ、ぺろりとしずくを舐めて頷いた。

「うん、なかなか美味い」
「そりゃどーも。……俺んとこの酒まで疑うかね」
「本人が狩人だって言ってもな、山賊でない保証はねーし」

はっきりと言うリジェラスに、ハンスは苦笑を浮かべて手を振った。

「ま、疑うんなら疑ってもいーけどよ。で、なんか毒味?、は済んだみてぇだが……」
「ええ、私たちもいただくとするわ。ね、ゾーン」
「あ、うん」

ゼフィストリーとともにカップを手にとって、タイキはおっかなびっくり中の酒をすする。ちなみに、ゾーンというのはここに来るまでの道中、念話で三人が考えたタイキの偽名である。ゼフィストリーとリジェラスは、タイキが普段呼んでいる愛称で通すこととなった。

意外にもアルコールの味が少ない果実酒を、普通にジュースみたいだ、と言って飲み干すタイキ。そんな彼に穏やかな笑みを向けていたハンスだが、急に口調と表情を改めて尋ねてくる。

「んで、ゼフィにリジェにゾーンだったか……あんたら、帰るあてとか、あんのか？」

心から心配そうに聞いてくるハンスに、タイキは曖昧な笑顔を浮かべる。

（まっさか山の奥ですなんて、言えないしなぁ。魔族ってばれたら厄介そうだし）

どう返答するか、答えに窮するタイキの隣で、ゼフィストリーはさも悲しそうに、残念そうに言う。

「あては、ありませんわ……。おそらく私たちがいた場所も、見る影もなく山賊に荒らされていることでしょう」

「けどま、動かないわけにはいかないからな。適当に、暮らす場所を見つけるとするさ」

「あ、あんたらだけでか！？」

信じられないと言外に含ませながら、ハンスが叫ぶ。確かに、まだ少年の域を出ない容姿をしたリジェラスに、上流階級の雰囲気を漂わせるゼフィストリー、そしてリジェラスよりもなお幼く見える

タイキの三人では、近くの村にたどり着くことすら困難だろう。
彼らが、見た目通りの力だけしか持っておらず、『人間』であったならば。

「美味しい果実酒をありがとうございますわ、ハンス」
「おう、ここまで案内もしてくれたしな」

彼に遭遇してしまったことに対する苛立ちを抑えつつ、ゼフィストリーとリジェラスは席を立つ。それに続いて、タイキも慌てた様子で立ち上がった。

「本当に、ご親切にどうも。それじゃ」
「あ、ちょ、待てって……！」

ハンスが腰を上げて、手を伸ばす。その指先が一瞬、タイキの纏うマントに触れかけたが、痺れるような感覚がして思わず手を引っ込める。

「えぇ？」

彼が指先を見つめるのと、先導していたリジェラスが小屋の扉を開き、飛び出すのは同時だった。はっと視線を戸口に向けても、もう遅い。
最後に小屋を出たゼフィストリーは、茫然としているハンスに艶やかな笑みを向けると、勢いよく扉を閉めた。そして、先ほどまでの上品な振る舞いをかなぐり捨てて、全速力で小屋から離れ出す。

「リジェラス、タイキを連れて飛んでっ！」
「おうよ！」
「ごっ、ごめん二人ともー！！」

小屋の影に隠れて、手の平サイズの蜘蛛に化けたゼフィストリーと、翼だけを元に戻し、タイキを抱えて空へと飛び立ったリジェラス。

……初めて会った、心優しい人間。ハンスを殺さないで欲しいというタイキの願いを、二人は完璧に叶えてくれた。

「ったく、会ったところですっぱり首飛ばしちまえば問題なかったのによぉ」

「う、だって、向こう完全に俺たちのこと、迷い込んだ人間だって思ってたじゃん」

「犬も連れずに、人間のすり減りすぎた本能だけをあてにして狩りをするヤツなんざ、人間の中でも馬鹿だよ。あーあ、服も破けちまった」

翼が飛び出してきたせいで、背中部分が大きく裂けてしまったワイシャツとベストをはためかせて、リジェラスは大して残念そうでもないふうに言う。

「デルに心配かけただろーなぁ」

「かけただろうが、あいつのことだから多分地中から全部見てたと思うぜ。……まあとにかく、今度お前を地上に連れ出すときは、ホロウフレアで周りに人間がいないか完全に確認してからだな。山賊でなかったら襲うなとか……生殺し過ぎるだろ」

「ごめん」

タイキは、ちゃんと気付いていた。ハンスがあの場に現れた瞬間、ゼフィストリーとリジェラスが彼を殺す選択肢しか持ち合わせていなかったことを。『念話』で二人を制止し、ハンスが考えているとおりに振る舞おうとタイキが提案しなければ、一つの人間の死体が

できあがり、結界にいる下級魔族たちの腹の足しにされていたことだろう。

タイキは、ちゃんと気付いていた。ハンスがあの場に現れた瞬間、ゼフィストリーとリジェラスが彼を殺す選択肢しか持ち合わせていなかったことを。『念話』で二人を制止し、ハンスが考えているとおりに振る舞おうとタイキが提案しなければ、一つの人間の死体ができあがり、結界にいる下級魔族たちの腹の足しにされていたことだろう。

（でも、俺は、やっぱり）

急に黙り込んだタイキの後頭部を見下ろしながら、リジェラスは心の中でため息をついた。眼下の森を見下ろして、適当な場所に着地をしようと翼を広げる。

タイキのことをおもんぱかって、普段以上にゆっくりと地に足をつける。タイキの両足もしっかりと地面を踏みしめたのを確認して、リジェラスは彼の腰から手を離した。

「ぉうわっ！？」
「はぁっ？」

とたん、ずでんとその場でタイキがひっくり返った。慌てて助け起こそうとリジェラスが駆け寄る前に、地中からにょきにょきと手が伸びてきてタイキの頭に近づいていく。

「タイキ、タイキ、大丈夫ですか！？」
「う、うん……ごめんリジェ、ちょっとぼんやりしてた」
「おいおい……」

リジェラスが呆れた声を出すのと、デルフェールが地中から完全

に姿を現わすの、森からかさかさと近づいてきた蜘蛛が人間……ゼフィストリーの姿になるのは、ほぼ同時だった。

「タイキ！　ちょっとリジェラス、あんたもっとちゃんとタイキを支えてあげなさいよね」

「んだとっ」

「ゼフィ、俺が変に力抜きすぎてただけだってば！　リジェは悪くないって」

タイキの取りなしによってなんとかその場は収まった。タイキの手や額についた土をほろいながら、デルフェールがあたりをきょろきょろと見回す。

「確か、この辺りにも結界への入り口がありましたよね？」

「ああ、確認済み。あそこの三本目の木んところだ」

迷わずリジェラスが指し示した木の方をタイキが見るも、なんということはない、ただただ普通な木々が並んでいるようにしか見えなかった。首をかしげつつ、タイキはほとんど癖のような感じでデルフェールの手を握る。

「じゃあ、帰ろっか」

「はい」

「デルも、リジェやゼフィもみんなも、付き合ってくれてありがとう」

タイキが笑って礼を言うと、ゼフィは満面の笑みでそれに答え、リジェラスは苦笑を浮かべてそっぽをむき、地中からはゾンビやマッドハンドたちが手だけを出してぶんぶんと振り回していた。

（……ネクロマンサーが、人間に接触した、か）

（13）　～　初・人間との接触（後書き）

※　ここで、空色レンズの失敗。

……本当は、アンデットとビーストは人間の言葉を使えない設定にしていたのですが、普通にゼフィストリー会話させてしまいましたｏｒｚ　　ううん、迂闊……。

ということで、人間形態のゼフィストリーは人間の言葉が使えるとして、アンデットと獣状態のビーストは人間の言葉が使えない、ということにしようかと！　うわ、めちゃめちゃだ。すみません；

ハンスはこのままでいくと一発屋になりそうな雰囲気なのですが、一応もう少し出番を作ってあげますか。

次回の更新は外伝です。アンデットのところから帰っていった、ナルシストヴァンプのその後ですね。ていうか、むしろ彼の部下たちの悩みようですか……？

ちゃくちゃくとお気に入り登録してくださっている方が増えて、ほくほくですｗ

ありがとうございました！

外伝（3）　～　ツェーザリの憂鬱、のち…

「ロスティスラフ様、今回の視察、いかがでございましたか？」
「面白いものが見れた」

柔らかな革張りのソファに身を横たえたまま、黒マントを床に脱ぎ捨てた格好で髪をかき上げるロスティスラフに、傍らに立つ彼の側近であるヴァンパイアが盛大なため息をついた。

「……ロスティスラフ様、せめてもう少し姿勢を正していただけませんか。それか、マントはわたくしに手渡ししていただけると助かります」
「ああ、そうだな、今度からそうするとしよう」
「……はぁあ」

ロスティスラフに負けず劣らずな美少年である彼、ツェーザリはもう一度ため息をついた。

「あと、わたくしどもに何も言わず領地を出ないでください。それと自我強化装置も絶対に外さないでください。まさかとは思いますけど、ネクロマンサーの領地で暴走なんてなさったりしてませんよね？」
「ああ、したな」
「そうですか、あははは」

笑いながら、ツェーザリはぱちんと指を鳴らした。とたん、ロスティスラフの執務室にわらわらと他の上級ヴァンパイアたちがなだれ込んでくる。ロスティスラフの手伝いや、身の回りの世話を行な

う専門のヴァンパイアたち……つまりは、ヴァンパイア種族きっての精鋭揃い。

「な、に、を、なさってるんですかあんたはぁあああああああっっ！！！」

彼らが体勢を整えるよりも速く、ツェーザリは持っていた書類の束でロスティスラフの側頭部を殴りつけた。すっぱぁん！！、と気持ちの良い音が響き渡り、ツェーザリ以外のヴァンパイアが顔を引きつらせる。

「今代のネクロマンサーはご無事なのですか、アンデットたちは！？　もしもこれを境にアンデットと全面戦争なんて事になったら、魂を引きずられて向こうの同胞にされるのはわたくしどもなんですからねぇえええっ！？」

「ふっ、安心しろツェーザリ。被害は最小限に食い止められた。……他でもない、ネクロマンサー自身の手によって、な」

「はい？」

怪訝そうに書類の束を下げるツェーザリに向けて、ロスティスラフは子どものような表情を浮かべたまま、ソファから上体を起こした。

「まだ覚醒したばかりと聞いていたが、力は今まで見てきたネクロマンサーの中でも突出している。……見た目は、幼いがな」

「今まで……って、確かロスティスラフ様がヴァンプとなられてからも四回ほど交代がありませんでしたか？」

「僕がただのヴァンパイアだったときも含めると、七回だな」

ソファの背もたれに腕を引っかけ、ロスティスラフは目を閉じる。

今までにないリーダーの様子に、対おしおき要員（にみせかけた、ロスティスラフの抵抗を分散させるためだけの人員）はそろって戸惑った。誰よりも、直接リーダーを攻撃したはずのツェーザリが驚いていた。

（あそこまで露骨にひっぱたいたのに、抵抗どころか睨みさえしない……？）

よほど、その新しいネクロマンサーとやらを気に入ったというのか。

「……とにかく、今は早く自我強化装置をつけてください。そして、あなたがいらっしゃらない間にたまってしまった書類に目を通してください」

「……分かっている」

ロスティスラフは目を開くと、近づいてきたヴァンパイアが深紅の布にくるんで持ってきた、細い金色のブレスレットに手を伸ばした。無言でそれを右手と左手に二つずつ、計四つ装着して、「これでいいか」とでも言うかのようにツェーザリに見せびらかす。

「では、こちらへ」

「……このままでも、サインできるが」

「歪むでしょうに」

ツェーザリは一瞬視線を彷徨わせて、やがて一か八かと心の中で思いながら、こんなことをつぶやいた。

「真面目に仕事をしてくだされば、誰かお供を連れてという条件で、……もう一度アンデットの領地に行ってもいいで」

「よし、書類をそちらに並べておいてくれ。今日中に済ませよう」

とたん、てきぱきと動き始めたロスティスラフに、ヴァンパイアたちは最早あ然としている。

（これは……）

「……楽しかった、みたいですね」

「ああ」

珍しく、何かを含むような、相手の出方を窺うようなものではなく、心からの笑みを浮かべているロスティスラフを見て、ツェーザリは今回三度目の……けれど、どこか嬉しげなため息をついた。

外伝（3）　～　ツェーザリの憂鬱、のち…（後書き）

ロスティスラフ陥落の話。これからどんどん彼も過保護になっていくかと…フフフ。

さて。

この外伝が終わると、大体もう数話くらいでシリアスゾーン突入なのですが。

まだほのぼのしていたいですね！　でも、ネタが…これ以上、新キャラは…。

そんなこんなで、ネタが詰まった&勉強してないなどの理由で、しばらく、いえ多分かなり放置になる予感がします。

この予感は外れることも多いのですが……今回は、どうでしょう（汗

それでは、また次回～。

外伝（4）　～　どこかでの、思惑（前書き）

一転して、『どこか』の視点になります。シリアスってます。

外伝（4）　～　どこかでの、思惑

かさり、と小さな音を立てて書類が床に落ちた。それを拾いあげた人物は、ざっとそこに書かれた内容に目を通し、眉をひそめる。

「……ずいぶん、山賊の類による被害が減っているな」

「は、どうにも目撃される山賊の数自体が減少しているようです。……山賊同士の潰し合いというよりは、それらしい死体すらここまで少ないとなると」

「魔族、か」

書類を拾った男は、それきり押し黙って部下に書類を突っ返した。足早にその部屋を抜けて、突き当たりにある一段と大きく、豪奢な扉をノックする。

「失礼します」

「ああ」

すぐに返ってきた声に、男は表情を引き締めて扉を開く。

そこにいたのは、男自身よりも一回りは若く見える、青年といってもいい容姿の男だった。彼はまっすぐに姿勢を正したまま、淡々と目の前の書類に目を通している。

「団長、陛下のご決断はまだなのですか」

「……いや」

急かすような男の言葉に、団長と呼ばれた青年はペンを滑らせていた手を止める。

「第一騎士団から第三騎士団、および第二術士団の、永久墓地探索の任が、今朝下された。おそらく、副団長以下の面々には、明日の謁見にて知らされるだろう」

「永久墓地……亡者共の巣窟ですか」

「各山々には、すでに陛下お抱えの諜報部隊が向かっているからな。彼らの得た情報から、決定されたことだ。此度の山賊の減少も民の心の内を考えれば喜ばしいことだが、原因がわかってしまえば」

なにより、とつぶやいて、団長はペンを置き、手を組んで両肘を机につく。

「なぜ、今になって魔族の狙いが山賊へと移行したのか、というのも気になるところだ。諜報部隊によると、山に迷い込んでしまう村民はまだそこそこの人数いるらしいしな。魔族の残り香もより強くなっているとか」

「魔族がさらに力をつけた、と？」

「……我が国にある最大の結界は、アンデットの溢れる場所たる永久墓地。そして、そこでは彼らの主も生まれ出でる」

暗い表情で語る団長の前で、男はギッと強く拳を握りしめた。

「新たな、ネクロマンサー……」

魔族を統べる、最上級魔族。死に損ない（アンデット）を従える死霊使い（ネクロマンサー）。

「本来ならお前にも、先走って伝えてはならないと言われていたことだがな。まったく」

「いえ、謁見のときに伝えられるまで、私は黙っておりましょう。……騎士団にその報が回ってからは、全力で打ち込ませていただき

ますが」
「ああ、頼んだ」
男は、一見すると賊のような荒々しい笑みを浮かべた。しかしすぐにその表情を消し去って、団長に一礼をすると部屋を出ていく。扉が閉まり、彼の姿が完全に見えなくなったところで、団長は再びペンを持った。
かりかり、と事務的な音だけが、部屋を満たしていく……。

外伝（4）　～　どこかでの、思惑（後書き）

さて、フラグが立ちました（オイ

これで完全にストックが無くなってしまったので……どうしましょう。

とりあえず、ここから一気にシリアスにはなりません。もう数話ほのぼのしてからですね。

ではでは。

（１４）　～　それは能力というか体質じゃ？（前書き）

これからは三月の更新ペースが嘘のようなノロノロ更新……。
いえこの話もしばらくほおっておくつもりでしたがね！

では、多分四月最初にして最後の更新です。
五月は未定！！！

（14）　～　それは能力というか体質じゃ？

ぱたん、と小さな音を立てて、本が閉じられた。思わず振り返ったデルフェールは、少し自慢げに本を抱えるタイキと目があった。

「デル、読み終わった！」
「よくできましたね、タイキ」

今タイキが抱えている本は、以前からデルフェールが読み方を教えていたものではなく、表題から内容まですべてタイキ一人の力で読み解くためにしまっておいた『とっておき』である。

「ふぅ、これで大体の読み書きはできるようになった、かな。あーでもまだ書くのはちょっと苦手なんだよな」
「何事も練習あるのみ、ですよ」

穏やかに言って、タイキのために最近覚えた『お茶を入れる』という作業を慎重に再開するデルフェール。時間を正確に計り、タイキ専用のカップにお茶を注いで、小さく息を吐く。

木の実や果実ののった皿も手に持って、ダイニングテーブルの方へ移動したデルフェールだったが、本を手放して頬杖をつき、どこかぼんやりとしているタイキを見て首をかしげる。

「タイキ？　どうかしましたか」
「へっ、あ、ああ……いや、そういえば、リジェに教わって魔術も使えるようになってきたかなーって感じだけど、まだ俺自身（ネクロマンサー）の能力ってわかんないよなぁーって」
「ああ……それに関しては、なんとも言えませんしねぇ」

カップののったソーサーとデザートの皿をタイキの前に置いて、デルフェールは眉根を寄せた。今までにネクロマンサーとなったものたちが、それぞれ持っていた能力について考えを巡らせる。

「全関節外しは、もうお教えしましたよね……あとは、結界全体を一瞬で埋め尽くす毒の息や、望んだ者すべてに、寿命と引き替えの呪を与えるとか……基本的に、もととなった魔族の能力が強化されている場合がほとんどなんですよね」

「うん、今デルが言ったこと全部できないから」

「なにを言ってるんですか、できますよ、その気になれば」

「うげぇっ!?」

あからさまに悲鳴を上げてのけぞると、デルフェールは皿を乗せていたトレイを抱え直し、どこか傷ついたかのような表情を浮かべて頭を振った。

「……タイキ、そこまであからさまに、その、言われてしまうと」

「あああ違う、違うから！　デルとかみんなみたいになりたくないって訳じゃないって！　ただ俺ってほらもともと人間だったじゃないか？　だから、そう、なんかそういうのしてるってイメージが！」

「無理、なさらないでくださいね。大丈夫、あともう数年もすれば新しい体にも慣れてきますから」

……同じく元・人間なだけあって、妙に説得力のある言葉だった。

「と、とりあえず俺、リジェラスんトコで魔術教えてもらってくっからー！」

「夕食時にはきちんと帰ってきてくださいねー」

茶と果物を頬張り、勢いよく席を立ったタイキにやや遠慮がちな笑みを浮かべたデルフェールだったが、飛び出していった主の背に、そんな注意を呼びかけるだけにとどめた。

「まあ、しょっちゅう腕やら目玉やらが痛みもなく落ちるのを見ていたから、慣れるのも早かったのですけど……タイキは本当に、ほとんど人間の体から変化しないまま転生されたようですし」

そんなことをつぶやいて、デルフェールはてきぱきと茶器と皿を片付け始めた。

※　※　※

ホロを連れて荒野を駆け抜け、タイキはいつもリジェラスたちと魔術の訓練を行なう空き地にやってきた。だが、そろそろ訓練が始まる時間だというのに、リジェラスはもちろん、ヴォーゴも姿を見せない。

「どーいう、こと？」

「おぉ！　タイキじゃねぇかぃ！」

ホロともども、困り果てた様子で首をかしげていたところ、背後から突然聞き慣れただみ声が。素早く振り返ってみると、なにやら陶器の瓶を複数腰から引っ提げているリッパーの姿が見えた。

「リッパーさん、リジェたち知らない？　今日って訓練の日でいいんだよね？」

「あ、あー……確かになぁ。周期的には訓練の日なんだが、あれだ、

その前に報告の日だな」
「報告？」

がっちゃがっちゃとやかましい音をたてる瓶を一つ手に取り、近くの岩場に腰を下ろしたリッパーは、瓶のコルク栓を抜くと軽く頷いた。

「あいつらはデーモンだろぃ？　俺たちアンデットにタイキってぇリーダーがいるように、あいつらにはあいつらでリーダーがいる。そいつにこのアンデットの領地で起こったことを報告しに行く日なのよな」
「あー……デーモンのリーダーっていうと、ディアボロさん？だっけ」
「真名はシェル。いーかタイキ、あのイカレ鬼畜にはぜってぇ近づくな。いいな？　タイキの力は途方もねぇが、ヤツはそれと同じくれぇ途方もねぇ力を、完璧に使いこなしてやがる。あああああの、あのディアボロなんぞにタイキが攫われちまった日にゃあ……」
「え、ちょ、リッパーさん!?」

どうやら酒らしい、瓶の中身をばしゃばしゃと骨だけとなっている自身の体にぶっかけて、関節という関節を震わせるという妙技を連続させているリッパーに、タイキは慌てて声をかけた。

「攫われるなんて、見ず知らずの子ども相手にそんな興味示すわけ」
「ヤツぁ気まぐれで滅ぼした人間の町から、男女問わず何十人っつぅガキを自分の庇護下に置いて、適当に育ってきたところで乱交しやがるような変態だぜぃ……」
「……エート？」

『ランコウ』の意味はよく分からないが、なんとなく、リッパー

が言わんとしている内容は察することが出来た。まだまだ幼く見えるとて、タイキも十四歳。『そっち方面』には興味が出てくる年頃で。

だがしかし、スルーできなさそうな要素も混じっていたような。

「……え、ちょ、『男女問わず』？」

「あぁ、ああータイキは知らねぇかい。今代のディアボロは、なんつーか、自分の意志で年齢性別を自在に操れるんだとよぉ。耄碌してるような爺さんの姿にも、あどけねー幼女にもなれるってぇ話だぜ？　まあ基本的に美男美女の類にしか化けねぇらしーがよ」

「へ、へぇー」

「っと、悪ぃなタイキ！　胸くそワリー話になっちまってよぉ……」

とうとう最後の酒瓶まで空にした、酒まみれのリッパーは、心から申し訳なさそうにタイキを振り返った。タイキは若干遠い目をしつつ、片手を顔の前で振る。

「なんか、魔族の世界の見聞が広がった気がする。そっか、ディアボロさんはいろいろスゴイと……」

「この話、ぜってぇえええええに、もし万が一、ヤツと会う機会があっても口にするんじゃあねぇぞ？　したら最後、タイキだってどーなるかわかんねぇからよ。ホント、ワリー……」

「いやいや、リッパーさんが気にする事じゃないって」

それよりも、とタイキは居住まいを正して、リッパーがまき散らした酒が及んでいない地面に座り込んだ。なにやら真剣な様子のタイキに、酒の匂いに酔おうとしていたリッパーは慌てて意識をしゃんとさせる。

「ど、どうしてぇタイキ？　んなおっかねぇ顔してよ」

「俺、今自分が使える『ネクロマンサーとしての能力』っていうのがどんなものなんだろうって、考えたり探したりしてみるんだよ。なんか、俺に出来そうな、歴代ネクロマンサーの特殊能力ってリッパーさんは知らない？」

「特殊能力か。確かに、分かると便利だろーなぁ。多分タイキが今、頑張ってる魔術よか、数段楽に扱えるはずだぜぃ」

「ほ、ホント！？」

「ま、分かりゃあの話だがな」

皆目見当もつかん、と申し訳なさそうに頭を下げるリッパーに、タイキはやや残念そうに肩を落としながらも、軽く片手を振って答えた。

「ううん、デルにも自分で気付いたり、理解していくしかないって言われててさ……。でも、俺ってもともと魔族でもなんでもないのに、本当にそんな力があるのかなって……」

「なーに言ってやがんでぇ！」

ぺしり、と軽く骨の手の平でタイキの頭を叩いたリッパーは、ぽかんとするタイキに大まじめな（骸骨なので無表情なはずなのに）顔をして言った。

「あんなぁ、もともとアンデットっつぅ種族は、タフな体を使っていかにして敵を撹乱させ、昏倒させるかが下っ端どもの腕の見せ所よ。俺は一応スカルの上級魔族だから、こんな風に他の奴らには扱えねぇ武具とかで敵をわんさかぶっ飛ばせる。けど、魔術はデーモンやヴァンパイアの十八番よ。俺たちゃ、扱う脳みそが足んねぇのよ。けど、タイキはそれをあっさり使ってみせた上、あのリジェラスから技を奪うくらいにまでなってんじゃねぇか。魔族としての素質は十分。タイキ、おめえは焦らなくてもぜんっぜんいいんだかん

な。俺たちがいくらでも時間を作ってやるからよ！」

だんだんとまた酒の匂いが聞いてきたのか、呂律が怪しくなっているリッパーの心からの言葉に、タイキは明るい笑顔をみせた。

「ありがとう、リッパーさん。なんかリッパーさんと一対一で落ち着いて話す機会って、実は初めてだよなぁ」

「お？　おお、そうだなそうだなぁ！　いぃっつもタイキのそばにはデルフェールやら蜘蛛女やらがひっついてるからよぉ」

「あれ、リッパーさんって、デルのことも苦手？」

「ちいっとばかし、なあ。だがよ、蜘蛛女の比じゃねぇからな。あいつぁイイ奴だよ。ホントにな」

にっと笑みの形に骨を歪めたリッパーは、そのまま結界内に永遠浮かび続ける、巨大な月を見上げた。タイキとホロも、同じように顔を空に向ける。今宵は、半月。ちょうど綺麗に半分こにされた月が、ぽんと中途半端な位置に浮かんでいた。

月明かりも慣れれば気持ちいいもんだよなぁ、などと思ってタイキが目をつむると、頬の横でホロが揺れた。

「ネクロマンサー」

「ん？　なに、ホロ」

「先ほど、一対一とおっしゃっていましたが、私は？」

「あ、ホロはいーの。俺とホロ、そろって一つな」

「は……はい」

それから、しばらく。

なにやら悩み事も忘却の彼方へ押しやってしまうような、突然降って湧いた穏やかな時間を満喫していたタイキとリッパーだったが、タイキの帰宅時間が遅いことを心配したデルフェールが迎えに来た

ことによって、その時は、終わりを告げた。

「じゃね、リッパーさん。また何か話、聞かせてね」

「リッパーさん、今日はタイキのお相手をありがとうございました。では」

「おう、今度は俺からタイキの家にでも行ってやらぁな」

いつもよりも少し弱めな、青い月明かりの下で、二つの影が別々の方向に向かっていった。

（14）　～　それは能力というか体質じゃ？（後書き）

とにかく、のほほんと。
かなり気に入ってますよリッパーさんｗ

……あと、プロットからしてタイキは最強設定がくっついてきそうな予感がすると言わせていただきます。
わーいあと一話書いてキャラ紹介書いたら新章ですよ！
いつだよ！！！？

（15）　～　真剣トランプ（？）バトル！（前書き）

……おかしいな？　更新停止のはずだったのに、な？
あと、タイトルも若干おかしい。
これじゃあ普通のお茶会にしたほうが良かったわ！！！
トランプの出番一瞬じゃねーか！　こらぁ！

というわけで、どうぞ。久しぶりの更新。やらかしたわー……ｏｒｚ

（15）　～　真剣トランプ（？）バトル！

こんこん、と控えめにノックされた玄関扉を、ホロウフレアたちに近くの村から失敬してきてもらったパンをかじっていたタイキは驚いた表情で眺めた。

基本的に、最近タイキの屋敷を訪れる者はノックをしない。下級魔族たちは窓から低頭して声をかけてくるし、親しいものたちはノックをするような礼儀正しい性格の者は……はっきり言って、いない。

「誰だろ？　ねえデル」

「私が応対しましょう」

タイキの前に紅茶のカップを置きながら、デルフェールはお盆をキッチンに戻し、やや早歩きで玄関へと向かった。行儀悪く、体を反転させて椅子の背もたれに顎を乗せながら、玄関の方を伺っているタイキがデルフェールの肩越しに見た人物は。

「……うっわ、超美形」

思わず口に出してしまうほど、見目麗しい金髪の少年だった。ぴん、と髪の間から飛び出している尖った耳と相まって、タイキは一瞬「エルフ？」と言いかけた。だが、そんな美少年の背後に立っている人物を見て、言葉を失う。

黒いマントに、黒いシャツ。さらりと揺れる銀髪に紅い瞳は変わりないが、以前初めて会ったときのような威圧感や冷たさとは全く異なる、気の置けない友人に向けるような、そんな笑み。

「おお、久しいな、タイキ！」
「ロティ！？」
ほぼ条件反射のように彼、吸血貴族（ヴァンプ）ロスティスラフの愛称を叫んだタイキは、言った瞬間美少年が崩れ落ちたのを見て首をかしげる。
「えーっと、もしもし？　どーしたのさ、そっちの美少年は」
とたん、美少年は冷や汗を一筋垂らしながら、どこか引きつった笑みを浮かべながらタイキに向けて恭しく一礼した。
「い、いえ！　失礼いたしましたネクロマンサー。わたくしは上級魔族のヴァンパイア、名をツェーザリと申します。我が種族のリーダー、ロスティスラフ様の第一の側近でございます」
「あー……なにやらものすごい被害をこうむったであろうとみんなが予想してた、ロティの側近さん……って、若ぁ！？」
「あ、わたくしは変異種でして、幼体の姿ではありますが、生きている年月だけを言えば成体となんら変わりません」
「へえー、体の成長が止まってるってことか」
タイキは椅子から降りると、食べかけのパンを皿に戻し、とことこと歩いていってデルフェールの隣に並んだ。とりあえず、軽く頭を下げて歓迎の意を示す。
「えっと、ロティは久しぶり、ツェーザリは初めまして。ネクロマンサーのタイキ……っていうのは、ロティから聞いてるかな？　アンデットの結界へようこそ。ってわけで」
頭を上げると、また面白そうに笑っているロスティスラフと、驚きを通り越してもはや愕然としているツェーザリとを見比べながら、

タイキはまた、首をかしげた。

「一体、急にどうしたのさ？」

「ツェーザリたちに押しつけられた案件やら雑用やらをすべて済ませてきたのでな。遊びに来ただけだが」

「あ、そ、そう……で、あとツェーザリ、は、なんでそんなまたがっくししてんの？」

「い、いえ！　その、ロスティスラフ様を、そのような愛称で呼ばれるほど、仲がよろしいとは思ってもみなくて……」

もごもごと答えたツェーザリに、タイキは軽くぽん、と手の平に拳を打ち付ける動作で応えた。

「そっか、そういや俺新参者だしなぁ……長いから呼びづらいって理由もあったんだけど、やっぱちゃんと呼んだ方が」

「タイキ、最初に言っただろう。魔族は実力一番だと。ツェーザリも何か不満があるのか」

「違います！　純粋に驚いているだけです。ネクロマンサー、わたくしが言うのもなんですが、我が主は以前ここを訪れた際、アンデットの皆様がたに多大なご迷惑をお掛けしたはず……なのに、なぜそこまで？」

タイキは本当に不思議そうに尋ねてきたツェーザリの顔をじっと見つめていたが、突然フッと表情を和らげて二人を屋敷の中へ招いた。

「確かに、みんな吹っ飛ばされたりしたけど、それはそれ。暴走しなきゃ、ロティだってそんなに悪い人じゃないっぽいしさ。いろいろと聞きたいこともあるし、種族リーダーの先輩としてね」

「はあ……」

「とにかく入ってよ、玄関口で立ち話ってのもなんだからさ」

タイキは二人の案内をデルフェールに任せ、自身はキッチンへと向かっていった。お湯がまだ残っていることを確認して、ポットの茶葉を取り替えたりカップを用意し直したりと、来客の準備を着々と整えていく。

茶葉を蒸らしている間とっておきの果物を切り分けていると、居間の方がなにやら騒がしくなってきた。甲高い怒鳴り声、だみ声の罵声。ああーこりゃ来たな、と苦笑を浮かべ、タイキはさらにカップを増やした。

何かあったときのためと作ってもらっていた、木製の大きなおぼんに伏せたカップやお茶の入ったポット、フルーツ盛り合わせの皿などを乗せて、タイキはゆっくりとキッチンから顔を出す。直通の居間では、予想通りの展開が繰り広げられていた。

「なんであんたはのうのうとタイキの屋敷でくつろいでんのよぉっ！」

「まあたタイキになんかしようもんなら、ヴァンプといえど容赦しねぇぜぇ！？」

「も、申し訳ありません、本当に！」

「ツェーザリ、あんたはいいの。コイツ自身が謝らない限りは意味がないのよっ」

「……あいつもやっぱ苦労してんなぁ。なあ、ヴォーゴ。やっぱデルフェールって、側近の中でも当たりくじひいてるよな。あのタイキに付いてるんだし」

「……言うな、リジェラス」

おそらく彼らの気配を感じ取ったのだろう、タイキの友人たちが勢揃いしていた。おかげで居間の人口密度はびっちりで、テーブルに近づくことも出来そうにない。

どうしようか、と小さくため息をついたところで、食卓の椅子に座るロスティスラフの背後に立っていたデルフェールが気がついた。

「皆さん、一旦静かにしたらどうですか。タイキがキッチンから出るに出られなくて困ってますよ」

とたん、全員が口を閉じてキッチンの出入り口に目を向けた。そそくさと脇に避けたリッパーに笑みを見せて、タイキは大きな重いおぼんを抱えたまま、ゆっくりと歩き出した。

「よい、しょ」
「大丈夫ですか、タイキ」
「俺らが運ぼうかぃ？」

少しよろけながらテーブルへ向かうタイキを見て、デルフェールとリッパーが近づいてくる。タイキは首を振ってこれを断り、なんとか時間をかけてテーブルの上におぼんを置いた。タイキが軽く息を吐くと、周りで見守っていた面々もほっとした表情を浮かべる。

「タイキ、これは」
「あ、うん。頼んでいろいろ作ってもらったんだ。果物の方は、ゼフィのつてでビーストたちに頼んで、外の森から持ってきてもらったヤツ。お茶も、適当にハーブとか寄せ集めて作ったやつなんだけど……まあ、俺の味覚基準だから、他の人達はどう感じるか分からないけど」
「ネクロマンサー自身がブレンドしたのですか？」
「そうだよ」

タイキに無理矢理座らせられたツェーザリは、慣れた手つきでカップにお茶を注ぐ彼を疑問符だらけの表情で見つめる。そして、気

軽に差し出されたお茶とその風変わりな香りに、あり得ないだろうと思いつつ警戒心を抱いてしまう。

「あ、苦手な味だったら残していいよ。ブレンドするとき、みんなに毒草とか混じってないの確認したけど、できた味がダメだったらしょうがないし」

「いや、なかなか面白い風味だ。町で飲む紅茶とも全く違うが、ふむ……やや苦みが強いが、後味は爽やかだな」

「って、もう飲まれたのですか！？」

「なんだ、お前は飲まないのか。ネクロマンサーが手ずから淹れた茶だぞ」

ツェーザリはロスティスラフの言葉にハッとして、慌ただしく「いただきます」とつぶやくと奇妙な濃い緑色のお茶をすすった。色からしてどんなキツイ味なのかと思えば、それほどでもない。

「……美味しい、です」

「そう？　そりゃよかった。あ、ゼフィもリジェも飲む？」

「タイキの淹れてくれるお茶なら、何杯だっていただくわぁ」

「タイキー、ヴォーゴの分も！　なんか気になってるみたいだからよ」

「はいよ。じゃあデルと俺の分も淹れよっか」

「ネクロマンサー、私もちょっと飲んでみたいです！　いつも見てましたけど、言い出せなくて……でも、あの、皆さんがお飲みになるのなら、私も」

「いいよ。じゃ、俺のカップからね。……リッパーさんは」

「くぅっ、骨の体が憎たらしいぜぃ……俺は匂いで楽しむとすらぁ」

わいわいと賑やかに、タイキを囲んで談笑する魔族たち。種類も違えば種族も違い、客観的に見ても根本的に相性が悪いだろうとし

か思えない組み合わせの面々ですら、彼が間に入るだけで態度を軟化させている。

「面白いだろう？」

ゆっくりと振り返ると、すっかりお茶を飲み干して果実の一切れをつまんでいるロスティスラフが、珍しく子どもっぽい笑みを浮かべていた。

そして、おそらくは今の自分も。

「はい。わたくしも、もう少しお話しがしたくなってきました」

「彼なら喜ぶだろう。ふむ……では、彼が食いつきそうなものをそろそろ出すとするか」

そう言って、ロスティスラフはふところに手を突っ込んだ。手の平サイズの黒い箱が取り出されたところで、タイキが興味深そうに近づいてくる。

「ロティ、それなに？」

「最近、人間の貴族どもの間で流行っているというゲームらしい。これがなかなか興味深くてな。さすがは暇つぶしを次々と考え出す、知恵のまわる生き物というか……」

ぶつぶつと何やら皮肉混じりのことをつぶやきつつ、ロスティスラフは箱の蓋を慎重に開いた。そのまま勢いよく箱をひっくり返すと、箱と同じ大きさをした薄いカードが何枚もこぼれ落ち、テーブルの上一面に広がる。その絵柄を見たタイキは、思わず歓声を上げた。

「トランプじゃん！　うわーすげぇ、この世界にもあったんだ、こ

んなおもちゃ！」
「とらんぷ、というのか、これは。僕もいくつかゲームのルールを部下から聞き出している以外知らなくてな」
「いや、俺がいた……その、地方じゃ、こういうカードのことをトランプって呼んでただけで、他の人がどう呼んでるかは俺も知らないよ。うわあ、でもすげぇ、ちゃんと数も種類もそろってる」

きらきらと好奇心に目を輝かせているタイキを見て、ロスティスラフは満足そうに頷くと、勝ち誇った笑みを浮かべてタイキの背後に立つ面々を眺めた。リジェラスやデルフェールは苦笑いを浮かべており、ゼフィストリーとリッパーは今にもロスティスラフへ掴みかからんばかりの形相をしている。

「どうだ、タイキ。一つこれを使って遊んではみないか？」
「え、いいの！？　でも俺、コレ使った賭け事みたいな複雑ルールなヤツはできないんだけど……」
「ふむ……、では、タイキが知っているゲームで、何か簡単なものを教えてくれ。実を言うと、僕もルールを丸暗記しているだけで、実際にやったことはない」
「あーそうなんだ。えーっと、俺が知ってて、みんなもできそうな簡単な……っていったら、あれがちょうどいいか」

一人頷いたタイキは、おぼんをしまいカップを適当に押しやってから、けんのんな雰囲気を漂わせている面々に声をかけた。

「ねえ、これからやるゲーム、五人くらいいると楽しいんだけど、誰か参加してくれない？」
「ゲーム、ねえ。ねえねえ、それ、誰しにも勝ち目はちゃーんとあるんでしょう？」
「勝ち目平等じゃなかったらイカサマじゃん。そんなの許さないよ」

「じゃー俺もやってみるかな。おい、デルフェールはやんねーの？」
「私よりも、ツェーザリさんが参加された方がよろしいのでは」
「わ、わたくしがですか！？」
「あ、ちょうど椅子に座ってるしね。じゃあまずはこの五人でやってみるか！」

タイキ、ロスティスラフ、ツェーザリ、ゼフィストリー、リジェラスの五人が椅子に座り、他の者はさらにテーブルを取り囲むようにして、タイキがカードを混ぜ合わせるのを眺めていた。

「いい？　後ろで見てる人達は、俺たちが持ってるカードのこと、言ったら駄目だからね」
「それぐれぇならわかってらぁよ。見てるだけにすんぜ」
「よし、じゃあ、これからするゲームのこと教えるね。名前は……ババ抜き」
「ばばぬき？」

予想通り、首をかしげた一同に内心思わず笑ってしまったタイキだったが、なんとか表面上は真面目くさったままで、カードの束から二枚、選んで場に出した。

「これ、俺の知ってる名前だとジョーカーっていうんだけど……」
「ああ、確かに部下たちもそう呼んでいたな」
「そこは同じなんだなぁ。まあとにかく、俺はこいつのもう一個の呼び方を知ってるんだけど、それがババなんだ」
「なんでババっていうんだよ？」

リジェラスの直球な質問に、タイキは曖昧に笑って「そこまでは知らない」とごまかした。

「とにかく、今このカードの山には二枚のジョーカーがあるわけなんだけど、このうち一方を出したままにするんだ。で、この出したままのジョーカーはゲームに使わない。残ったもう一枚のババを山に戻して、これで遊ぶんだ」

しゃかしゃかとカードを混ぜ直したタイキは、一枚一枚丁寧に、五人の参加者の前へと順番に配っていった。

「んで、カードはそのまま全部配って……ほい、できた。手札を見て。同じ数字のカードが二枚あったら、それをどっちも真ん中に捨ててって。こんな感じで」

タイキはいいながら、三と八のペアをぽいぽいと場に捨てた。他の面々も、タイキと同じようにペアになったカードを場に捨てていく。

「なあタイキ、三枚あるやつは……」
「あ、一枚だけ手元に残して、残り二枚を捨ててー」
「えー……一気に無くしちまいたいな」

つまんでいたカードをしぶしぶ手元に戻したリジェラスを見て、タイキはそれぞれの手持ちカードが六、七枚になったのを確認する。

「よし、それじゃあ俺から始めるよ。残ってるカードを他の人に見られないようにして、俺は隣にいるロティのところから、カードを一枚だけ引くんだ。ロティもカード、誰にも見られないようにして……」
「ふむ、こうか？」

慎重に差し出されたロティのカードの中から、タイキは素早く一

枚を引き、おっ、と小さく歓声を上げた。

「ほら、五のペアがまたできた。んで、俺はこのカードをまた場に捨てて……ペアが出来ていくごとにカードを場に出して、カードが手元から無くなればその人は勝ちってゲーム！」

「あ、あの、ネクロマンサー」

「ん？」

「それでは、ジョーカーが一枚余ってしまうのでは……」

ツェーザリの質問に、にやりと笑ってタイキは答える。

「だから、ジョーカーを最後まで持っていた人は自動的に負け決定。後半からは、いかにしてジョーカーを他の人の手に渡らせるかっていう心理戦もあるんだよ」

「なるほど、なかなか奥の深いゲームですね」

頷くツェーザリも、隣のゼフィストリーからカードを引き、三のペアを作って場に捨てた。その後、ゼフィストリーがリジェラスからカードを引き、なんのアクションも起こさないまま、リジェラスがタイキからカードを引いたところで一周目が終わる。

「さて、どんどんやっていこう！」

※　※　※

一時間後。

「だぁあああ！　もう一回、もう一回勝負だぁあああ！！」

「ちょっとリジェー、もう十回戦やったじゃん……」
「ありえねぇ、ぜってぇ誰かイカサマしてやがるッ！」

「なぁデルフェール、ここんところまでで、こいつらの勝敗ってどうなってんでぇ？」
「ええと、一抜けしたのを数えれば、タイキとロスティスラフがそれぞれ二勝、ゼフィストリーが一勝、ツェーザリが……五勝ですね。ちなみにリジェラスは六回ジョーカーを持ったままで最下位です」

「こ、こ、こんちくしょぉおおおお！」
「リジェ、落ち着いて……次のゲームしようよ」
「いーや、一抜けするまではこれだ！　これ以外やらねぇっ！」
「もう飽きたわよぉ……」
「も、申し訳ありません」
「なに、ツェーザリが謝る要素など一つもありはしないではないか。単純にリジェラスに運がなかっただけのこと」

「ロティもそういうこと言うんじゃない！」
「っだあああああ！！！」

（15）～真剣トランプ（？）バトル！（後書き）

もう一話！

外伝（5）　～　タイキ視点の家族構成（前書き）

ここで外伝。うっすらタイキの元の世界での家族構成も、出てきてる、かな？
まあ、箸休めみたいな感じです。
ほのぼのの境地……。

外伝（5）　～　タイキ視点の家族構成

「そういや……デルって、お父さんみたいだよなぁ」

突然のタイキの発言に、本日タイキの屋敷に集まっていた魔族の面々はピタリと同時に動きを止めた。そんな中で、最も早く硬化が解けた人物……デルフェールは、茶器を抱えたまま笑顔を浮かべる。

「ありがとうございます、タイキ。そんな風に思ってくださるなんて」

「うん、なんかさ、ここに来たときからずっと一緒にいるし……」

「ネクロマンサー、私は？」

ふわりと音もなくタイキの肩にとまったホロが、黒くぱっちりとした目を潤ませてくる。

「……ホロはペット。もう溺愛」

「あっありがとうございますー！」

ふわもこきらめき光線を受けて、瞬間的にホロを抱え込み、抱きしめてその感触に頬をゆるませるタイキ。そこで、タイキの正面に座っていた美丈夫、ロスティスラフが慌てて自身のことも聞いてみた。

「タイキ、僕はどんな立ち位置にいるのだ？」

「え？　あー、ロティは兄ちゃんかな。もともと兄ちゃんっていたけど、年が離れてたからか、すごい俺に優しかったし。いろんな遊びしてくれたしさ」

「ちょっとちょっとちょっとぉー！　そんな新参者の吸血鬼なんてどうでもいいの！　ねぇタイキぃ、私はどうなのよぅ」
「んー、ゼフィはなぁ。母さん……でもないし、お姉さん……うーん？　やっぱおば」
「タ・イ・キ？」
「訂正しますゼフィお姉さんです」

ゆっくりと首筋を這う指先の感触に、えも知れぬ恐怖感を抱いたタイキは即行で発言をすり替えた。

「んで、リジェとツェーザリは友だちだろ」
「うへっ！？」「おや」

「リッパーさんはおじさんかな。ものすごい元気なじいちゃんでもいいし」
「じ、じいちゃん……孫……タイキが孫……？　ふぅむ」

「ヴォーゴさんは、あー、うん！　いつの間にかそばにいて見守ってくれるおじさん！　リッパーさんとは別タイプ！」
「……ふ」

どんどん魔族たちの、自分の中における立ち位置を決めていったところで、タイキに絡みついていたゼフィストリーが頬を膨らませて、ロスティスラフを指さした。

「ちょっとタイキ！　ヴォーゴやリッパーがおじさんだっていうなら、こいつもじゅーぶんオジサン……いえおっさんよ！」
「ふ、ゼフィストリー、この僕に向けて『おっさん』呼ばわりとはいい度胸だ……！」
「なによ、年齢的にはヴォーゴとどっこい、リッパーより年上じゃ

ない」
「え、そうなの！？」
「タイキ、こんなオバサンのいうことなんて、気にしなくてもいいのだよ。ほら、次はタイキがカードを捨てる番だ」
「あ、そかそか」
「ちょっっっっとぉおおおおお！！！　今オバサンって言いやがったわねぇ！？」

彼女を無視してカードゲームを再開するロスティスラフたちに、ゼフィストリーの口が耳元まで裂ける。ロスティスラフの隣に座るツェーザリは顔を引きつらせ、そのさらに隣に座るリジェラスは「俺はなにも見ていない」とそっぽを向く。唯一、ゼフィストリーの本性が剥げかけているのを直視せずに済んでいるタイキは、きょとんとした表情で彼らを眺めていた。

「えっと、ゼフィ？」
「ドウシタノカシラ、たいき？」

聞こえてくるゼフィストリーの声が、妙な響き方をしていることに気付いたタイキは、意を決して振り返る。そして彼女の顔の変わりように息を呑むと。

「ゼフィ！　美人、美人さんに戻って！」
「あらぁ」

『美人』という言葉に気をよくしたゼフィストリーは、今まで睨みつけていたロスティスラフのことなどどうでもいいかのように、あっという間に顔を元に戻してタイキにすり寄った。
ぴったりと互いの頬をくっつけて、ご満悦な表情のゼフィストリーと困惑顔のタイキを交互に眺め、手持ちのカードをテーブルに置

いたロスティスラフは一拍置き。

「ふむ、ゼフィストリー、君に幼児および少年好きの気があったとはな。なんなら、ツェーザリまでとはいかずとも、見目麗しい幼体のヴァンパイアを寄こしてやろうか」

とたん、ツェーザリの肩がびくりと跳ね上がり、ゼフィストリーの表情が凍った。あと、地味にタイキの動きも。

「ロスティスラフ様、そんなこと、わたくしが許しませんよ……それに、わたくしは幼体ではありませんと何度言ったら」

「少年のまま成長しないのだ、似たようなものだろう」

「いいえそこは断固否定させていただきます！！！　わたくしは立派に成人していますので！！！」

「……こんの、無神経野郎が……私は、タイキだから、だっつーのに……」

それぞれの言葉がテーブルを行き交い、周囲の魔族がこっそり距離を置こうとしたそのとき。

バァンッッッッ！！！！！

……一同そろって、目を向いた。

「た、タイキ？」

「ねえロティ」

「う、うむ」

デルフェールの呼びかけにも答えず、ゼフィストリーの抱擁も振り払って立ち上がったタイキは、薄い笑みを浮かべてロスティスラ

フを見据えた。その視線の冷たさに、さしものロスティスラフも動揺する。

「幼児って、どういうことかな？　俺、そんなガキに見えるかなぁ？」

「……む、人間の寿命ならば、十歳か、それより下ではないのか？」

（（（このヴァンプ空気読めよ！！！！！）））

全員が抱いた、この思い。タイキ自身は自覚がまだないが、彼の最上級魔族としての能力はかなり高い。そして、魔族たちが基本的に能力発動のきっかけとするのは、闘争心や興奮など……もちろん、そこには『怒り』の感情も含まれるわけで。

タイキと同じく最上級魔族であるが故に、そして普段のタイキの温厚さを知っていたがために、他の魔族よりも反応の遅れたロスティスラフ以外は全員が察した。

……タイキの地雷を。

「お、れ、は、もう十四だってーのぉ！！！」

※　※　※

マッドハンドたちは、のんびりとタイキの屋敷の周辺で雑談をしていた。

「今夜はずいぶん来客が多かったな。ネクロマンサー大丈夫かね」

「まあ、今回はあのヴァンプもお目付役が来てるし。何よりネクロマンサー自身であの暴走ヴァンプ止められるんだろう？」

「やっぱり、今代のネクロマンサーはすごいよなぁ」

そろってタイキを褒めそやしながら、彼らの会話はヒートアップしていく。

だから、気付かなかった。

タイキの屋敷の中から、とても、とても不穏な空気が漏れ出てきていることに。

どっかん！！！

……そんな轟音と共に、マッドハンドたちは悲鳴と共に吹っ飛ばされ、タイキの屋敷の屋根が、一瞬浮かび上がりましたとさ。

※　※　※

「……ゴメンナサイ」

「ああ、わかった。お前がキレるとどうなるか、よーくわかったから」

「大丈夫よタイキ。ほら、その変なポーズやめて……顔上げてってば」

「変なポーズじゃなくて、これは俺の国に代々伝わる最上級の謝罪のポーズ『土下座』です」

「謝罪なんていいですから。とにかく、タイキがこのまま暴走してしまわないでよかったです」

「ふむ、僕らにも大した怪我はなかったしな。せいぜい衝撃波で家具が粉々になったぐらい……」

「てめぇは黙れよ！」「ロスティスラフ様黙ってください」

「ほんっとゴメンナサイ！　……うう、魔族になってから、なんか俺短気になってないか？」

外伝（5）　～　タイキ視点の家族構成（後書き）

さて。（１５）と連続させると、９０００文字ちかいのではないでしょうか。
うわ、長。

最後に、特に明記していませんでしたが『第一部　アンデットの結界編』はこれにて終了です。
この次には人物紹介を入れます。
そのさらに次から、『第二部　王宮編』に突入って感じですか。
第二部は一気にほのぼのじゃなくなります。どシリアス連発ですね。

……いつ書けるかわかりませんがぁ！

人物紹介　～　魔族編（前書き）

『第一部　アンデットの結界編』における登場人物たち。
いろいろガサガサ書いてます。本編ではあまり詳しく書かなかったことも書いてある……かも？

主に自分の記憶整理用ですｗｗｗ（爆

人物紹介　～　魔族編

□　タイキ（熊谷大輝）　→　いきなり人外に転生させられた残念（？）主人公

十四歳。もともとは他の男子より少し長いだけの髪、垂れ気味の目、低めの身長に眼鏡といった風貌。髪の長さ以外は転生したあとも変わっていない。視力はどちらも０．１くらい。
肝試しの最中にいきなり異世界召喚され、しかも知らないうちに転生させられて人間ですら無くなっていたという、不幸一直線コース。
魔族四種族のうち、アンデットを統べる死霊使い（ネクロマンサー）となる。
最初の頃は、とても友好的だったデルフェールにでさえ怯えていたが、最近ではリジェラスに空から落とされても泣くことが無くなった。基本的に、普通の人間よりもタフ。ホロ（白フクロウバージョン）を抱きしめるのが大好きという、やけに子どもっぽい面も見せる。

□　デルフェール（愛称：デル　本名：？）　→　召喚され、右も左も分からぬ主人公のお目付役ゾンビ

異世界に召喚されたタイキを、誰よりも早く出迎えた。ただ、出会ったばかりの頃は力が底をつくスレスレだったので、よく体がバラバラになっていた。今では、タイキの『供給』のおかげでちょっとやそっとじゃ腐り落ちない。
年齢不詳。しかし、下級魔族のゾンビであるにもかかわらず上級魔族に匹敵するほどの月日を生きている。アンデットの面々にも一目

置かれるほどのポジション。結界の外の知識も豊富で、アンデットの中で恐らく唯一人間の言語を操ることが出来る。他のゾンビと違い、動きも俊敏。
とても穏やかな性格で、他種族にも礼儀正しく対応する。だが、タイキ至上主義のため、タイキの意に反する者やタイキに害成す者には容赦しない。
（タイキの中でのポジション・お父さん）

□　ホロウフレア（愛称：ホロ）　→　愛嬌ある火の玉……から、ふわもこ癒しキャラに！

アンデットの中でも、最も弱いとされる青白い火の玉の姿をした魔族。意志は弱く、ある程度の数が集まって互いを補わなければ『念話』ができない。デルフェールと共に、タイキをネクロマンサーとして出迎え、真っ先に主と認めた。
後日、タイキに『ホロ』という愛称をもらってから、タイキとの間に特別なパイプラインが繋がり、各個の意志が強化された。強化されてからは、タイキのリクエストで白く丸いフクロウのような姿をとるようになった。その場合、ホロがよくいる場所と言えば、タイキの腕の中かタイキの肩の上かタイキの頭の上。
（タイキの中でのポジション・ペット）

□　ゼフィストリー（愛称：ゼフィ）　→　淫魔と見まごう女性筆頭、蜘蛛の化身たる女王様

アンデットの結界の一部に住みついているビースト。上級魔族。クインスパイドという、蜘蛛の女王とでもいうような魔族である。本性を露わにしたときには、黒く巨大な蜘蛛の姿をしているが、タイ

キと接するときはもっぱら妖艶な女性の姿をとっている。
闘争本能の塊といわれるビーストであるわりに、本人は戦いよりも自身の美貌を磨くことに夢中。人間の世界にもちょくちょく人型で化けて紛れ込んだりすることが多く、一応フォリアル王国の言語は話せる。
タイキが大好き。最初はいかに彼から魔力を巻き上げるか、しか考えていなかったが、あっという間にタイキ信奉者に。よく背中側から抱きついて、頬ずりしたりしている。これのせいで、リジェラスやリッパー、ロスティスラフから『ショタコン』呼ばわりされている。……本人は「タイキだからイイ」らしい。
魔族社会での世渡りは下手な方……？　デルフェールやデーモンの面々とは普通に接するが、リッパー、ロスティスラフとはことあるごとに喧嘩をしている。
（タイキの中でのポジション・びっみょうな女親？）

□　リジェラス（愛称：リジェ）　→　老成した精神をもつ……はずのやんちゃ悪魔小僧

新しいネクロマンサー誕生について情報を集めるため、養い親のヴォーゴと共にやってきているデーモン。髪も肌も黒く、目は白目が無くすべて赤い。コウモリのような翼と尖った槍のような尾をもっている。
最初はヴォーゴと共に新しいネクロマンサー誕生を、表向きは祝福、本音はデーモン種族にとって益となるかを偵察するためにアンデットの結界を訪れていた。が、デルフェール以外の魔族にも心を開いてきたタイキに感化され、今では手ずから魔術の使い方を教えたり、人間のようにして遊び相手になってやったりとしている。指摘すると不機嫌になるが、これらの行いに対してまんざらでもなさそう。
やや他の種族を見下している感があるが、それでもまだ可愛い方な

ので他の魔族との関係は良好である。というか彼に適当な理由で喧嘩をふっかけようものなら、魔人が無言で登場してくるのでほとんどの者は手が出せない、というのが正解でもある。

（タイキの中でのポジション：兄貴的な友だち）

□　ヴォーゴ　↓　無口無表情な、山羊頭の厳格なる親父さま

デーモンを統べるディアボロの腹心の一人で、魔人。全身が焦げ茶色の体毛に覆われており、胴体と腕は人間、下半身と頭は山羊という、人間にとってはステレオタイプな悪魔像をしている。いつも死神の大鎌を携えているが、滅多なことでは使わない。

リジェラスの養い親でもあり、今回、ディアボロの命で新しいネクロマンサー誕生を偵察することになったとき、彼に散々連れて行けと騒がれて（最近暇すぎたから）、困り果てたという小話もあり。

アンデットとの交流は、タイキがやってくる以前からあり、デルフェールやリッパーとは顔なじみ。リッパーとは酒飲み仲間でもある。

大概はリッパーの愚痴や、戦闘狂の欲求を発散するのを手伝ったりしていたのだが、最近ではそれぞれ子供たちの話題が増えたらしい。

基本的に、人間以外の種族には寛容で、魔人の中では一番話が通じると言われている。だが無口なので、リジェラスがよく通訳に引っ張り出されたりもする。最近、タイキとしゃべっているところを目撃されてなんやかんや……。

（タイキの中でのポジション：近所の面倒見の良いオジサン）

□　リッパー　↓　感情表現が豊かすぎる、江戸っ子風の骸骨戦士

狂戦士（バーサーカー）・スカルという、戦いに戦って血を浴びすぎた、進化したスカルであり、上級魔族。他のスカルたちが、骸骨姿に剣や棍棒とい

った武器しか持っていないのに対して、タイキの『供給』で強化された鎧兜を装備しており、人間の傭兵なんかもものともしない実力を持つ。

骸骨顔なのに、どのような仕組みか骨自体を歪ませて笑顔を作ったりと、普段は表情豊かなおっさん。「〜でぇ」「〜だとぅ」など、（作者の考えつくエセな）江戸っ子口調が特徴。お酒が大好きなのだが、体は骨しかないので、鎧の上からしこたま浴びて匂いに酔うという乱暴な飲み方（？）をする。よく、晩酌相手にヴォーゴを付き合わせたりと、顔も広め。最近は、タイキが自分の孫みたいで可愛くてしょうがないと酒の席でヴォーゴに熱を込めて話しまくっているとか。

ただ、基本的にはアンデット以外の種族にはあまり友好的ではないタイプ。ゼフィストリーやロスティスラフには大概けんか腰で話しかけ、空気が最悪になることも多々ある。

（タイキの中でのポジション：親戚のおじさんか、おじいちゃん）

□　ロスティスラフ　↓　理性のタガが弱すぎる、自分（の容姿）至上主義なナルシー野郎

ヴァンパイア種族を統べる吸血貴族（ヴァンプ）。銀色の長髪に赤い瞳、そしてある意味ゼフィストリー以上に美しい顔立ちをした青年の姿をしている。黒い服装が多いが、本当はもっとバリエーションを多くしたいらしい。

魔族の中でも特に美形率が高いヴァンパイアの中で、今のところ成体では一、二を争う美しさであり（全体的に見れば幼体であるツェーザリに軍配があがる）、自身もそれを過剰すぎるほどまで認めている。自分で自分の容姿を褒める分には酔いしれる程度で済むのだが、第三者からうっかり「格好いい」「綺麗」などと言われてしまうと、理性が吹っ飛んで魔力の尽きるまで大暴走するほど喜んでし

まう。そのため、実力は高いのに……と他の魔族からは残念そうな目で見られ、配下のヴァンパイアたちに多大な迷惑をこうむっている。普段は理性がかっ飛ぶのを押さえるため、専用の自我強化装置という腕輪を複数つけている。

タイキと初めてあったときも暴走したが、タイキ自身の手によって沈静化され、新しいネクロマンサーに興味を抱き、その後もちょくちょく彼の友人として結界を訪れるようになった。基本、アンデットとは相性が悪くないはずなのだが、上記の問題点のせいでデルフェールにまで睨まれてしまっている。他の面々は、言わずもがな。特にゼフィストリーとリッパーとの相性は最悪である。

（タイキの中でのポジション：兄）

□　ツェーザリ　↓　主人の代わりに多忙で死にそうで叫びたい、そんな可愛らしい側近

突然変異種である、幼体のまま成体としての能力を手に入れた上級ヴァンパイア。ぶっちゃけ、その容姿はリーダーであるロスティスラフをもしのぐほどと影で言われいるが、本人はまったく自覚がない。というか、ヴァンパイアにしては珍しく、もともと自分の容姿に頓着しない性格。

ロスティスラフ対おしおき要員のリーダーであり、彼が何か問題を起こしたら真っ先に諫めるという、ある意味命がけの役割をまっとうする生真面目さをもっている。そのため、表面上はロスティスラフにうっとうしがられることが多いが、その実誰よりも彼に信頼されている。

他種族に対する礼儀正しさはデルフェールと並ぶほどで、彼以上に融通の利かない場面を見せることもしばしば。ロスティスラフがその特殊な性格ゆえ、魔族の中でも孤立しないのはひとえに彼の誠実な魔族らしくない態度のため。ただし、人間には例外的に冷酷。タ

イキが転生前に人間だったと聞いたときからは、なるべくタイキの前で人間をおとしめるような発言は控えているようだが……。
（タイキの中でのポジション：いろいろと手助けをしてくれる優しい友人）

□　その他の魔族たち！

ゾンビ　～　なんとか人間のようなシルエットをしているが、ほとんどの肉や骨は腐り落ち、デルフェールほど小綺麗なものはいない。腐敗臭の塊でもあるため、他種族にはあまり歓迎されない下級魔族。

マッドハンド　～　タイキには礼儀正しいが、基本的に陰湿ないたずら大好きという、山に迷い込んでしまった人間にとっては最悪とも言える下級魔族。基本的に、手首から肘の長さまで地面から伸びたりできるが、複数体合体することで何メートルもの長さになることが出来る。

ファントムアーマー　～　装着者の無念が宿った、自我を持つ鎧。大概の者は俊敏な動きで、鎧の大きさに反比例することがない。ある意味、アンデットの中では一番直接攻撃に長けているであろう下級魔族。

スカル　～　様々な理由で、恨み辛みをこの世に残したまま死んでいった人間の骨だけが動き出すようになった、ゾンビと並ぶアンデットの代名詞的な下級魔族。何せ骨だけなので、大した武具防具を装備することが出来ないため戦闘力は低いが、その再生力と集団行動力は随一。

スライム　～　半透明なゼリー状の体をしている下級魔族で、その

意識レベルは動物の本能程度。現時点ではホロよりも低い。食欲が旺盛で、人間を見かけるととりあえず体内に取り込んで溶かして食べてしまう。

バット　～　さまざまな地域に住む、ビーストのおおこうもり。普通のコウモリとは桁違いな鋭さをもつ牙と爪を持ち、吸血するよりは獲物の肉のほうを好む。より大きいものであれば、背中に一人くらいは誰かを乗せて移動することも可能。

ヴァンパイア　～　下級魔族と上級魔族の差が、一番曖昧な種族。人間社会のような『貴族制度』をとっている。姿形は人間によく似ていて、耳の形と鋭い牙を隠してしまえば、一般人にはまず見破られない。人間の町に入り込み、適当な獲物から吸血し力を蓄える。魔術の扱いもデーモンと並ぶほど。デーモンが攻撃的な魔術なのに対して、ヴァンパイアは幻術的な魔術が多い。

人物紹介　～　魔族編（後書き）

これで、本当に。

ほんっっっっっとうに更新停止ができます！！！！！

あっはっは、自分お馬鹿……ｏｒｚ

ここまで来たなら、第一部はさっさと終わらせておけばいいじゃないと悪魔の囁きが……こらリジェ。

そんなこんなで一応区切り。

それでは皆様、また会う日まで～（＾＾）ノシ

（16）　～　ホウカイノオト（前書き）

お久しぶりです！！！

さて、始まりました『王宮編』。最初からハードにシリアスってます。

『結界編』における第七話、第八話を越える勢いで。

しかし序盤は大体こんな感じ……ほ、ほのぼのもちゃんとしますからー！

（16）～ホウカイノオト

ザッ
土埃が舞い、白銀の甲冑や純白のローブに身を包んだ人間たちが、それぞれ厳しい表情を浮かべて、目の前に続く山道を睨む。
「――――突撃する」

※　※　※

本のストックが尽き、『供給』も昨日のうちにすませてしまったタイキは、ダイニングテーブルに突っ伏していた。
「デルー、俺どうしよう？　こういうのもなんだけど、能力探しは飽きてきちゃったし、魔術訓練もリジェのヤツこれ以上教えてくれないみたいだし……」
「まあまあ、のんびり構えていらっしゃればいいんですよ。そうですねー、では今度は私が教えられる範囲での、この世界の歴史なんてお話ししましょうか」
「歴史かあ、うん、デルの話なら眠くならなさそうだ。じゃあお願い！」
あっという間に目をきらめかせて、タイキはパタパタと足をテーブルの下でばたつかせた。その様子に微笑みを浮かべたデルフェールだったが、ふと上着の裾に違和感を感じて振り返る。

視線の先には、珍しくタイキの前だというのに火の玉形態のホロウフレアがあり、それはタイキの目を盗むようにしてデルフェールに近づいていた。くいくいと裾を引かれ、そっと手を伸ばしてみるといきなり念話を行使された。その内容に、表情には出さないまま焦る。

「……ふむ」

「デル？」

「すみませんタイキ、少し用事ができてしまいました。ホロたちとお話ししててください」

「うん、いいけど」

立ち上がり、そのまま真っ直ぐ玄関から出て行ってしまったデルフェールの背中を眺めつつ、タイキはフクロウ姿のホロを抱え込むと、首をかしげた。

……デルフェールはタイキの屋敷を出ると、いつもとほとんど変わらぬ態度のまま『供給』を行なう祭壇へと向かっていった。ホロウフレアの先導で辿り着いたその場所には、すでに見慣れた面々が、今までにないほど厳しい表情を浮かべて集まっている。

「……誰か、詳しいことを知っている方は？　この際上級、下級などといった等級は無視します」

「つっても、いきなり発言できるよーなヤツぁいねぇだろ。俺からちょいと言わせてもらうぜぃ」

ガチャン！　と騒々しい金属音を響かせながら、リッパーが淡々と報告を始める。

「表の世界で麓の方を見回ってたビーストどもと、連絡がとれなくなっちまってんだ。偵察に行ったゴーストどもも、突然念話が途切

れたりで、ここに戻って来たヤツぁいねぇ」
「私の眷属たちも多少散らせては見たけど……どうにも、山の至る所で浄化が行なわれた形跡があるわ」
「はん、これまた唐突な魔族狩りだな、くそっ」

リッパーとゼフィストリー、二人が口々に報告するのに対して、その内容に耳を澄ませていたリジェラスは爛々と両目を光らせ、吐き捨てる。
デルフェールはぎゅっと目をつむると、しばらく何かを考え込んでいたようだが、すぐに元に戻って下級魔族たちにも聞こえるように大声で指示を出す。

「ここにはまだ、私たちが手に入れたばかりの、お生まれになったばかりのネクロマンサーがいます。あの方は人間相手の戦闘どころか狩りもできません。力こそ歴代のネクロマンサーと比べれば圧倒的ですが……私たちのすべきことは、ただ一つ！　全力で、この永久墓地を、ネクロマンサーをお守りしましょう」

ぉおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！

集まった魔族たちが、全霊を込めた雄叫びを上げる。新しきネクロマンサーの恩恵を受け、彼らは今までにないほどの力を有していた。

恐れるな、恐れるな。
真に恐ろしきは、我らが主を失うこと。
それ以外の、何を恐れる？

……魔族たちが種族を越えて団結しようとしたとき、永遠の夜の世界を作り出している結界のどこかで、ガラスが砕けるような音が

響いた。

※　※　※

「……何の、音？」

デルフェールが出て行ってしまってから、ホロを頭の上にのせたりして遊んでいたタイキは、突然鼓膜を打った甲高い音に顔をしかめた。

と、頭の上でホロの小さな爪のついた足が、ぎゅっと力を込めたことに気づき、急いでそこから下ろす。

「ホロ、聞こえた？　今の音」

「ネクロマンサー、大丈夫ですよ。大したことではありません」

タイキに両脇から掴まれて抱えられている状態でありながら、ホロは穏やかな表情を浮かべてそう告げた。だが、タイキの中で不安はどんどん膨らんでいく。

「……デル」

※　※　※

漆黒の世界に、魔族の目にはまばゆすぎる純白がなだれ込んできた。

「永久墓地を制覇せよっ！　魔族どもを残らず狩れぇっ！！」

白銀の鎧を纏う騎士団の先頭に立つ青年が、およそ片手で持つには相応しくないであろう大剣を掲げて、魔族たちの気配が濃い場所を指し示す。その後ろで、他の騎士たちが「応！」と答えた。

「魔法部隊は陣形を組め、詠唱を開始せよ！」

「「「はっ」」」

後方で騎士たちに守られるように配置されていた魔法部隊の面々が、真剣な表情で短く返事をすると、事前に決めていた通りの手順に従って順々に詠唱を開始した。だが、人間の扱う魔法の源は、地上に溢れる神気である。だが、ここは結界……魔族の住まう世界に神気があろうはずもない。魔法は人間自身が持つ潜在能力でも代替は可能であるが、それでも神気を消費するのと異なり、発現までに大幅に時間を食ってしまう。

その間にも、永久墓地を突き進む騎士団達へ、襲撃に気づいた魔族達が異様なほどの連携を見せながら襲撃をしてきた。

「がああっ！？」

「くそ、ここはアンデットの巣窟だろう、なんでビースト共がっ」

悲鳴を上げて倒れ込む騎士たちのうち数名は、彼らの全身に絡みつく白い糸によって自由を奪われながら、大小様々な何百という魔に属す蜘蛛の軍勢にあっという間に食い尽くされてしまった。そして、蜘蛛の糸により騎士たちの機動力がある程度削られたところで、

今度は上空からいくつもの影が飛来する。

「っ、あれもビースト……バットの大群か！」

「団長！！　バットだけではありません、黒外套（マジシャン）もいます！」

「ふん、アンデットのくせに妙に知恵付いた化物か」

マジシャンは、アンデットに属する魔族の中で唯一魔術を行使できるとされる種族である。もちろん上級魔族に的を絞れば、魔術を使えなくもない者はいるが、マジシャンはその実力によって、ともすればデーモンやヴァンパイア並に厄介な上級魔術を使ってくる個体もいる。

魔法部隊の面々は、未だ詠唱を終えていない。小さく舌打ちをした団長、ヨアヒム＝バルテルスは、さらなる指示を出す。

「神官隊！　神気の道を開き、守護結界を展開せよ！」

今まで直接魔族達との戦闘は行なわず、戦闘終了後の土地の浄化などを担当していた部隊に、声がかけられた。隊員達は魔法部隊の者達とは違い、穏やかな表情で両手を組み、やがて同時にその手を頭上に掲げた。すると、彼らの手のひらから淡い光が漏れだし、それは彼らの頭上を守る光の盾となった。

この場にいる神官達は、皆経験を積み、その身を地上と結界内部とを繋ぐ『扉』にすらできる者達だった。神気を結界内でも扱うことの出来る彼らを見て、一人の騎士が呟く。

「魔法部隊のやつらも、あんなことができれば……っ」

他にも多くの騎士がそう思ったが、これはいかんせん、魔法使いと神官たちの神気を源とする『力』に対する意識の違いであるため、ある意味どうしようもない。

すなわち、魔法使いの扱う神気の力とは魔法という名の『技術』であり、ヒトの意識の元に体よく整えられ、歪められたものである。一方、神官の扱う神気の力とは『信仰』そのものであり、古来よりヒトが魔に対抗すべく神から授けられた力であるため、そちらの方が神気と馴染みやすいというのは当然というもの。

「ぶつくさ言ってる暇はねぇ、ほーら次が来たぞ！」
「スカルの群れぐらいどうって……ぎゃあっ！？」
「っく、ファントムアーマーを隠していたかっ！」

やがて戦い続ける騎士たちは、最初の威勢はどこへやら、今までにアンデットたちが見せたこともない連携と思った以上の能力でもって抵抗してくるのを見て、戦意を鈍らせ始めていた。それを察したヨアヒムは、自身を取り囲んでいたスカルをなぎ払った瞬間、叫ぶ。

「魔法部隊！！！」
「「「天上の劫火よ、悪しき者を滅せよ」」」

魔法部隊の組み上げた魔法陣が発動し、そこから明るい金色の炎が現れる。守護結界を構築していた神官たちも、それを解除すると自分たちが扱えるだけの神力をありったけ炎に注ぎ込んだ。
神聖な光をまとった炎は、騎士たちを守るようにして広がり、魔族たちを飲み込んでいく。耳に残るいやな絶叫が、連続して響き渡った。

「団長、あれは」

浄化の炎の陣が上手くいったことで一息ついたヨアヒムは、近くにいた部下がいぶかしげに指を向けるほうへ視線を投げかけ、表情

を厳しくさせる。
　彼らの視線、朽ちた墓場を少し越えたところにある丘の上にいたのは、おそらくゾンビ。だが、先ほどまで彼らがほふってきた者たちとは違う、下級魔族とは思えなさそうな雰囲気をまとって、腕組みをしながらこちらを見下ろしていた。

「ただのゾンビではないだろう。今のところ、上級魔族が一体もこちらに現れていないからな……」
「え！？　で、では私たちが今まで戦っていたのは、すべて下級……？」
「ああ、ゾンビにスカル、スライム、マッドハンド、マジシャン、ファントムアーマーにバット……どれもこれも上級とは言いがたい」
「ですが、我らの隊の被害は尋常ではありません、おそらく、騎士たちのうち五分の一が」
「……そうか」

　暗い表情で、ヨアヒムはつぶやく。と、そこへけたたましい少年の笑い声が、響いた。

「五分の一！？　おいおいそりゃないぜ、みーんな根性振り絞ったってのにまぁーだ五分の四も残ってんじゃんよ！」
「っ！？」

　声のしたほうを見上げれば、魔族の結界内の特徴ともいえる巨大な満月を背に、人型の影が空を飛んでいた。いや、その背にはこうもりのような翼がある。

「で、デーモンだとぉ！？」

　驚愕のあまり叫び声をあげた騎士と、その周りにいた十数の仲間

たちの首が、飛んだ。一拍おいて、彼らの体はゆっくりと地に倒れながら、噴水のように鮮血を撒き散らしていく。

「ルダードぉおおおおっっっ！！」

絶叫を上げるのは、彼の騎士を育てた壮年の騎士。そして、彼らは見る。笑いながら空を飛ぶデーモン以上に危険な存在が、先ほどまで浄化の炎で覆われていたはずの場所に屹然と立っている。

ぬらりと赤黒く光るは死神の鎌、人の二倍以上の大きさをした体躯の、山羊頭。

「ま、魔人、ヴォーゴ……」

誰かが、彼のものの名をつぶやいた。さしもの団長も、絶句する。なぜ、デーモンのリーダーであるディアボロの側近として何百年と恐れられている魔人が、このアンデットの地にいるのか。

あまりの大物の登場に、人間たちは完璧に翻弄されていた。そこへ横合いからさらに。

『ひゃーっはぁーっっっ！！！　オラオラァどーした人間よぉ、腰抜かしてっと死ぬぜぇえええ！！！』

明らかに先ほどまでのスカルとは違う、鎧兜を身につけファルシオンを振りかぶるスカルが現れた。ひょぉおおおっ、とスカルが発する音……リッパーの声は、人間にはわからない。

動揺する騎士たちを必要なだけ斬り抜けたリッパーは、あろうことか次の魔法の準備に入っていた魔法部隊のほうへ突っ込んでいった。数人の魔法使いたちが、ひっと悲鳴を上げる。神官たちも今は魔法部隊に力を貸しているため、守護結界を張ることはできない。

「「うぉおおおおお！！！」」
『ほぉ～、なかなか骨のある連中じゃぁねぇかっ』

そこへ、玉砕覚悟といった形相の騎士が二人、リッパーの行く手を阻もうと突進してきた。リッパーは彼らの攻撃をなんなくいなし、返す刀でそれぞれの鎧の隙間から串刺しにする。腹を半分裂かれて死体一歩手前になった騎士たちを放り投げると、次の騎士が飛び掛ってきた。同じように応戦しかけたところで、リッパーはその騎士から放たれる妙な気配に、一瞬気をそらされる。

「ぅぐぉあああああああああああっっっっ！！！」
『やべっ』

気づいたときには、騎士が振り下ろしたバトルアックスがリッパーのファルシオンを弾き飛ばし、鎧の胸当て部分を直撃した。もともと骨だけの体なので、意図も簡単にリッパーの体が吹っ飛ぶ。

『っちぃ、蜘蛛女！！』
『わかってるわよぉ』

ふしゅる、と音がして、そのまま地面にたたきつけられるはずだったリッパーの体を、白く太い糸が網となって優しく受け止めた。そこからストンと降りたリッパーは、内心顔をしかめる。胸骨が完璧にくだけているし、得物のファルシオンはどこかへいってしまった。

「次はクインスパイドか、一体どうなっている！？」

リッパーの後ろから現れた、巨大蜘蛛の姿をしているゼフィストリーを見て、女性騎士の幾人かが生理的嫌悪に顔をしかめる。

『あらあらぁ、自分が可愛くないからって、こっち見てひがんでんじゃないわよぉ』

いやそれぜってぇ違う、というツッコミを飲み込んで、リッパーは空を見る。彼の準備も終わったようだ。そこで魔法部隊の一人が、リッパーと同じように空を見上げて蒼白になる。

「だ、団長、デーモンが、ま、魔法陣を！！」

「なっ」

夜空を照らし出す、青白い巨大な魔法陣。ホロウフレアたちがつくりだしたそれを見て、リジェラスは満足げにうなずく。

「うっしそいじゃーやったりますか」

ちょうど陣の中心にいるホロウフレアの中へ手を突っ込み、一気に力を注ぎ込む。一瞬で赤黒い光に染まった魔法陣に、神官たちが悲鳴を上げた。

「消滅の魔術！　あれを受けたら、ひとたまりも――――……！！！」

魔人に首を刈られ、スカルに蹴散らされ、果てには消滅。なんだ、この永久墓地で、一体なにが起こったというのだ！

「……解放する。こうなれば、奥の手しかあるまい」

「団長、それは……！」

ヨアヒムを取り囲んでいた騎士や魔法部隊の面々が、非難の色を見せる。だが、それ以外の……ヨアヒムの真っ直ぐな目を見つめ返

す神官達は、穏やかな表情で、軽く腰を折った。

「我らフォリアル王国騎士団に、栄光あれ」

神官の一人がそうつぶやくなり、今まで魔法部隊と共にいた神官達が一斉に各所へ散る。浄化の炎がつきかけたところをまた近づいてきた魔族たちが、格好の獲物と神官達に爪を、牙を、突き立てていく。

「あ、あああ……」

騎士たちは動かない。動いてはならない。『神官を守ってはいけない』……。

「「「栄光あれ」」」

これ以上なく精神を高め、死という形を持って限りなく天上界に近づいた彼らは、残されゆく彼らに最高の祝福を贈る。

その祝福は、魔族にとっては神からの『呪詛』となる。

神官達の骸が光り輝き塵となると、リジェラスとホロウフレアが描いた必殺の魔法陣をもはじき飛ばす『神の陣』が、結界内部に現れた。

「っく、ホントーにせっぱ詰まってんなぁ、あいつ、ら!?」

唐突に結界内部へ流れ出た大量の神気。それは魔族達を次々と死に至らしめる猛毒。散り散りになっていくホロウフレアを視界の端に認めながら、リジェラスは地に落ちる。ふと、脳裏で養父の声が響いた。

『リジェラス』
『ヴォーゴ、ディアボロ様に報告だ。デーモンの本拠地はフォリアル国内にはないが、アンデット相手にこうも無茶する人間どもが現れたってな。ちくしょう、やべぇかも……』
『……ああ、死ぬな』

交信が途絶えたところで、なんとか最後の力で翼を開き、地面に激突することだけは回避する。だが、手のひらと膝が地についたところで、リジェラスは魔法部隊の面々に取り囲まれた。青白い魔法陣が浮かび上がり、彼の体をがんじがらめに拘束する。次に詠唱されるのは、浄化の唄。

「くそったれ……っ！！！」

ざっと周囲を見渡せば、この場においてもっとも人間達の恐怖の対象であった養父の姿はすでにない。リッパーやゼフィストリーも自分と同じように拘束されており、あとは下級魔族達ともどもとどめを刺されるのを待つばかり。

と。

「なんだ、なんだよ、これぇ……！」

幼い声に、その場にいた魔族達は皆、凍りつく。
場違いな声に、騎士団達は皆、眉をひそめる。

「ホロ、ホロ？　ねえ、みんなどこ行ったのさ。リジェ、リッパーさん、ゼフィ！！！」

ざくざくと丘を駆け上がってくる音。そこを上りきれば……。

そして、彼は姿を現わす。

黒をその身に宿し、黒い装束で全身を覆う、アンデットの主にして、友にして。

その姿を見た騎士の一人は、信じられないといった風に、しかしそれでもある一つの可能性を述べる。

「あれが、新たなネクロマンサー？」

――丘の上には、大きな両目を見開き、戦場（いくさば）の光景を見つめるタイキの姿が、あった。

（17）　～　捕らわれた、ネクロマンサー（前書き）

着々とイタイ描写が出てきます。
主人公がリンチにあいますイタイです。

（17）　～　捕らわれた、ネクロマンサー

タイキは、目の前の光景に何の言葉も発することができなかった。

（人間の、騎士だ。あれは、魔法使い？）

以前結界の外で会った狩人ハンスの次に、出会った人間。

彼らは、タイキの友人達を、家族とまで思えた彼らを殺そうとしていた。

（リジェ、すごく痛そう。リッパーさん、バラバラにされてる。ゼフィの足、何本も切られてる）

今まで『供給』の度、祭壇でたくさん話した下級魔族達も、地に倒れ伏したまま動かない。

タイキがちらと足下を見ると、上手く人の手の形を構成できていないマッドハンドが一体、嫌な水音を響かせながら近づいてきた。

途切れ途切れの声で、それは懇願する。

「ねく、ろ、まんさ、おにげ、くださ……」

「マッドハンドさ」

タイキが力を注いであげようと手を伸ばす。が、それよりも一歩早く、マッドハンドの形は完全に崩れた。あとには、ただの泥が残るのみ。ぱしゃり、と泥の中に手を突っ込んで、タイキは固まった。

どれほど固まって、いたのだろうか。

みんなが口々に叫んでいる。

「おいタイキ、逃げろっつってんだろ!?　立てってば、立てぇっ

！！！」

『タイキお願いよぉ！　まだデルフェールがいるわ、彼と一緒に！』

『ボーッとしてんじゃねぇぞリーダーぁあ！』

リジェラスが、ゼフィストリーが、リッパーが。

声は届く。確かにここは酷く危険だ。さあ、逃げなくちゃ。

それでも、タイキは泥をつかみかけたまま、座り込んだまま、動けない。

そんな彼の下へ、一人の騎士が近づいていった。ヨアヒムは、足下にうずくまったまま微動だにしない少年を見下ろし、困惑の色を浮かべた。

（まさか、こんな子どもが、本当に？）

思いつつ、アンデットやそれ以外の魔族達の騒ぎ様からいって、まず魔族の中でも重要な存在であることは確かだと感じ、ヨアヒムは手に持った剣を振り上げる。

と、何かの気配を感じ取ったのか、タイキがゆっくりと顔を上げた。ヨアヒムのグレーブルーの瞳と、彼の漆黒の瞳が、互いの色を映す。そして……漆黒の奥に、感情の炎が揺れた。

（まずいっ）

本能で危険を察したヨアヒムは、すべての躊躇いを捨てて剣を素早く振り下ろす。魔族達の絶叫が、響き渡る。

ぞむっ

ヨアヒムが感じた手応えは、ほとんど、ないと言ってよかった。
それも当然……彼は、『腐りかけの体』に剣を突き立てたのだから。

「……で、る……？」
「タイキ、タイキ、大丈夫ですか」

いつも、見ているだけで温かい思いが胸の内に生まれた、そんな彼の、デルフェールの変わらぬ笑顔が、少し遠くに見えた。けれど、彼の体は目の前にある。瞬き一つして、タイキは彼に後ろへ突き飛ばされたのだと気づいた。
ヨアヒムとタイキの間にあるデルフェールの体は、左肩から右脇腹にかけて綺麗に切断されていた。どさりと音を立てて、下半身が倒れる。先に地に落ちていた上半身は、笑顔を浮かべた顔をタイキに向けて、軽く息を吐いた。

「ああ、よかった。タイキ……」

タイキに目立った傷がなかったこと、ただそれだけを安堵して、デルフェールは目をつむる。
彼の体が、塵となった。
それを目の当たりにしたタイキは、
吼えた。

※　※　※

黒い嵐が、結界の中をこれでもかと暴れ回る。
うっすら黒く染まるその風に触れた者達は、例外なく青い顔をしてバタバタと倒れていった。ヨアヒムはその光景を見て、まるで呪いのようだと戦慄する。
目の前には、あの黒い子ども。
頭を抱えて両手で耳を塞ぎ、ガクガクと体を揺らしながら絶叫し続けるその姿は、まさに子どもの癇癪としか言えない。だが、彼の絶叫に合わせて、彼の足下から黒い風が吹き上がる。ヨアヒムが今だ倒れずにいられるのは、ただタイキに近すぎるせいで風が彼のほうに向かってこないからであった。

「っ団、長」
「おいっ、大丈夫か！？」

背後から聞こえた声に、ヨアヒムはぎょっとしながら振り返る。頭から血を流し、顔面蒼白な副団長が、自身の剣を杖代わりにしてここまでやってきていた。

「この風……抵抗しようと思えば、抵抗できるみたい、ですな。まあ……派手に動くことは、できませんが」

副団長の視線が、叫ぶタイキに向けられる。その視線はただ、滅ぼすべき魔族に向けられる冷淡さしか含んでいなかった。

「団長、早くそいつにとどめを。そうすれば、我らの目的は、果たされます」
「……ああ」

副団長の言葉に、ヨアヒムは頷く。そして、今度こそ誰も阻む者

がいなくなったタイキの無防備な首に向けて、剣を振り下ろした。
が。
キィン
「……？」
あと指一本分、というところで、刃がそれ以上進まない。別の方向から斬りつけても、なぜかヨアヒムの剣はタイキに届くことはなかった。
「おい、これは一体……」
「だん、ちょう。どうされました……っ」
「ちっ、魔法部隊!?　まだ立てる者はいるか!?　封印の陣を組めっ!」
嵐の中、ヨアヒムの声を聞いた魔法使いたちが、ふらふらと立ち上がる。頼りない足取りで彼の下へと向かい、タイキに向けて手を伸ばす。その内、一人だけ装飾されたローブを纏う壮年の魔法使いが、鈍色の枷を取り出した。枷にはびっしりと封印の呪が刻まれている。
『「封印よ」』
最後の力を振り絞り、魔法使い達は呪を紡ぐ。それに合わせて、手かせのルーンが明滅した。
詠唱が完了すると、枷は一度光の粒へと変換され、するりとタイキの全身を包み込んだ。光が弾けると、黒い風も消え、枷と鎖で全身を拘束され気絶したタイキが、その場に転がっていた。

「団長、一体、どうされますか」

問われて、ヨアヒムは顔をしかめる。品自体は一級品とはいえ、封印の枷の使用手順がこうも簡略化されてしまっては、およそ足止めが精一杯。このまま結界内部に放置してしまえば、またすぐにこれは……ネクロマンサーは活動を開始するだろう。

「さらに封印を重ねた上、これを連れて永久墓地を脱する。ただの剣では、これに傷を付けることはできないようだからな。王家に伝わる聖具の力が必要になるかもしれん」

「お、王都へ魔族を連れていくのですか!?　しかも、リーダーですよ!?」

「分かっている!!!　だがこの場に置いていくことも、この場でさらに封印を強化することもできまい!!!」

ヨアヒムの言葉に、生き残った者達は口をつぐむ。そして、ゆっくりと頷いた。

「さあ、まだやらねばならないことがある。魔族共を薙ぎ払え」

神気にあてられながらも、主を救おうと殺気を放ちながら騎士たちに迫るアンデット。

……最後の戦いは、騎士団の逃走という『勝利』に終わった。

ネクロマンサーは、結界の外へ、人間の地へと連れ出されていった。

※　※　※

ガタリと床が大きく揺れて、弾みで側頭部を打ち付けたことでタイキはぼんやりと目を覚ました。何度か瞬きを繰り返すが、周囲は真っ暗で何も見えない。半分顔を床に押しつける形になっているが、眼鏡をどこかに落としたせいか違和感はない。

と、ばさりと布をめくる音がして、タイキのいる空間に赤い光が差し込んできた。思わず目を細めると、光の差し込む隙間から入ってきた人影が小さく口笛を吹いた。

「やべぇな、おい、起きたんじゃねーのアレ」

「本当か。……報告にいってくる」

人影は何やらごそごそとやりとりをしていたが、片方の声の主が去っていくと、もう一方は奥の方まで入ってきた。彼はタイキの目の前で止まると、微動だにしないタイキの額を遠慮無く蹴りつけた。

「ぎゃっ」

「んだよ……攻撃効かねーとかだんちょー言ってたくせに、効いてんじゃん」

彼は酔っているのか、時たま呂律が回らなくなっていた。ひひひ、と下品な声で笑いながら、タイキを蹴りつけ、罵倒する。

「チクショーチクショーてめぇらのせいでてめぇらのせいでッッッ!!!　両手足の指の数じゃあとても足りなかったダチが今は何人残ってるよ？　ああ？　クソッタレ!!!」

「げふっ、がっ！」

顔だけではなく、肩、胸、腹、腕など、手当たり次第に蹴りつけ

られ、元いた世界でもこちらの世界でも初めて味わわされた暴力の嵐に、タイキは泣いて吐いて叫ぶことしかできなかった。未だに拘束され続けているため、まともに受け身をとることすら許されない。

と、なにやら薄暗闇の向こうが騒がしくなった。タイキを蹴り続ける人影が入り込んだ隙間から、さらに数人の人影がドタドタと入り込んで、暴走する彼を押さえつける。

「ジェル、何やってんだ馬鹿！　てめぇも死にたいのかよ、ああ！？」

「拘束具ぶっ壊れて、俺達までまとめて殺されたらどうなると思ってんだよぉっ！」

「うっ、ぐ……はな、はなせよぉ、こい、コイツぶっ殺せば、敵討ちに……」

「団長が手ぇ出すなっつってた命令も忘れたかッ！！！」

大柄な男が、喚く人影の頭部に肘鉄を加える。すさまじい音がして、人影はそのまま動かなくなった。彼らは人影を抱え上げると、極力転がっているタイキの方を見ないようにして、暗がりから出て行ってしまった。

（い……だ、い……）

ぜひゅ、と嫌な音が口から漏れた。口から出ているのは唾液なのか血液なのか、いまいち判別がつかない。が、鉄の味が混ざってはいるので、どこかしら出血してはいるのだろう。願わくは、肋骨に支障がないことをとタイキは願う。

他に重傷そうな場所は、蹴りつけざま何度も踏みつけられた右手だった。何度か骨が鳴っており、少なくとも人差し指と中指は確実に折れているだろう。

（でる……ほろ、ぜふぃ、りじぇ……デル）

何度も、何度も彼らの名前を頭の中で繰り返す。全身が熱を持ち、意識が霞みかけたその時だった。

ばさり

「っ」

誰かがまた、この暗がりに入ってきたようだった。思わず身を縮こまらせて、瞬間体に走った激痛にうめき声を上げる。入ってきた人物は静かにタイキのそばへ近づいてきて、彼の頭のすぐ横に膝をついたようだった。

（……？）

何故何もしないのだろう、とぼんやりする頭で思っていると、首の辺りでガキンッと金属同士がぶつかるような、耳障りな音が聞こえてきた。出来る限り顔をしかめて沈黙を保っていると、その人物が口を開いた。

「……通常攻撃は通じるようだけど、即死級の攻撃は、解除……？いえ、即死級か刃かは、まだ分からないか。まさか、聖者の加護が魔族に為されているわけ、ないし……」

（女の人？）

明らかに他の人間よりも高く、柔らかさを含んだ声色に、タイキは目を見開く。そして、人間に対して最大の脅威であるはずの自分のそばでこうも無防備な彼女のことが気になって、タイキはなんとなく身じろいだ。体勢を変えて、彼女の顔を見上げる。すでに暗闇には目が慣れていたし、魔族の体質も相まって、彼女の顔立ちや服

装ははっきりと確認できた。
ゆるくウェーブのかかったオレンジ色のショートヘア、ぱっちりとした目は澄んだ茶色である。着ているものは魔族の結界内で一番人数の多かった騎士たちの鎧とほとんど同じデザインで、女性専用なのか、若干フォルムが柔らかくなっているのが特徴的だった。
タイキに見上げられていることに気づいた女性騎士は、思考の海から一気に浮上し、はっとした表情で彼を見返す。数秒、両者ともその体勢を維持していたが、やがて女性騎士の方が耐えきれずに立ち上がっていってしまった。

「ぅう……」

なるべく右手を刺激しないようにして、最初の体勢に戻ったタイキは、最後に見た女性の表情に少なくない疑問を抱いた。

（どうしてあんなに、辛そうだったんだろ……俺、魔族なんだろ？殺さなくちゃ、いけないんだろ）

ぐるぐると疑問が脳内で渦巻くうちに、タイキは気を失うようにして眠りについた。

（17）～捕らわれた、ネクロマンサー（後書き）

まあ、少し強引すぎる気が……（汗

『王宮編』は、基本ダークサイドです。序盤における人間と魔族の接触なので、雰囲気最悪です。

ただ、次の話でほんの僅かに浮上するかも？

（18）　～　王都への道のりにて

タイキにとって初めての『旅』は、全身を鎖や枷で拘束されたまま檻の中に転がされ、馬に引かれていくという最低最悪の形で実現していた。

最初に意識が戻ってから、同僚に「ジェル」と呼ばれていた騎士以外にも、隙あらばと無抵抗なタイキに暴力を振るっていく生き残りの騎士たちは着実に増えていった。中には、その命を自ら投げ出す形になった神官の友人らしい魔法使いまでが、団長や上級騎士たちの目を逃れてタイキの元へ訪れた。

飲まず食わずで早四日。しかも日に三回はそれぞれ別の人間によってリンチを受けるタイキの体は、しかしそれでも生きていた。最早泣き叫ぶ体力もないのだが、魔族に転生しその性質を受け継いだためか、普通の人間よりは少しばかり傷の治りが早いのだ。もっとも、傷が治ったところですぐにリンチを受けて骨を折るなど、ある意味無限の責め苦を負わされているような、残酷な状況ではあったが。

そしてその四日目の夜。ネクロマンサーの状態を確かめると突然言い出した団長の命令で、タイキを閉じこめている檻にかけられていた分厚い防護布が取り払われた。

「……おい、どういうことだ。明らかに衰弱しているが」

「は、はあ……どうやら、下級騎士たちが、その、」

しどろもどろに報告を続ける第一隊長以下、上級騎士の中でも下級騎士から昇進したばかりの面々を見て、副団長が深いため息をつきつつ簡潔にまとめる。そして頭を下げた。

「申し訳ありません、こちらの監督不行届が原因かと。下級騎士た

ちで、結界において同僚を失った者を筆頭に、拘束中のネクロマンサーで憂さ晴らしをするという行動がちらほら見られまして……見張りを立てたり、私自身が取り締まるなど対策は行なっていたのですが……当の見張りまでそれに参加するようになり」
「結構、状況は分かった。……が、妙だな」
「妙、とは？」

ヨアヒムが檻の中でぐったりとしたまま、身動き一つしないタイキを睨みながらつぶやく。それを副団長が耳聡く拾い上げ、問い直した。

「結界から出たためか……おい、この際だ、罰することはしないと誓おう。これに攻撃を加えたときの状況を知っている者は前へ出ろ」

罰しない、という台詞と、ヨアヒム自身の落ち着いた声色に誘われてか、ばつの悪そうな表情を浮かべた騎士が数名名乗り挙げてきた。

「す、すいません、近くに身動きできない魔族がいるなんて……その……」
「言い訳はいい。私が欲しているのは情報だ」
「は、殴る蹴るといった行為ならば、あれにダメージを与えられるようなのですが、刀剣や魔法の類になると、薄い結界のようなもので阻まれてしまうんです」
「だけど、しばらくすると殴ったり蹴ったりもできなくなることがたまにありました」
「え、そうなのか？」

騎士たちの間でも、ああだったこうだったと情報が錯綜する。大まかなことを掴んだヨアヒムは、口々に言い合う騎士たち（上級騎

士も一部混ざっていた！）の数に眉根を寄せる。

「確かに、多いな……」

「……予想より遙かに、申し訳ありません」

「いや、いい。私も罰さないと示してしまったからな」

小さくヨアヒムが溜息をつく。と突然騎士の一人が、檻の方を見て悲鳴を上げた。

「だ、だ、団長！！！」

「っ！？」

そのせっぱ詰まった様子に、慌ててヨアヒムと副団長が振り返ってみれば、騒ぎで目を覚ましたのか、焦点の合っていない目で宙を見つめるタイキが上体を起こしていた。よくよく見てみると、拘束具が一部消え去っている。

「魔法部隊を呼べ！！！　大至急だ！！！」

ネクロマンサーが活動を開始したと判断したヨアヒムは、近くにいた騎士たちに厳戒態勢をとらせた。先ほどの通達で檻のそばにまで騎士たちを集めてしまったため、人間の壁ができあがり、魔法部隊の面々はその向こう側に取り残されてしまっているのだ。

周囲がどたばたと騒動になっている間、騎士たちの間から何となくタイキに目をやっていた、あの女性騎士は、彼の口が僅かに震えていることに気がついた。なんらかの術を発動させようとしているのか、と警戒した彼女は、上官に報告しようとするもその上官が騒ぎに紛れて見つからない。仕方なしに、単身こっそりと檻のそばへと近づき、耳をそばだてた。

（もし、聞くだけで効果のある術だったら……その時は、その時ね）

背筋を冷たい感覚がはい上がる。

だが、檻のそばで彼女が耳にしたのは、なんの術の詠唱でもない……名前のようだった。

「でる……ほろ……ぜふぃ……りじぇ……りっぱーさん、……でる」

かすれた声で、そればかり繰り返している。女性騎士は困惑した顔で、改めてタイキを見た。

（こうしてみると、本当にただの子どもにしか見えないけれど……）

と、彼女が眺めている間に、また拘束具の一つが砕けて空中に溶け消えた。だから物音がほとんどしなかったのか、と納得した瞬間、バトルアックスを抱えて檻に突進してくる一人の騎士の姿が見えた。彼女が反射的に飛び退いたところで、彼は檻の隙間からタイキめがけて斧を振るう。

「ジャスタスッ！！」

ヨアヒムの怒声と、ジャスタスという騎士の振るった斧がタイキに届かないまま床板に穴を開けるのは、ほぼ同時だった。

「団長、もういいでしょうよ。これだけ弱ってりゃ、いくらでも殺す方法はあります。ここは魔族の住処の結界じゃあない、地上ですよ。ただ最上級魔族だから、ちいっとばかし死ににくいだけでしょう」

ボサボサの髪と髭に埋もれかけた、いっそ山賊といった方がしっ

くりくるような彼の顔には、時折揺れ動く漆黒の刺青が見えた。魔族に呪われた人間であることを示すその刺青を片手で撫でて、ぎり、と爪を立てる。

「我慢ならないんですよこんな化物とおんなじとこの空気吸ってるなんてなぁっ！！！」

「魔法部隊の人間が揃うまで待て、余計な刺激をするなっ！！！」

ジャスタスが再度斧を振り上げる。ヨアヒムは舌打ちをして、自身の剣を抜き払い彼に迫った。

だが、彼らの行動よりも、ずっと早く。

かたん

「「「……っ！？」」」

ヨアヒム、ジャスタス、女性騎士はそろって息を呑んだ。

斧を振り上げた体勢で静止しているジャスタスの目の前に、ふらりとタイキが近づいたのだ。そして、最後の拘束具である手枷が砕けたところで、タイキはじろっとジャスタスの顔を睨みつける。

「……邪魔」

満身創痍のタイキの目には、ところどころ赤黒いものが混じっている灰色の煙が、ジャスタスを取り巻いているように見えていた。その煙は時折ケタケタと笑いながら、ジャスタスの体に触手めいた体の一部を突き刺している。見ているだけでも醜悪なその光景だが、なによりもタイキが感じたのは。

（なにこれクサイ）

だから、追い払った。これ以上自分にストレスのかかるようなものは、徹底的に排除しておきたかったからだ。

睨みつけられ、あまつさえ邪魔と言われたジャスタスは一瞬で顔を怒りに染め上げるが、一拍置いて魂も何もかも奪われたかのように放心した表情を浮かべた。

「あ、え、おお？」

「……どうした、ジャスタス」

彼の背後から剣を突きつけているヨアヒムは、唐突に彼の放つ殺気が霧散したことに、内心首をかしげた。問いかけにも、反応がない。不審に思って肩に手を伸ばしかけた、その時。

「きゃ」

女性騎士が悲鳴を上げる。ジャスタスの体から、灰色の影がぶわりと飛び出してきたのだ。ヨアヒムは影に触れる寸前の所で後ろに飛び退り、警戒する。他の騎士たちも、行動をし始めたネクロマンサー以外に現れた新たな未知に恐怖しながら、それぞれの得物を構える。

と、飛び出した影は苦しげに身をよじると、シュアアア……と空気の抜けるような音を立てて消え去ってしまった。煙が消えると同時に、それを見上げていたジャスタスもその場で尻餅をつく。完全に毒気を抜かれた様子の彼を心配して近づいた女性騎士は、その顔をのぞき込んで驚きの表情を浮かべた。

「ジャスタスさん、刺青が……！」

「何？」

彼女の言葉に、ヨアヒムが剣を抜いたままジャスタスのそばへ近づく。同じように顔をのぞき込んで、絶句した。つい少し前まで存在していた、人間にとって忌まわしいものでしかないあの刺青が、きれいさっぱりなくなっていた。

「どういう、ことだ？」

ヨアヒムはジャスタスを回収するよう騎士たちに命令を下しながら、檻の中を見やる。

何か行動を起こしかけていたネクロマンサーは、どこか満足げな表情を浮かべて、その場でくるりと丸くなって穏やかな寝息を立てていた。

※　※　※

その日の夜。魔法部隊の面々によって新たな枷を施されたタイキは、しかしずっと快適な夜を過ごしていた。昼間のあの出来事のあとから、酒に酔った勢いでこの檻に進入してくる騎士がいなくなったのだ。

それでも今まで受けた傷が痛むのだが、これはまあおいおい治るだろうとこの四日間の間で学んでしまっている。

（なんか、お腹空いたとも感じなくなってきた……）

ひたすらボーッとしながら檻の中で横になっていると、きい、と音を立てて檻の戸が開かれる気配がした。条件反射的に、タイキは

肩を強張らせる。

（また、なの？）

「……どうして」

しかし、聞こえてきたのは罵声ではなく、純粋な疑問の声。

恐る恐る見上げてみれば、ずいぶん前にここを訪れた、あの女性騎士の顔があった。

「どうして、彼を助けたの」

「……助けた？　誰を」

疑問の意味が分からず、タイキは女性騎士に問い返す。彼女は、まさか返答があるとは思っても見なかったようで、目を大きく見開き、逡巡する様子を見せたが、やがてあの時と同じようにタイキの頭のそばに膝をつく。

「昼間、あなたを攻撃した騎士です。彼の呪（じゅ）を解いたのは、あなたでしょう」

「……ジュ、って何？」

ああもう、と言って、女性騎士は頭を押さえた。

「あなたたち魔族が、人間に施す呪いでしょう！」

「あー、魔族の一部だったんだ、あれ。どおりで気色悪いと思った……」

「きしょ……！？」

女性騎士は、タイキの台詞に思わず言葉を無くす。あまつさえ自分の同類に、気色悪いなどと言うこれは。まるで人間の子どものよ

うな反応を返すこれは。
本当に、魔族なのだろうか？

「……変なの」
「あ、堅苦しーの、無くなった」

素になってつぶやけば、タイキが耳聡くそれを拾い上げて、にぱ、と笑みをこぼした。

「……つくづく、魔族らしくないわね。本当にネクロマンサーなの？」
「うん、みんなにはそう言われてた。あんまり実感なかったけど」

答えて、タイキは目をつむる。

「さっきの、答えになるかわからないけど……あの男の人が来たとき、なんかすごくクサかったんだ。で、半分寝ぼけてたし、邪魔くさいなーって思ったから、出てけって言った。それだけだよ」
「……はあ」

女性騎士は、もうそれしか返せなかった。
それからしばらく、互いに一言も発さない沈黙の時が流れたが、そろそろ見張りの交代があることを思い出した女性騎士は、ゆっくりと立ち上がる。

「行っちゃうの？」

と、足下で転がったままのタイキが、寂しげに尋ねてきた。

「仕事があるのよ、私にも」

「ふーん、じゃ、頑張ってね」

呑気すぎるタイキの言葉に、女性騎士はスッ転びかけた。

「……っ、まったく、あなた本当に魔族か人間か、はっきりしなさいよね」

ぶつぶつと愚痴のようにこぼした彼女の台詞に、目をつむりながらタイキが律儀に返す。

「人間だったよ」

「……え？」

「俺は人間だった。けど、気づいたら転生とかしてて、ネクロマンサーなんかになってた。……今は魔族なんだろうけど、俺は昔、人間だったよ」

タイキはそっと目を開ける。振り返った彼女の顔を見て、ちょっと困ったように眉根を寄せる。

「お姉さん、変な顔」

「……デイジー、よ。私の名前」

今度は、タイキがきょとんとする番だった。未だに複雑そうな表情を浮かべている女性騎士、デイジーは、小さく溜息をついてそのまま檻から出て行く。

ぴったりと布を掛け直され、ほとんど真っ暗になった檻の中、タイキは二、三度彼女の名前をつぶやくと、一人笑って目を閉じた。

（18）　～　王都への道のりにて（後書き）

ほんの僅かに浮上。お姉さんの名前、ようやっと出せました。
ただ、ちょっと無理があったなあ……。ジャスタスさんが初お目見えで、地の文でばっちり紹介されちゃってるのに、デイジーさんこの会話のためだけに、今まで女性騎士で無理矢理通してたんだもの。違和感があれば、前の話から直します。ではでは。

（19）　～　清き王宮…真実は（前書き）

今回は、あんまりタイトルがうまくないです；
なんというか、人間サイドから見た魔族に対する思いというか、そういうのが伝わればなあ……みたいな。
まあ、ファンタジーでは王道ともいえる反応ですけれどね。

（19）　～　清き王宮…真実は

ガラァァァン……　ガラァアアアアン……

「……鐘の、音？」

一筋の光すら差し込まない檻の中で、タイキはゆっくりとその身を起こした。道中、結局食べる物も飲む物も一切与えられなかったため、体は軽く感じるのに力がうまく入れられない。それでも、タイキはなんとか座る体勢をとって、耳を澄ませた。

「ひょっとして、着いた、のかな」

遠くから響く、鐘の音。ゆっくりと何度も繰り返されるその音は、しかしタイキの心に不安ばかりを植え付けていく。

と、移動が終わった。一度大きく揺れて止まった檻の周りを、ざわざわと騎士たちの声が取り囲む。やがて、檻にかけられていた布の一部をめくって、デイジーがランプを片手に中へと入ってきた。

「あ、デイジーさん」

「……すっかり痩せたわね」

「あはは、なんにも食べてないから」

もうお腹空いたって段階越えちゃった、と笑いながらタイキが答えると、デイジーは小さく息を吐き、目を伏せた。

「今は、日が昇って幾らか経った頃よ。正午には王都に入るわ。騎士の中にはあなたの姿を晒していけという者も少数ながらいるけれ

ど、多分許可されないわね……ただでさえ、王都市民の魔族嫌悪の度合いは、他の町と比べものにならないのだから」

「……ねえ、なんでわざわざ俺を、そんな王都なんて重要なところにまで連れてこようなんて思ったの？　自分で言うのもなんだけど、あそこで殺されても、おかしくなかったって思うんだけど」

殺される、と自分の口から出た言葉に思わず肩を震わせるタイキを見ながら、デイジーは極力感情を排した声色で答えた。

「殺せなかったからよ。まだ正確に判断することはできないけれど、あなたにはどうやら最上級の結界か何かが施されているようだから……王家に伝わる秘具をお借りしようと」

「……えーっと、あの、今まで俺からいろいろ話しかけたりしたけどさ、デイジーさん俺にちょっとしゃべりすぎじゃない？」

ぽけっとした顔で指摘するタイキに、デイジーは無表情で硬直し、次いで勢いよく両頬を叩いた。乾いた高い音が三度ほど響きわたる。

「ちょ、ちょっとちょっとちょっと！！！」

「口が滑ったわ」

「……せめて、一回でいいんじゃないかな」

引きつった笑みを浮かべたタイキは、これ以上自分と話して彼女が完全に墓穴を掘る前に、「じゃーお仕事に戻った戻った」と言って檻から追い出した。デイジーは困惑した表情を最後に見せたが、わりかし素直に檻を出ていった。

「にしても、王都かー……。俺、ホント生きてられるかな……」

一つ、タイキは身震いして、深い深いため息をついた。

※　※　※

（まったく、もう……あんなに口が軽くなるなんて、騎士失格だわ……）

それも、相手に言われて気づくなんて、と肩を落としながら檻から出てきたデイジーは深いため息をつく。

何度話してみても、同じことを思う。同じ結論に達する。……彼が、今まで見てきた魔族のような『邪悪』にはどうしても見えない、と。思わず口を滑らせてしまうくらい、どこにでもいるような、普通の少年にしか思えないのだ。

と、しばらく檻のそばでぼうっと突っ立っているデイジーのそばに、険しい表情を浮かべたヨアヒムが近づいてきた。遅れてそれに気づいたデイジーは、さっと顔を青ざめさせて上官に対する礼の姿勢をとる。

「だ、団長、いかがされましたか」

「いかがされました、というのは、むしろお前にかけたい言葉だな。……騎士デイジー、最近ずいぶんと檻の中にいる時間が増えてきている。同胞を疑うなど自分でも虫酸が走るのだが……よもや、妙な術をかけられたりなどしているのではないだろうな」

厳しい団長の言葉に、デイジーは思わずうつむく。

「……申し訳ありません。しかし、私にはあれが、その、我らを苦

しめ同胞を幾万も屠ってきた魔族の長には、とても見えなくて……」
「……まあ、そうだろうな。ジャスタスの一件から、私もたまに観察をしに来ることはあるのだが、町の子どもと大差なく思える」
ヨアヒムの意外な言葉に、デイジーは目を見開いて顔を上げる。だが、ヨアヒムは相変わらずの表情を浮かべたまま、軽く剣の柄を揺らした。
「しかし、結界内部であれが魔族どもに守られていたというのもまた事実。あの態度が、自身の姿を有効に使うための演技ではないと言い切れる保証もどこにもない。気を抜くな！」
「は、はっ」
そこまで言って、その場を離れていくヨアヒムの背を見送りながら、デイジーはそっと胸に手を当てる。檻の中へ入っていって、出迎えてくれたタイキの表情。仕事があるからと言って出て行くときに、「頑張ってね」と送り出してくれるちいさな声。
それらすべてがいちいち、もう何年も前に会うことが叶わなくなった友人を思い出させて。
「……魔族だからって、すべてが邪悪なんて思わないでね、か……」
そっと右の耳たぶに触れると、小粒の赤い石がついたピアスが揺れた。
※　※　※

第一の城門が開け放たれ、ファンファーレとともに騎士団が行進していく。

大通りの端に並ぶ住民たちは、精悍な顔つきで、ただひたすらに前を……往生を見据えながら歩いていく騎士たちを見て、歓声を上げた。

そして、とあるものが王都内部に現れた瞬間、住民たちの歓声は一転、怨嗟の叫びとなる。

「魔族だぁっ！！」
「あいつが、私たちの家族を……っ」
「ぶっ殺せぇ！！」

わあわあと、厚い布のかけられた檻に向けて発される罵詈雑言。

「っ、団長、このままでは我々にも危険が及ぶ可能性が……！　近衛の者たちは、一体どうしたのですか！？」
「城門の方で、準備は整ったとだけだったからな……ちっ、連絡が滞って……」

と、そこで団長はふと目を細め、更新停止の合図を出す。笛の音が鳴り響くと、騎士たちはとまどい顔のまま、直立不動の体勢をとった。

行進を止めた騎士団の前には、金糸銀糸のまぶしい正装姿をしている王宮近衛兵たちが無表情で整列していた。その中から、近衛隊長とおぼしき人物が一歩前へ歩み出て、ゆっくりと王家の家紋が印された書簡を掲げた。

「正妃、シャーナリア＝エル＝ラ＝フォリアル様より、騎士団およ

び魔族の即時王都退去を命ずる！」
「なっ……！」

近衛隊長の言葉に、騎士団たちはにわかに気色ばむ。ヨアヒムは強く両手を握りしめながら、なるべく静かな声で問いかけた。

「すでに、便りは出してあったはずですが。最上級魔族の息の根を止めるため、王家に伝わりし聖具の力をお借りしたいと……」
「王都に魔族を、しかも種族を統括する長を招き入れるなど、どのような理由であっても、あり得てはならないこと。即刻、王都を出て、魔族の処理をせよ」
「われわれの力ではあれ以上、どうすることもできなかったのです。王家か、神殿の最高司祭様のお力をお借りせねば！」
「これ以上王宮に魔族を近づけるようなことがあってはならない！」

互いに一歩も譲らぬ押し問答。ヨアヒムと近衛団長がにらみ合う中、二人の応酬を耳にしていた市民達までもが、それぞれどちらかについて仲間割れをし始めた。

「王様あ、王妃様あ！　魔族なんて、ころっとやっちまってくださいよお！！！」
「ふざっけんなっ！　魔族ごときで王家の方々のお手を煩わせようってのかぁ！？」
「頼むから、さっさとやってくれ！！」

「……団長、このままでは暴動が……！」
「ちぃ、あんの頭でっかちが……！　王妃の命令の前に、陛下のお言葉を教えろというのにっ」

ここまでの道のりで、最上級魔族とともに居続け精神をすり減ら

していた年若い騎士達も、血走った目で周囲を見てうなり声を上げる始末。このままでは、本当に手に負えない事態に発展してしまう。もしその中で、ネクロマンサーの封印が解けてしまえば……どうなるか。

短いため息を一つ、ついたところで、ヨアヒムはもう一度近衛隊長に向けて物申そうと息を吸い込んだ、そのとき。

「静まれぃっ！！！」

大喝。

その、誰しもが聞いたことのある声によって、市民や騎士団、近衛兵達はそろって動きを止めた。

声のした方を振り返れば、さざ波のように人々が道を空けていくところを、一人の壮年の男がゆっくりと歩いてくる。

「国王陛下……」

自然と、ヨアヒムは膝をつき頭を垂れた。彼の前で、国王グランベルト＝エル＝ディム＝フォリアルは立ち止まると、近衛兵たちに向けて手を振った。

「彼らを神殿地下まで案内しろ。魔族の大規模な封印施設が、まだ残っていたはずだ。すぐに司祭や上級神官たちを集めろ」

「へ、陛下、しかし」

「このまま町の外へ魔族を放り出して、どうなる。聖具が必要だというのなら、私が使って、こやつの息の根を止めてやる。シャリアの命令は、私が撤回する。行け！」

「は、はっ！」

近衛兵達は騎士団を先導する部隊と、突然この場に現れた国王を護衛する部隊の二手に分かれて行動を開始した。
王の姿が見えなくなると、近衛隊長は苦々しさを顔一面で表しながら、騎士団についてくるよう指示をだす。ヨアヒムは軽くため息をつくと、伝令係に行進開始の合図を出させた。
と。

「死んじゃえ、化け物！」

幼さの残る少年の声が大通にこだまし、ひゅん、と小さな石が飛んできた。威力のない石は騎士達の頭上を飛び越えると、布のかけられた檻にぶつかって、落下する。
それが、皮切りとなった。

「だん、団長！！！　市民達が……！」
「分かっている！！！　おい！　近衛と騎士を最低限だけ檻の周りに残して護送、他は市民たちの沈静化へまわれぇっ！！！」

飛び交う石や木の枝を盾で防御しながら、ヨアヒムは近衛隊長に向けて怒鳴りつける。近衛隊長は舌打ちをしつつも、部下の半数以上を周囲に散らした。
そして、ネクロマンサーを捕らえた騎士団たちは、人々の罵声を背に、王宮へと足を踏み入れた。

（19）　～　清き王宮…真実は（後書き）

……そろそろタイキ視点でほのぼのしたい。

（２０）　～　黄金と漆黒の遭遇

「これが、ネクロマンサー？　亡者達を統べるという、あの……」
「実際、結界の奥で守られていた存在だった。見た目には、人間の子供とそう変わりないがな」

薄暗い石造りの部屋一面に描かれた魔法陣の、ちょうど中央に寝かされている魔族の姿を見て、神殿の最高司祭は眉根を寄せた。

「確かに、強大な力は感じますが、これまた妙な」
「妙な、とは？」
「魔族特有の、禍々しい気や障気が一切感じられぬのですよ。もしも、彼があのまま町へ紛れ込んで生活していたとして、魔族として感知できたかどうか。その上で、お聞きしますぞ。あれは確かに、結界で守られていた最上級魔族なのですな？」

最高司祭の強い視線を受けながらも、ヨアヒムは変わらぬ表情で頷いた。自分でも、彼の子供の姿を見たときには何かの間違いかと思ったが、彼を守る魔族たちや、あの生気を奪う黒い風……魔族でない、わけがない。

「では、これより聖具の使用準備が整うまでの、封魔の儀を執り行う」

ここに運び込まれるまでに、幾重にも意識を縛る術式を施されたタイキは、傍目には安らかに眠っているようにしか見えない。
そんな彼を冷たい目で見下ろしながら、最高司祭は細身の短剣を垂直に構え、タイキの胸へと真っ直ぐに突き込んだ。ヨアヒムとと

もにこの部屋までついてきていたデイジーが、さっと目を伏せる。
しかし。

キィ……ン

「な……馬鹿な!?」
「封印具すら弾くというのですか!」
「おかしい、ここは結界内部ではないというのに!」

混乱する神官や司祭達が、口々に言い合う。そっとデイジーが目を開けてみれば、愕然とした表情の最高司祭と、変わらぬ姿で眠り続けるタイキ、そして遥か後方へはじき飛ばされたらしい短剣が見えた。

「……団長殿、これは、陛下にご報告を申し上げねば。その中には、確かにこの者がネクロマンサーであるかどうか、も含まれますぞ」
「なっ!?」

ヨアヒムの表情が一変する。なぜだ、と最高司祭を怒鳴りつけようとしたヨアヒムに向けて、最高司祭は力なく振り返り、答える。

「この者には、神に仕えし聖者の加護が施されております……なんぴとも、彼の命を奪うことを拒絶する、最上級の防御術にございます」

最高司祭の言葉に、部屋にいた神官、騎士、近衛兵達は凍り付いた。

※　※　※

一方、ネクロマンサーが城内へ運び込まれ、封魔の儀が行われていることを報告した一兵士は、玉座の間を包む異様な空気に冷や汗が止まらなかった。

「では、次の報告までもうしばしお時間を……」

「次の報告など結構。さっさと、魔族など片付けておしまいなさいよ！」

ヒステリックな女の声が響き渡り、兵士は顔を伏せたまま硬直する。

周りよりも数段高くなった王の座の隣に座るその女は、王妃シャーナリアである。彼女は唇をわななかせながら、手にした羽扇を強く握りしめている。

「あなた、なぜ、魔族を城に招き入れるような愚かな真似を……！魔族は害悪にしかなりません。国が、どうなってもよいというのですか！？」

「少し、静かにしろシャリア」

玉座に深く座り、額に手を当てていたグランベルトは、底冷えする視線をシャーナリアへと向ける。シャーナリアはびくりと肩を震わせつつ、自分の言葉を撤回する気はさらさら無いようだった。

「にしても、こんなに呆気なく最上級魔族を生け捕りにできるなんて、今代の騎士団はよほど質がいいのか、それとも魔族が間抜けなのか……どちらも、ということだって考えられるけど」

「少々興味深くはあるね。父様、もしお許し下さるのでしたら、王家の聖具を使うときは僕に任せていただいても？」
「なっ、アル、抜け駆けはよくないと思うわよ！」

そんな会話をしているのは、第一王女ハルディーネ＝エル＝ラ＝フォリアルと、第一王子アーデルベルト＝エル＝ディム＝フォリアルである。今まで兵や騎士達からの報告でしか魔族に関して触れることができなかったため、今回の事態には好奇心が刺激されているらしい。

だが、そんな二人に向けて悲鳴のような甲高い声をあげたのは、シャーナリアだ。

「なん、なんてことを！！　二人とも、あのような不浄なものに好んで関わろうなどと思ってはなりません！！」

魔族の存在を絶対悪とする国から嫁いできた母の言葉に、二人は肩をすくめながら小さく小さく息を吐く。それは、グランベルトも同じことだった。

※　※　※

さっきから、妙にふわふわする。

拘束具で身動きがとれない上、意識も封じられたはずのタイキだったが、なぜか、水の中に浮かんでいるような奇妙な浮遊感を抱いていた。ゆっくりと、目を開く。目の前には薄暗闇が広がっていたが、その先に、ぽつんと小さな明かりが見える。

（なんだろ、あれ）

気になって、手を伸ばそうとしてみる。少し重かったが、すぐに自由に動くようになった。

次に、頭を起こす。背中を伸ばして、腰を浮かせる。最後に、足をばたつかせて、光に向かう。

と、何かを突き抜けたような感覚を得て、タイキは思わず振り返る。

そこに、死にそうな顔をして眠っている自分の姿があった。

『っでぇえええええええええええっっっ！！！！！？　俺、死んだ！？　しん、死んだの！？』

大いに取り乱すタイキだったが、ふと、自分の頭を押さえる手をまじまじと見つめて、またも仰天する。うっすらと青みがかったそれは、半透明だった。

『……ゆ、幽霊？』

本当に死んでしまったのか、と息をのむタイキだったが、試しに寝かされている自分の身体に手を伸ばしてみると、先ほどまで手を伸ばしていた小さな光のように、タイキの胸の中心に小さな黒い闇があった。そこをじっと見つめていると、ふっと吸い込まれそうになる。

慌てて身を引くと、引力はあっさりと消えてしまった。

『えっと、これ、幽体離脱って、ヤツかな？』

極限状態になったため、タイキオリジナルのネクロマンサーとしての能力が開花したのか。それともそういう魔法を習得したのか。

どちらなのかはタイキには判別できそうになかったが、とりあえず移動することが可能になったので、まずは自分が寝かされている部屋の検証に移った。

『わ、この印触ったらびりびりする……なんかやばそうだな』

部屋の至る所に描かれた魔法陣をつつきながら、そんなことをつぶやく。実は低級魔族の魂なら簡単に消し飛ばしてしまうような強力な封印の波動を発している陣なのだが、タイキにはちょっとした静電気程度にしか感じられない。

しばらく部屋をぐるぐると回っていたタイキだったが、部屋の外も見てみたくなったため、陣が描かれていない小さな隙間に向けて手を突っ込んでみる。ここを通って向こうに行きたいな、と念じると、タイキの身体はその隙間と同じぐらいのサイズにまで縮んで、いとも簡単に壁をすり抜けることができた。

幽霊状態での移動の仕方や裏技などを見つけながら、タイキは城の様々なところを回りつつ、最後には場外へ飛び出した。久々に見る太陽に、眼を細めて喜ぶ。

『っあー、すっげぇいい天気！』

しばらく空中で陽光の気持ちよさを味わいつつ（といっても身体がないので雰囲気のみだが）、タイキは城下町を見下ろした。幾人もの人間が通りを行き交い、談笑し、時には路地裏で喧嘩などをしている者もいる。

中世ヨーロッパを絵に描いたような光景に、タイキは改めて、ここが異世界であると言うことを再確認させられることとなった。そっと胸に手を置いて、深呼吸する。

『さて、城の中はなんかばたばたしてたし……どこか静かなところでも探そうかな』

そう言って、タイキが降りていったのは城の裏手にある庭園である。よく手入れされた草花が茂るその場所は、王宮のゴタゴタなどを忘れさせてくれるような静寂に包まれていた。

ゆっくりと植え込みの間を浮遊していたタイキは、その庭園の奥にぽつんと存在していた金色をみて、目を丸くする。

『子供？』

上品な服を着た金髪のその子供は、ぺたんとその場に座り込んで目の前の白薔薇をぼんやりと見つめていた。

こんなところでどうしたんだろう、と不思議に思ったタイキが後ろに近づいて、同じように白薔薇を見ていると、不意に子供が振り返った。

キョトンとする両者。タイキは、幽霊状態の自分にまさか気づいたわけでもなし……と軽く首をかしげたのだが。

「透けてるお兄さん、誰ですか？」

『えっ、嘘バレた！？』

（２０）　～　黄金と漆黒の遭遇（後書き）

ちょっぴりほのぼのな予感。今までシリアスばっかり書いていたので、これからの展開が楽しみです。

（21）　～　かくれんぼしましょ

少年と目があって、しかも姿までばっちり見られいるらしいということを把握したタイキは、ふっと妙にさわやかな笑みを浮かべて、右手をびしりと立てた。

『じゃっ、そゆことで！』

「あ、待って……！」

そのまま逃げようとしたタイキに向けて、少年は慌てて立ち上がると手を伸ばす。しかし、実態のないタイキのマントの裾を、少年の手は簡単にすり抜けてしまい、ぼてっと顔面から転んでしまう。さすがにそれを見て、タイキも硬直し……結果、逃げるタイミングを永遠に失った。

『え、えええええっとぉお……』

「お、お兄さん、ゆうれいさん、ですか？」

赤くなった鼻を両手で押さえ、ふあふあと息を吐きながら尋ねてくる少年に、タイキは頭をばりばりとかき回しながら答える。

『あー、まあ、一応？　幽霊っていうか生き霊っていうか』

「あの、僕、レイっていいます」

『ん？　ああ、俺はタイキ。まーこんな身体だけど、よろしく』

そう言って、タイキは完全に逃げることを諦めて、この小さな子供の相手をすることに決めた。

彼のことは、この城に遊びに来た貴族の子供か、一番良いところで王子様かも、と予想していたのだが、実際今の国王の三人目の子

供で、末の王子なのだという。

『王子様が一人でこんな裏側にいていいの？』

「だって、お部屋にいてもつまらないですし……遊び相手は、今日、来れないって」

『なんでさ』

「きけんな魔族がお城に来るから、たたかえる人以外は、なるべくお城に入れないようにって父上が」

『……あ、なーる』

ぽん、と両手を合わせて、タイキは乾いた笑い声を上げる。まさか、当の国王もその捕らえた魔族が幽体離脱して王族の一人とコンタクトをとっているなど、予想もしていないだろう。

ひとしきり笑った後、もう一度レイを見下ろす。レイは、ぽやーっとした顔でタイキのことを見上げて、風も感じないのに揺れるマントを掴もうと手を伸ばしている。

「あ、あの、タイキ」

『ん？　なに、レイ』

「もし、もしよかったら、僕とあそんでくれませんか」

レイの言葉に、タイキは思わずずっこけそうになった。そして、思わず確認をしてしまう。

『あのさ、レイ。俺幽霊、おばけ、ゴーストなの。わかる？　ひょっとしたら悪い奴かもしれないんだよ』

悪い奴もなにも、この世界では害悪とまで言われる魔族であるが。

「タイキ、悪い人にみえませんよ？　兵士さんたちをいじめてるお

じさんたちのほうが、よっぽどこわいです」
『……多分ね、それいじめてるんじゃなくて訓練だと思うんだけどなぁ……うん、まあ、レイがそういうなら、遊んでもいいよ。何する？　ちなみにどーやっても、俺とレイは触るってことができないけど』
「う、うーん……」
そこで悩み始めてしまった少年に向けて、タイキは笑って、一つの遊びを提示した。
お互いの姿が見えるだけでできる、簡単な、懐かしい遊び。

※　※　※

デイジーは、傍らに立つ神官たちの蒼白な顔を見て、それから床の上に変わらず寝ているタイキを見下ろした。
「では、縛っていた意識がまるごと、この身体から抜け出していると？」
「ええ、つい先ほど、内部の魔法陣に反応があり、その確認をしようとこの部屋に立ち入ったところ、魔族の気配が薄くなっており」
「おそらくは、精神体のみで行動しているものと思われます」
他にも、封印の間では幾人もの神官が書物や道具を手に、ばたばたと走り回っていた。魔法陣に欠けた場所はないか、どこかに漏れはなかった、などを躍起になって探している。
ふう、とため息をつきつつ、デイジーはそっとタイキの傍らに膝

をついた。すっかりやせ細り、治りかけの傷が痛々しいその顔を見て、胸の内から何かが顔をもたげてくる。それを強引にねじ伏せて、ベルトから抜き放った短剣をそっとタイキの胸に近づけていく。

封印具ではないごく普通の短剣は、しかし、ある一定距離まで近づいたかと思うと、見えない膜のようなものに阻まれて先へ進まなくなった。聖者の加護と違い、力業で突破することはできそうだが、下手に刺激をすると何が起こるか分からない。

「とにかく、このことを団長へお伝えしてきます。他にも、精神体の捜索を魔法部隊の面々へ任せましょう」

「そうですね……では、我々もこれで」

分厚い書物と白墨を手に、真剣な表情で頷き返した年かさの神官を見送り、デイジーは封印の間をあとにした。

※　※　※

「あ、タイキみつけました！」

『おっと。んじゃ、次二十数えるから、ほら、レイも隠れて！』

「はーい」

きゃっきゃと楽しげに庭を駆けていく姿を見て、タイキは自然と笑みをこぼす。目を閉じて、きちんと二十数えてから、ゆっくりとあたりを漂い、金色の輝きを探し出す。

『……みっけ！』

「あう、タイキ早いですよ」
『だって、レイってば植え込みの裏ばっかりにかくれるじゃん。それに髪も服もキラキラしてるから見つけやすいんだよ。もうちょっと工夫してごらん？』
「うー、わかりました。じゃあタイキ、十数えますね！」
『了解っと』

頬を膨らませながらも、しっかりと両目を手で覆って、大きな声で数えるレイ。
霊体を利用して、植え込みに半分以上埋もれるようにしながら隠れたタイキは、久々に味わうのどかな時間を、しっかりと噛みしめていた。
と、穏やかな時間は、唐突に終わりを告げる。

「殿下、レイリーズ殿下！　こちらにいらっしゃいましたか……！」
「わ、わっ」
『……ん？』

なにやら一人の兵士が、血相を変えてレイリーズを抱え上げた。
ヨアヒムたちのような騎士には見えないが、上品な衣服に腰のベルトに差し込まれた一振りの剣の雰囲気からして、兵の中でも上位に位置するものかな、とタイキは適当に当たりをつけた。
その兵、王宮近衛兵の男は、ばたばたと暴れるレイを抱えたまま、あっという間に庭から走り去っていってしまった。その様子にただならぬものを感じたタイキは、軽く首をかしげつつ、屋外にある廊下へ近づいていく。
使用人達よりも、魔法使いや騎士といった戦闘員たちが数多く行き来する廊下を眺めつつ、彼らのこぼす言葉を拾い上げ……タイキは、引きつった笑みを浮かべた。

『え、俺が抜け出したの、バレてる？』

さらに、王族達の方でもそんなタイキに聖具を使ってとどめを差すかどうか、どのような手順で、誰が行うかで大激論が繰り広げられているらしいとのことで、さすがに自分の身体が心配になったタイキは、慌てて封印の間へと飛んでいった。

（２１）　～　かくれんぼしましょ（後書き）

ほのぼのが書けたぁあああああ（バンバン

それだけで、なんか、ちょっと気分向上（自分で言うかな

さあて、ここからどんどん展開を早めて、いけると、いいな……！

……感想、誤字脱字報告、いつでもお待ちしてますよ？　―ω・）

＜チラッ

（22）　～　人と、魔族と、

タイキが封印の間へ戻ってみると、なにやら神官達がばたばたとせわしなく行き交っており、自分の身体のそばにはデイジーが一人でかがみ込んでいた。と、神官のうち数人が「ん？」という表情で周囲を見回したので、タイキは自分が霊体になっていると言うことがばれる前に、するりと自分の身体へ飛び込んだ。

（っと！）

「こ、この気配は……！」

室内に反響して、妙な感じに聞こえる神官の声。タイキは小さく呻きながら、つい、長年の癖で盛大にのびをしながらむくりと起き上がった。しかも、どでかいあくび付きで。

「ふぉあああああぁああああ……あああ、あー肩凝ってるし、なんか体中ばっきばきする……お腹減った……。身体があるってこういうことなんだなぁ」

霊体であった時は欠片も感じなかった感覚に、思わず遠い目をするタイキ。と、隣から重々しいため息が聞こえてきたので振り返ってみれば、デイジーが頭を抱えていた。

「ちょ、お、おはようございますデイジーさん？　どうしたのさ。すっごい疲れてみえるけど」

「……疲れてるわよ全くもう……」

ぼそっと低い声で答えられて、タイキは条件反射のごとく彼女に

向けて「ごめんなさいスイマセンでした」と言いながら土下座体勢になった。それを見た神官達がまたフリーズする。

「タイキ、ちょっとあなた手元見てみなさい」
「て、手元？」
「なんだか重いと思わないの」
「あ、なんか鎖いっぱいついてるけど、……かなり、砕けてますけど」
「……ああもう、このテンポが疲れるわ」

そう言って、ディジーは立ち上がると近くの神官達に見張りを頼みながら、封印の間を出て行った。

その場に残された神官達は、粉々になりもはやくず鉄にしか見えない封印の枷をいじりつつ、「え、これ壊れたのってのびしたとき……かな？　え、俺そんな筋力あったっけ？」と首をかしげているネクロマンサーを見つつ、その場を動こうにも動けずにいた。

しばらくすると、封印の間へディジーが戻って来た。彼女の後ろからは、ヨアヒムや他の騎士たち、魔法使いたちに、豪奢な衣装をまとう老人が姿を現した。

騎士や魔法使い達はともかく、どこからどう見ても神官の中で偉い人にしか見えないその老人が、妙に戸惑ったような目で自分を見ていることに気づいたタイキは、なんだろうと思って思わず声を出しそうになり、

カァンッ！

「っひょえ！？」

数歩で目の前に迫ったヨアヒムが、抜刀しながら斬りかかってきたのに驚き、悲鳴を上げる。確実に左肩から右脇腹までを切り裂く

ルートで振り下ろされた剣だったが、見えない膜のようなものに弾かれて、ヨアヒムはこれ見よがしに舌打ちをする。

「忌々しい……！」

「……え、今何起こったのさ？　俺死んだって思ったんだけど」

ぺたぺたと身体を触りながら戸惑いの声を上げるタイキを見て、ヨアヒムは毒気を抜かれそうになるが、ぐっと堪えつつ剣を鞘に収める。

「デイジー＝フローマー！」

「は、はっ！」

ヨアヒムが脇へよけると、デイジーがタイキから少し離れたところで仁王立ちになり、右手を胸に、左手を正面に向けて祈り始めた。その左手がうっすらと発光してきたのを見て、タイキの中で本能的な恐怖が呼び起こされる。

（あれは、食らったらマズイ気がする）

慌てて立ち上がり、逃げようとしたところで、デイジーと目があった。彼女はぱくぱくと何か言うような仕草をしてそっと左手を振り下ろした。

左手から放たれた純白の光は、まっすぐにタイキへと向かっていき、彼を包んだかと思うと封印の間全体を満たした。あまりのまばゆさに全員が目を閉じ、そしてもう一度目を開いてみると。

「馬鹿な」

騎士と、魔法使いと、神官がそれぞれつぶやく。高位浄化魔法の

直撃を受けながらも、当のタイキは目を白黒させて、その場に存在し続けていた。

「っあー……目がしぱしぱする……。やべ、光が残っちゃった」
「……お前は、いったいなんなんだ。魔族の長ではなかったのか」
「ん？」

しばらく目をこすっていたタイキだが、すぐ近くで自分を見下ろしてくるヨアヒムの困惑顔を見つけて、表情を変えないまま返す。

「まあ、らしくないとは思うけど。俺がネクロマンサーだっていうのは、本当だ。今更になって疑ってんの？　なんでまた」
「ではなぜその魔族風情に、聖者の加護が施されているッ！！」
「……せいじゃのかご、って、何？」

今度こそ言葉を失ったヨアヒムに代わって、若干顔色の悪くなっているデイジーが小声で解説した。

「最高位の神官にしか扱えないはずの、防御術。死を約束する攻撃や害などの危険すべてを遠ざける特殊な結界よ」
「チートバリア！　え、俺そんなのいつできたの……？　ていうかそもそも結界（こっち）に神官なんているわけないし、えー？」

頭を押さえながら考え込みそうになったタイキは、面倒くさくなって思考を放棄した。どうやらその聖者の加護とやらのおかげで、自分は今まで死なないでこれたらしいということだけ把握し、軽く頷く。

ふらつきながらもゆっくりと立ち上がったネクロマンサーを見て、人々は思わず一歩退いた。その中で、やや不機嫌そうな色を宿したタイキの視線を向けられたのは、騎士団長であるヨアヒム。

「なあ、なんでまた急に襲ってきたんだよ。ここ最近は、大人しーく結界に引きこもってたはずなんだけど」

唐突な問いかけに、ヨアヒムは鼻で笑いながらも答えてやる。

「魔族が我ら人間にとって害悪であることなど、創世以来の理（ことわり）。いつ貴様らを狩りに行こうが、関係ない」

「人間って結構、きっかけがないと動かないモンだと思うけどね。実際、ここ何十年かは結界にまで踏み込んでくるような、大々的な狩りはされてないって教えてもらったし」

タイキは、自分が話していくうち、どんどんと心の底が冷え込んでいくのを感じていた。

こいつは、みんなを苦しめた。

こいつは、デルを殺した。

こいつは、俺を捕まえた。

……こいつは、俺を殺せない。

おれはこいつをころせるけどね？

（っ違う違う！　なんか魔族モードになってる、ストップストップ！）

今まで静かに話していたネクロマンサーが、急に頭を押さえてぎゃあああ！　と叫び始めたのを見て、大半の人間がどん引きする。

しばらくして、落ち着いたらしいタイキに向けて、ヨアヒムではなくデイジーが代わって答えた。

「山の様子が、変わったからよ」
「……山の様子？」
「騎士フローマー、控えろ」

ヨアヒムが歯を食いしばりながら言うが、デイジーはタイキの方ばかり見ている。

「結界周辺の村や、麓に住んでいる人間達が魔族を目撃する回数も増えた。山の奥では血の臭いが立ちこめている。魔族の行動が、活発化しているとしか考えられないでしょう。だから、無力な者が襲われる前にもとを叩きに行った。……ねえ、本当に、力を蓄えて人間を襲うつもりだったの」
「んん？　んー……ああ、なるほどね……」

デイジーの言葉をしばらく考え、飲み込むことができたタイキは「認識のずれとは恐ろしや」と早口でつぶやいた。

「何か言ったか」
「ううん、別に？　ただまあ改めて、人間と魔族の溝は深いなぁと」
「今更」

ヨアヒムがこれ以上なく顔をゆがめ、効果がないと分かっているのに思わず剣にまた手を伸ばしかけたところで、封印の間の扉が勢いよく開け放たれた。驚いた神官や騎士達が一斉に振り返ると、年若い従者が顔面蒼白な様子で、息を荒らげながら部屋へと入ってくるところだった。

従者は何かを言いかけ、ふと人々に取り囲まれている小柄な少年の姿を見て、一瞬変な顔をする。だが、ヨアヒムに睨まれた途端姿勢を正し、つっかえつっかえ報告した。

「も、申し上げ、ます！　ぎょ、玉座の間に、魔族が！」
「……貴様の手引きかっ！？」
「手引きなんてもんができるんなら、ここに連れてこられる間にやってるよ！　知らない知らない！」

我慢の限界を超え、ヨアヒムは再度剣を抜き放ちその切っ先をタイキへと向けたが、タイキは両手を大きく上に上げたままぶんぶんと首を横に振る。

「魔族とは、アンデットどもか？」
「あ、アンデットもいる、とのことですが……ヴァンパイアや、で、デーモンまでもが！」
「……え、みんな来たの？」

従者の叫びに、人々が皆凍り付く中で、一人タイキはきょとんとした顔で、そうつぶやいた。

（22）　～　人と、魔族と、（後書き）

ブラックなタイキが若干降臨しかけました。押さえました。偉いよ！
聖者の加護といういつの間にやらついてきたチートくんのおかげでもありますが、魔族になったためこういった恐怖（剣を向けられる、魔法をぶつけられる）にも若干ながら耐性がついている模様。
どんどんチートになっていけ。ただ、加護はそろそろお役ご免にするけどね！

（２３）　～　交渉…宴か救出か（前書き）

ちょっとタイトルがおかしなことに……ｏｒｚ
まっことお久しぶりでございます。何ヶ月ぶり？　三ヶ月ぶり！！！
とりあえず一本だけお話ができあがりましたので投下……連チャンにしたかったんですけどね。もう無理ですあばばばば

（２３）　～　交渉…宴か救出か

異変はゆっくりと、しかし確実に起こった。
綺麗にたたまれた布を両手に抱えて、滑るようにして廊下を歩いていた女官は、自分が通り過ぎようとしている廊下の中央にぼんやりと赤い光が宿るのを見て、ぴたりと足を止める。それが何なのかは皆目見当もつかなかったが、とにかく、『恐ろしい』。
と、女官が見ているなかで、光がはじけた。

「ッッッ！！？」

そこに、光と入れ替わるようにして現れた者たちを目の当たりにして、女官は腰を抜かす。壁に背を預け、ずるずるとへたり込んでしまう。
まず目に入ったのは、銀髪赤眼の美丈夫。だが、異様に血の気のない白い肌、そして尖った耳の形から彼が人間ではないことがうかがえる。
そして、彼の後ろには彼と同じくらい美しい容姿の男女が数名、それと人の身体に山羊の頭をした悪魔、腐りきった肉を布きれで覆っているゾンビたち、足を引きずっている艶めかしいドレス姿の女性……さらに、彼らの周囲を十数の淡い光が漂っている。
先頭に立つ美丈夫は、ちらりと廊下の端で腰を抜かしている女官を見やった。瞬間彼女は、ひっ、と悲鳴を口からもらす。しかし、その頃には彼らは堂々とした足取りで、廊下を真っ直ぐに、女官を無視して歩いて行った。

「哀れで愚かしい。……では、行くぞ」

※　※　※

玉座の間に集まる王や王妃、重鎮たちの間に瞬く間に広がる情報。
それは防御結界による城の警護を任される神官たちからの緊急報告であった。

「城内に魔族の反応を確認!?」
「転移だと、神力の濃度がもっとも高いこの王都に……」
「気配が大きすぎて……おそらくは、さ、最上級……」
「馬鹿馬鹿しい!!!」

報告に来た神官長は、顔色を無くしたまま、必死にこぼれ落ちる汗を拭いながら、震える口で訴える。

「それと、へ、陛下……防御結界の主要装置五つのうち三つの反応がありません。残る二つにも、わたくしの名で増援の神官、騎士を派遣してはおりますが、連絡がございません」
「……そうか」

苦々しい表情で額を押さえ、もはやそれしか言うことのできない国王の隣で、王妃は唇を噛み、目を見開いて全身を震わせていた。
自身が生活するこの城の中に、存在全てが厭わしい魔族がいると思うと、今にもヒステリックに叫びたいに違いない。

「ヤツらの狙いは、やはり……」
「は、結界に向かわれた騎士団が回収してきたという、最上級魔族」

「その、奪還しか思いつかないだろう？」

玉座の間の荘厳な扉が、一瞬で吹き飛んだ。その轟音は、その場に集まっていた人間たちを強行の渦にたたき落とすには、十分すぎるものだった。

「五月蠅い。黙れ」

阿鼻叫喚の室内に向けて、怜悧な声が響き渡る。すると、パニックに陥って絶叫をあげていた人間たちは一人残らず、口を閉ざして目を剥いた。そして、慌てて手で口をひっかくような動作をするが、口は開かず声も出せなければ、息もできない。やがて、そのままばたばたと意識を失うものが出てきた。

口とのどを押さえて倒れ込む人間たちを眺めながら、ロスティスラフは呆れたように言う。

「単に口を閉ざしただけだというのに、鼻でも息ができるというのを知らないのか、この愚か者どもは」

「ま、魔族……ヴァンパイアか」

ロスティスラフの姿を見て、口を閉ざされることを免れた比較的冷静だった者が、ぽつりとつぶやく。しかし、彼もロスティスラフの背後からぞくぞくと現れる魔族の姿を見て、言葉を失う。

「で、デーモン、アンデット……！？　アンデットは、まだ分かる。だが、なぜ――――っ！？」

「あらぁん、実はここに、ビースト代表もいるわよ？　ってことで、全種族大集合って感じかしら……」

「ふん、僕の部下たちに支えられなければ、ここに着くこともでき

なかったろうに」
「やっかましいわね」

ゼフィストリーはロスティスラフの言うとおり、ヴァンパイアの一人に支えられながら頬を膨らませた。

「幻覚魔術で痛みを紛らわすのも、それが精一杯だ。戦えもしないというのに……はあ、僕も全く、戦力にならない者を連れてくるなんて血迷ったものだ」
「ふふん、タイキに会いたいっていうのが一番の理由でもいいでしょぉ？　戦うのは、ま、今日はあんたたちに任せるわよ」

そう言うゼフィストリーの隣で、ヴォーゴが大鎌を背負い直す。先端につけられた鎖が刃とぶつかって、冷たい金属音を響かせる。

「……まさか、アンデットのリーダーを捕らえたことで、すべての魔族が集まるとは……」
「ふ、貴様らは一番手を出してはならない魔族に、手を出したというわけだ。さて」

こーん、と甲高い音が鳴り響いて、玉座の後ろにある隠し扉や、その他の出入り口から騎士や魔法使い、神官たちがなだれ込んでくる。十倍以上の人数に取り囲まれながらも、ロスティスラフは冷笑を浮かべ続け、そっと自身の口元に人差し指をあてた。

「タイキは……今代のネクロマンサーは、どこだ？　吸血貴族（ヴァンプ）たるこの私が直々にやってきたのだから……今日は、人の歴史が一つ途絶えるような、素晴らしい宴になろうぞ」

ロスティスラフの言葉に、迎え撃とうと戦意を高めていた騎士達

が愕然とする。ヴァンプといえば、もはや伝説といっても良いほどの最上級魔族である。

カチ、カチ……と騎士の青年は耳の奥で鳴り続ける音に眉をひそめた。そして、気づく。誰かの鎧がこすれる音でもなければ、剣のつばと鞘がぶつかる音でもない。それは、青年自身の歯がかみ合わず、ぶつかっている音だった。

恐ろしい。

ゆっくりと、ロスティスラフの右腕が上がる。あまりのプレッシャーに、神官たちもこの場にいる人間を守るための結界をはる余裕を奪われ、呆然としていた。

そこへ。

ドッゴン、ガシャン！！！

重鎮たちが立っている方の壁、一面に蔓草の模様が描かれたそこが、普通の扉のように開け放たれると、その隠し通路から真っ黒な影が飛び出してきた。影は部屋一面にしかれた絨毯に足をとられ、顔面からすっころぶ。影はしばらくうずくまっていたが、ゆっくりと顔を上げた。

「いってぇ鼻、鼻曲が……って、やっぱロティじゃん！！？」

「「タイキ！」」

ロスティスラフとゼフィストリーの声が、重なる。

紛れもなく、魔族らしくないアンデットの新しいリーダー、タイキであった。

※　※　※

少し、時は遡る。

「えーっと……うわ、ホントだみんないる……ていうかこれロティ？　この一番でっかくて殺気だってる気配ってロティだよね！？　やばい、このままじゃ城の人間見境無く皆殺しにしちゃう、ていうか城がなくなるっ！！　ねえヤバイよ！？」

「ロティ、というのは貴様の手駒のなかでも強力な魔族か？　ふん、いくら強大な力を持つとはいえ……」

「ちょっとおじさん、さっき知らせに来てくれた人、アンデット以外にも魔族来てるっつってたじゃん」

「お、おじ……っ」

ひくっ、と頬を震わせるヨアヒムを無視して、タイキはデイジーに視線を合わせる。

「ロティっていうのは、えと、ロスティスラフ、だったかな。ヴァンパイアで一番強い……ヴァンプのことだよ」

タイキの説明で、封印の間にいた人間たちが残らず凍り付いた。

「……そ、んな、馬鹿な。なぜ他の種族のリーダーを、わざわざ！？」

「うーん、ロティにはかわいがってもらったしなぁ……一緒に遊んだりもしたし。にしてもすごいな。……いや違う、感心してる場合じゃなくて！！！」

地団駄を踏みながら自分の頭を叩くタイキを、あっけにとられながら眺めているデイジーだったが、次にタイキがつぶやいた言葉にさらに顔色をなくす。

「なんか、みんな人の気配が多いところに真っ直ぐ向かってるみたいなんだけど……ねえ、今この城の中で一番人が集まってる場所って、どこ？」

「……きっと、あなたのことで会議をしている、玉座の間……」

デイジーは息をのみ、ヨアヒムを振り返る。

「団長」

「……魔族の言うことを信じるなど、これほど屈辱的なことはないがな……しかし、最優先されるは我らが王の安全。我らも玉座の間へ」

「じゃ、俺も連れてってよ」

さらりと言ったタイキに向けて、ヨアヒムは冷たい視線と剣の切っ先を向ける。

「それ、意味ないんだよな。俺は聖者の加護とやらのおかげで死ぬことは無いって言うし。あ、みみっちく攻撃するようなことも考えないでね。俺、自分から突っ込んでくから。そうやって『死なない攻撃』を『死ぬ攻撃』にすれば、加護は発動するだろうし。あと、さ」

揺れる剣先をぼんやりと眺めながら、タイキは言う。

「あんたたち、怒ったロティを止められると本気で思ってる？」

剣を構えるヨアヒムの背後で、数名が息をのんだ。タイキの、その、子供と思えない瞳の暗さに。

一瞬それに、その場にいただれもが飲み込まれ……いや。

「あ」

タイキの表情が、先ほど仲間が来たと騒いでいたときのような生気あるものへと変わる。ヨアヒムがゆっくりと首をひねると、蒼白ながらも何か決意したような、そんな鋭さを思わせる表情を浮かべるデイジーが、タイキの右手を握っていた。

「連れて行ってあげる。きっと、あなたが出て行くしか、方法はないだろうから」

「フローマー、貴様……！」

「団長」

一言、そう言ってデイジーはタイキの手を握りなおし、ヨアヒムと目を合わせる。

この展開に思考が停止していた神官や他の兵士たちは、しかし慌てて戦闘態勢を整えると、タイキだけではなくデイジーにまでその矛先を向ける。

言うべきは、ただ一つ。

裏切り者！！！

デイジーはゆっくりと目を伏せた。つかの間、震えた手がタイキの手を取り落としかける。

しかし、逆にタイキに握りかえされ、デイジーは目を見開いた。

「ありがと、デイジーさん。オレ、頑張って止めてくる。ぶち切れたみんながどうなるのか、まだあんまり見たことないからわからないけど……。ここには、レイみたいな人も、すごく少ないだろうけど、いるんだし」
「レイ……？」

タイキがぽつりとこぼした名前に眉をひそめていたデイジーだが、タイキが手をしっかりと握ったままその場を歩き出したのを見て慌てて足を動かす。

「あ、そーだ。じゃあおじさんも来てよ。オレが逆に向こうと合流して、この城……っていうか町をめったためたにするんじゃないかっていうかそれしかないだろって顔に書いてあるよ、心の声」
「んなっ」
「はい、砕けてるけど鎖持って、剣もしっかり支えて。はい、行こうデイジーさん。なんか殺気が膨れあがってるからそろそろやばい」
「え、ええ……そちらへ」

騎士たちが眼を白黒させている間に、タイキはデイジーとヨアヒムの二人を連れて封印の間を出て行ってしまう。部屋を出た瞬間、妙に身体が軽くなったような気がして、早歩きで廊下を通りつつ、タイキは首をかしげた。

「あー、やっぱ一応あの部屋負担にはなってたわけか」
「……通常の魔族であれば五分と持たずに消滅する、この国で最も清められた場だったのだがな」

タイキがまとうゆるい空気にとうとう気力が持たなくなったのか、鎖と剣をそれぞれ手に持ちながらヨアヒムはぼんやりとした頭で答えてしまう。そんな団長の哀れな姿に、デイジーは『少し前まで私

もああだったのよね』と冷や汗を垂らしている。
誰もいない廊下を駆け抜け、直通だと言われる隠し通路を稼働させる。デイジー、タイキ、ヨアヒムの順で細長い階段を登っていくと、薄い戸板が現れた。デイジーがそっとそれを普通の扉のように開いていくと、妙に静まりかえった玉座の間の空気が流れ込んでくる。
そこへ響く、朗々とした男の声。

「あ、ロティだ」

言って、タイキはいてもたってもいられず、デイジーが三分の一ほど開いた戸板の隙間からするりと這い出してしまった。まだ身体に絡んでいた鎖は完全に砕かれ、その場にころころと転がる。
そして。

ドッゴン、ガシャン！！！

慌てて駆けたせいで、絨毯に足をとられその場でずっこけた。

「いってぇ鼻、鼻曲が……って、やっぱロティじゃん！！？」
「「タイキ！」」

ロスティスラフとゼフィストリーが、そろって声を上げる。タイキは立ち上がろうとして……ふと二人の後にいる人影に目を向けた。
耳がとがっていてやけに美形な人たちは、ロスティスラフの配下であるヴァンパイアだろうと思い、あああんなにホロたちがいる、ゾンビもいるし、と思ったところで。
穏やかな、まるで魔族という肩書きが似合わない表情が、見えた。

「タイキ、よくぞご無事で」
「あ」
目を、見開く。
そのふちから、ぽろりと涙が転がり落ちた。
「で、る」
名前を呼んで、後悔した。そうしたら、消えてしまうかもしれない。そんな意味のわからない不安にかられて。けれど。
「はい、我らがリーダー。ご心配をおかけしました」
彼は、ちょっとばかし小綺麗で、人間並みに知識を持っている変わったゾンビ・デルフェールは、ちょっぴり表情に苦さを交えて、お辞儀した。それをみて、タイキの中の感情が爆発した。
「でる、デルだ。生きてた!!!」

（２３）　～　交渉…宴か救出か（後書き）

ご都合主義ここにきわまれり。
さて、このあとどう収拾をつけるのやら！
……期待しないでくださいごめんなさいｏｒｚ
では、じゃあ一ヶ月後くらいにでも（嘘です責任持てません）

（２４）　～　争いなんて望まない

「タイキ」

主の姿を認めて笑みをこぼしかけたデルフェールはしかし、すぐに顔つきを厳しいものへと変えた。他の面々も、彼の姿を見たことで安堵するも、その状態をよくよく見て先ほどよりも色濃い殺気をまといだす。

「え、ちょ、ろ、ロティ――？　ゼフィもなんでそんなおっかない顔……」

「これが、怒らないでいられるか」

そう吐き捨てて、ロスティスラフは嗤う。まさか自分の配下でも、ましてや同じ種族でも無い間族に対して、自分がこんな感情を抱く日がくるとはついぞ思ったこともなかった。だが、現に彼は、そしてデルフェールやゼフィストリーも、ぼろぼろなタイキの姿に、彼をそんな姿にしたこの人間達に、怒り……憎悪を抱いている。

彼の手元や足下には、ばらばらに砕けた枷だったようなものが転がっていた。その先につながっていただろう鎖を握り、呆然としている騎士と、その隣の女騎士にロスティスラフは視線を向ける。

その目が。

「だめだよ、ロティ」

ヴァンプに睨まれたとたん、とてつもない息苦しさと、胸の内が

膨れていくような感覚を覚え膝をついたヨアヒムとデイジーだったが、ぼすん、という音とタイキの拗ねたような声色を耳にして、なんとか顔を上げる。

息も絶え絶えな人間達が目を見開くなか、人間の子供にしか見えない……ネクロマンサーだというその存在は、この場で一番の脅威であろうヴァンプの腹を、遠慮なくぶっ叩いていた。それも何度も。

ぼすぼすぼす、といくら叩かれても、ロスティスラフ自身が強靱なのとタイキが衰弱していたという理由で、攻撃には一切なりはしなかったのだが、騎士の身体を内側からはじけさせてやろうとしていたロスティスラフは、集中力を乱されきょとんとした表情になる。

「なぜ、止める？　あれはお前を害そうとしたのだろう」

「いや、まあ何度も殺されそうになったけど、チートな結界のおかげで死ぬことだけはまぬがれてたっていうか。それに」

ロスティスラフの腹を叩くのをやめたタイキは、ちらりと膝をついているデイジーの方を見て、にこっと笑った。

「人間のなかにも、魔族のこと、知ってくれそうな人がいたしね」

「タイキ……」

その笑みを向けられたデイジーは、他の魔族達や、この場に集まった重鎮達が戸惑いの視線を一斉にこちらへ向けていることに気づき、全身を震わせながらも、なんとか立ち上がった。

「本当に、あなた魔族だったのね」

「え、信じてもらえてなかった？　ここに来るまで！？」

「あなたと最初に会話したときからずっと半信半疑よ」

一歩、足を踏み出す。またヴァンプがこちらに視線を投げかける

が、妙な威圧感や圧迫感は感じない。代わりに、向こうが自分に興味を持ったことが、その視線から伝わってきた。

「しかも、アンデットだけでなく、ヴァンパイアや、デーモンにまで守られるなんて、そんなの聞いたことないわ。あなた、伝説になるんじゃない？」

「デイジーさんそれ大袈裟だよ……」

「なら本人達に聞いてみなさいな。きっと、彼らも他の魔族のリーダーを助けるなんて、考えたことなかったはずだと思うわ」

「……えーと」

ちょっと考え込んだタイキは、ふともう一人の騎士、ヨアヒムに視線を向ける。そういえば彼と雰囲気が悪くなってから、デイジーの問いに、まだはっきりと答えていなかったことを思い出した。

「ねえ、デイジーさん、あなたは俺に、力を蓄えて人間を襲うつもりだったのかって聞いたよね」

「ええ、言ったわね」

「もう俺たちは、人間を襲っていたよ。……山賊をひたっすらにね」

「……あ、山に立ちこめる血の気配って」

そこで、何かに気づく。ひょっとして、もともと人間だったというこのネクロマンサーは、とてもぎりぎりなところを歩いていたのではないか。

「人間が、牛とか豚とか鳥とか魚とか、他の生物を食べるのが自然なように、魔族は人間を食べるのが自然なことなんだ。魔族になって、その本能が備わってわかった。けど、俺はやっぱり『中途半端』だから……山で悪事を働くヤツらなら、構わないかなって思ったんだ。ふもとに住む人や、山に迷い込む人の被害も減るかなって。そ

ういう、罪のない人には、餌に……犠牲に、なってほしくなかったから」

「あなた」

次第に、ここではないどこかを見るように細められる黒い瞳を見つめて、デイジーはもう何もいえなくなった。

と、そこで玉座の間を金切り声が支配する。

「こっ近衛、何をしているのです。あなたたちの勇気をわたくしに見せてみなさい！　魔族どもを、残らず討ち取るのですよ！！！」

王妃だった。今までずっと目を見開き、血の気のひいた様子で成り行きを見ていた彼女だったが、魔族達が動かなくなったことで精神的に余裕が生まれ、しかしその結果、自分の視界に魔族が映ることへの極度な忌避感も復活してしまった。

王妃の命令が響き渡った玉座の間は、ふたたび緊張に包まれた。惚けていた兵たちは、慌てて武器を構え、魔族を狙う。そしておとなしくしていたように見せていた魔族達も、戦闘態勢をとった兵に向けて先手をとろうと動き出す。

それをまたタイキが遮った。

「ちょっ、たんまたんま！」

しかし、緊張感に耐えられなくなった兵の一人が、ひゅぱん、と変な音を立てて矢を放った。狙いがわずかにそれた矢はタイキへ向かい、しかしその間に滑り込んだデルフェールの肩にとんっと刺さった。

「で、デル！」

「平気ですよ、腐った身体に痛覚もなにもあったものではありませ

んから」

そう言って矢を抜き、ぽいっと放り投げるデルフェール。間近で見て、確かに彼はここに存在していることを再度確認したタイキは、泣きそうな表情になった。

それと同時に、心の奥からまた冷たい、自分のモノとは思えない声があふれてくる。

ころしてしまえ
ころしてしまえ
でるをきずつけたあいつらを

にんげんなんて　ころしてしまえ！

（いやいやいやここで自分から誘惑に負けたら、面倒なことになるから……！）

目を閉じ、必死に声を振り払う。うなり声をあげ、まるでうなされているかのようなタイキを、デルフェールはそっと抱き寄せた。

そして、ロスティスラフとともに油断無く周囲を見回す。

先ほどの一射を皮切りに、他の兵達も次々と矢をつがえ、こちらに狙いを定めてきていた。弓矢ごときならば、障壁を張れば問題なく対処できるが、そうすればまず間違いなく兵達は距離をつめ、捨て身で攻撃してくるようになるだろう。それは、先ほどからタイキが禁じている。

「まったく、最初からすべて叩き潰せばよいものを」

デルフェールに抱きかかえられる小さなネクロマンサーを、しかしどこか温かな目で見下ろしたロスティスラフは、突然兵が一歩後

ろへ退いたのを見て表情をなくす。
何かの策かと思えば、重鎮の一人が声をひっくり返しながら叫んだ。

「へ、陛下、何を!?」

魔族達が振り返ると、そこには口をぱくぱくさせ、玉座にすがりついている王妃の無様な姿と。
片手を挙げ、兵達に攻撃停止の意を示す国王が、ゆっくりと彼らの方へ歩み寄ってくる姿があった。

（２４）　～　争いなんて望まない（後書き）

大変お久しぶりでございます……っ！
やった！　年越し前に間に合ったぁあああ！！！　すみません一人ハイテンションで！

げふん。
ここまでがっつり放置しておいて、お気に入りもさぞがっつり減ってるだろうな……来る人とかも減ってるだろうな……と思っていたのですが。
皆様優しすぎます（´；ω；`）ブワッ

現在、自分でも状況がこんがらがってぐっちゃぐちゃの王宮編クライマックスですが、なんとか年越し前に終わらせたいなぁと思っております。
……終わるかどうかなんて、責任持てないけど……！↑

それでは。

（25）　～　いやーな膠着状態…

王はやがて手を下ろすと、視線をデルフェールに抱えられているタイキに向けた。どうやらタイキと話をしたいようだとデルフェールが判断すると、彼はゆっくりとタイキの肩を揺する。顔を上げたタイキは、デルフェールに示され、すぐ近くに国王がいることに気づくと目を丸くした。

そんな人間らしい反応に、思わず頬を緩めかけた王は、しかしまた無表情の仮面をつけると。

「ネクロマンサー、突然の手荒な招待、誠に申し訳なかった」

「……え」

人が、魔族が、その場にいた誰もが同じ言葉をつぶやいた。

人間の王が、魔族の長に口頭で謝罪し、頭を下げるというこの光景に。

「我が国にあるアンデットの結界は、ネクロマンサーが生まれ出でる場所……すなわちアンデットの総本山とも呼べる場所。その付近で常と異なる動きがあったがため、我らも急いた行動をとってしまった。こちらも甚大な犠牲者を出したが、それはそちらも同じこと。あなたがたの平穏を破ったこと、ここに謝罪する」

「え、え、え？　なんで、なんでいきなり謝っちゃってるんですか！？　ていうか騎士とかこっちに寄こしたのってあなたじゃ」

「私に魔族討伐を目的とした、騎士団の統率の権限はない。あるのは……王妃だ。そう、彼女と結婚するとき、彼女の祖国と取り決めがなされたからな」

なんとも言い訳臭い、と小声でつぶやき、国王は苦々しい笑みを

浮かべる。話の引き合いに出された王妃は、魔族と言葉を交わす夫の姿に唇をわななかせ、そしてありったけの音量で叫んだ。

「な、にが、謝罪ですか。魔族は存在してはならない、すべては悪。それを排除するのは当然のことでしょう！？」

「黙れ、シャリア。私は動かなすぎた。お前の軽率な判断と命令で、一体何人の騎士と、魔法使いと、神官が犠牲になったと思う」

国王は一息つくと、話しについていけないといった表情の魔族達に顔を向け、簡単に説明した。

「我が妻は、スロンディア山脈の向こうにあるローザンダイト出身でな。遙かな時を生きるヴァンパイアであれば、その意味もわかるだろう」

「……なるほど、それであの癇癪か。よくまあ妻になどしようと思ったものだ……いや」

ロスティスラフは案外普通に国王へ返答すると、すっと目を細め嘲笑を浮かべる。

「人間というモノは、位が高くなればなるほど面倒な生き方を選ぶ……実に見ていて飽きない。愚かしくも思うがな」

「ロティ、その、ローザンダイト？　ってどんなとこなのさ！　俺、結局わからなんだけど！」

解説一！と叫ぶタイキの頭をぽんぽんとなでながら、ロスティスラフに代わってデルフェールが答えた。

「この大陸で最大の国土を持つ国ですよ。その半分が人の住みづらい悪環境ながら、魔族を絶対悪という思想に基づき、最高の兵団を

持つ国でもあります。ようは、一番強くて魔族嫌いな国です」
「……そこ、魔族住めるの？」
「下級魔族はほとんどおりません。しかし、眠っているものや、国もうかつに手が出せないほどの大物のごく少数は、今も暮らしていると聞きます」

デルフェールは後半、王妃に聞こえないようにさらにぼそぼそとしたしゃべり方でタイキに答えた。ふんふんと頷くと、国王が左手を軽く振るのが見え、何かの合図かと魔族達が警戒心を強めた。
国王の合図で現れたのは、黒くぴったりとした衣服をまとい、一切肌を露出させていない人間で、タイキの思い浮かぶなかで当てはまる言葉は「忍者」であった。その「忍者」は国王の足下で何かつぶやくと、現れたときと同じ唐突さで消える。

「ふむ……ヨアヒム＝バルテルス。結界周辺の山々で、山賊の出没情報の減少とともに、遭難者の帰還人数が激増しているというものは、聞いているか？」

突然国王に話を振られ、隠し通路で呆然としていたヨアヒムははっと我に返ると、国王の言葉に眉根を寄せた。

「……いえ、山賊の減少は聞いておりますが、帰還者のことまでは」
「そうか。しかしシャリア、お前は知っていただろう。この国で起こる魔族がらみ『かもしれない』報告は、まずお前に届けられるのだから」

王妃は国王の言葉に、もはや返事をする余力すらないらしい。

「帰還者たちは皆恐怖に震えながらも、自分がいかに幸運に導かれて助かったかを周りの人間に語ったという。あるものはホロウフレ

アとおぼしき揺らめきに、あるものはゴーストに、あるものはマッドハンドの群れに追われ、ひたすら走ると山のふもとだったと。しかし、改めて詳しいことを調べてみれば、彼らは魔族に遭遇しながら、魔族に襲われ負傷したとは誰も言っていない。ある時期までは、山で魔族と遭遇すれば、必ず何かしらの怪我をするか、殺害されていたのにだ。そのある時期とは、山賊の出没情報が減少した頃とぴたりと一致する」

国王は視線をタイキに向け、デルフェールにしがみついている彼を、まるで自身の子供を見るかのような穏やかな顔で、問いかけた。

「ネクロマンサー、あなたは一体、生まれ落ちてから何をしたのか、教えてくれるか？」

『ううう、ううう、ネクロマンサ、こいつ、食べていいか？』

『何、言ってるか、さっぱり。もう、聞くのいやだ』

国王が問いかけるの同時に、背後から不機嫌そうな二つの声。タイキが国王に「ちょっとすいません」と言ってそちらへ顔を向けると、うーうー呻いていたゾンビたちが、目をぎらぎらさせていた。彼らの頭の上に「おなかすいた」の六文字がばっちりと見える。

「たんま！　わかった、あとでご飯はちゃんとあげるから！　俺のこと迎えに来てくれたし、な！？　だからもうちょっと我慢しててくれ」

『う、うー……わかった、ネクロマンサ、ご命令』

しゅん、とした様子で縮こまったゾンビたちに罪悪感が湧くも、タイキはそれを振り切って国王の方へ向いた。なにか、国王がひどく驚いた顔をしているが、とにかくさっき聞かれたことを答えようと口を開く。

「えー、山賊が減ったのは、まあ山の中にごろごろいるんだし、手近だし、ってことでみんなのご飯にちょうどいいと思ったから。で、遭難者が減ったとかは、俺が全部山から出してあげてたから。ホロとかの力をを借りてね」

おいで、と手をかざせば、ホロウフレアが数体集まって輝き、見慣れた白いフクロウ姿になった。ホロは懐かしそうにタイキの腕に飛び込むと、その頬にすりよる。

『ネクロマンサー、お会いしたかったです』

「ん、ホロありがと」

「……ネクロマンサー、その、山賊に関することはあなたが宣言していましたからもちろん知っていましたが、遭難者のことは私も初耳ですよ？」

「あー、デルにはいずれ話さなきゃって思ってたんだけど……ごめん、遅くなった」

まったく、とでも言いたげな表情で、デルフェールはため息をつく。

「いや、ホロたちに頼んで追い込んでもらうのはよかったんだけど、さっき王様が言ってたゴーストさんとかマッドハンドさんとかは、半分本気で追いかけてたからね……食いたい、けど食ったら俺にしかられるって、すっごい葛藤してたわ。まあ、一杯我慢した分、疲れて帰ってきた子たちには力をわけてあげたんだけど」

その効果もあって、武装していない村人を上手くふもとまで追い出すことができればネクロマンサーからご褒美がもらえる！　と、最近ではアンデット達もゲーム感覚でやってくれていたのだという。

タイキの言葉を聞いていた人間達は、ひそひそと戸惑いもあらわに言葉を交わす。一体、魔族になにが起こったというのか。人間を食糧程度にしか見ていないはずの魔族が、人間を食べながらも、助けている？

ざわめきが波のように広がっていったところで、国王はパン、と手を打った。とたんに静まりかえる部屋の中、もう一つと言って、国王はタイキにこんな言葉をかけた。

「騎士の中に、過去、先祖がデーモンから受け、代々伝わってきた呪いをその身に宿す者がいた。今まで国の最高司祭でも解呪することができなかったそれだが……あなたは、いとも簡単に払ったという」

「え、呪いってそりゃ……あ、あ、あー！　なんかここ来るまでにやった。そういえば。あれ？　あれだれだっけデイジーさん」

「えっあっえと」

「ジャスタス＝オズボーン。オズボーン家の跡継ぎだ」

国王の言葉に頷きつつ、タイキは後ろで悠然と鎌をかまえているヴォーゴに「知ってる？」と軽い調子で尋ねた。ヴォーゴはわずかにあごを引くと、目を閉じて当時のことを思い返した。

（昔、我らがデーモンの結界まで訪れ、ディアボロ様の呪いを受けたヤツがいたが……その末裔か）

目を開け、軽く首を回すと、騎士の中でもヴォーゴを激しく睨みつけながら武器を構える一人の男が視界に映った。彼の周囲にいる人間が、必死に彼を前へ出させまいとしているらしい。その、押さえられている男から懐かしい気配がまだうっすら漂っているのを見て、あれが、と口の中でつぶやく。

「しかし、さて、どうするタイキ」
「え、どうするって、何が？」

そこで、国王とのんびりお話モードだったタイキは、突然ロスティスラフに頭を叩かれてきょとんとする。ロスティスラフはため息をつくと、デルフェールのもとからタイキをかっさらい、ひょいとその細腕で彼の身体を持ち上げた。

「おおう！」
「まったく、お前が僕たちを止めるから、すっかり調子が狂ってしまった。城を守る魔術もだいぶ回復したようだし、ここから出て行くのは少し骨が折れるぞ。この人数だと、僕の魔法も効きづらい。無理やり力でねじ伏せるのが一番ラクなんだが、それはお前が嫌なんだろう」
「……このまま帰っちゃダメかなー」
「お前がそうしたいなら、別に僕はアンデットでないからな。同胞が殺されたわけじゃないし、このままお前を連れて帰るまで。そうさせてくれるかどうかは」
「ここにいる人間次第、ってわけよぉ」

ロスティスラフの言葉を、ゼフィストリーが引き継ぐ。そんな彼女の瞳には、この場にいる人間すべてへの憎悪の光が宿っていた。タイキは、あの結界で起きた人間との戦いで、彼女がいくつもの足を折られ、傷つけられたのを思い出す。

ヴォーゴは息子のようにしていたリジェラスを殺されかけたことを、息子ながら情けないと思いつつ、傷つけた人間への恨みも深い。ゾンビやホロウフレアたちは言わずもがな。

話が終わったことで沈黙が多くなった広間では、騎士たちが戦意を取り戻し始めていた。魔族の雰囲気が代わったのを察した国王は、迷うそぶりを見せながらも、デイジーとともに少しずつ距離をとっ

ていく。ホロウフレアがそれを追いかけようとしたので、タイキは慌てて呼び寄せた。

「さて……どうしようか、タイキ」

タイキの耳元で、ロスティスラフが楽しげにささやいた。

「どうしようって、どうすりゃいーんだよマジで……！」

（２５）　～　いやーな膠着状態…（後書き）

連続投稿です！　こ、ここで稼ぐんだ……！　気力が続く限り！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2808k/

アンデット・ターン！

2011年11月27日03時14分発行